

仙台市文化財調査報告書第55集

南小泉遺跡

—青葉女子学園移転新営工事地内調査報告—

1983年3月

仙台市教育委員会
青葉女子学園

みなみ こ いづみ

南 小 泉 遺 跡

—青葉女子学園移転新営工事地内調査報告—

1983年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会
青 葉 女 子 学 園

序

日頃、文化財行政につきましては多大の御協力をいたゞき誠に感謝にたえません。

仙台市には、こうした文化財は数多く分布し、本市の歴史を語る証しとなっている貴重な遺産であります。こうした遺産を保護し継承していくことは、現代に生きるわたくしたちの責務と考えます。

とりわけ、青葉学園の建設予定地は、南小泉遺跡と呼称されているところで、本市最大の面積をもつ弥生・古墳・奈良・平安の各時代の遺物を包蔵する遺跡で、とくに考古学上の標式遺跡となっている重要な遺跡であります。

本報告は、同上の建設のための緊急発掘調査に伴う記録保存に関する報告書であります。

この事業執行に際しましては、青葉学園当局はもとより、多くの方々の御協力いたゞきました。心から感謝を申し上げます。

本書が学識者はもとより、多くの力の活用に寄与できれば幸いに存じます。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、青葉女子学園新宮工事に伴う南小泉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の作成に際して平川南（国立歴史民俗博物館）、白鳥良一（東北歴史資料館）両氏の御助言をいただいた。
3. 土壙出土の動物遺存体は高橋理氏（東北大学文学部院生）に鑑定していただいた。
4. 本書の文章・実測図中の方位は真北で統一している。
5. 本書に掲載した図1は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用したものである。
6. 本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。
7. 本報告の執筆・編集は渡部弘美が担当し、整理・実測には学生諸氏等の協力をいただいた。
8. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調査要項

遺跡名称：南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C-102）

所在地：仙台市古城三丁目311外

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員：試掘調査：加藤正範・金森安孝

本調査 渡部弘美・渡辺忠彦・佐藤裕・結城博一・工藤哲司

調査期間：試掘調査 昭和56年4月24日

本調査 昭和56年9月17日～昭和57年2月3日、昭和57年4月12日～5月20日

調査対象面積：約6,600m²

調査面積：約3,670m²

調査協力：青葉女子学園・仙台矯正管区・協和地下開発株式会社

調査参加者：田中敏 松木寿・只野宗一 宮本昌俊 斎藤三重子 大和田晶子 高橋明美

横山広美 神尾恵美子 神尾紀以子 赤間郁子 渡辺紀雄（以上整理も含む）

菅野三郎 吉田俊一 小沢勝久 溝口博康 菅原修 庄司教 鈴木勝彦 大野享

佐藤淳 高橋綾子 田村ゆかり 芦野ヒデ子 村上まつえ 佐々木由紀

佐藤和子 斎子みよ子 甲田恵子 斎藤啓子 黒滝ふくえ 鈴木えつ子

渡辺ミツエ 原田ふみ子 浅野静子

本文目次

序文	
例言	
調査要項	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の方法と経過	7
IV. 調査区の地形と基本層位	7
V. 発見遺構と出土遺物	10
1. I区の調査成果	10
2. II区の調査成果	65
3. III区の調査成果	66
4. IV区の調査成果	67
5. V区の調査成果	71
6. 遺構外の出土遺物	74
VI. 出土遺物の総括	77
1. 出上遺物の種類と分類	77
2. 出土遺物の年代と問題点	89
3. 積書文字について	95
VII. 発見遺構の総括	96
1. 住居跡について	96
2. 極立柱建物跡について	97
3. 溝跡について	98
4. 井戸跡について	99
5. 土塙について	99
6. 遺構の構成について	101
緒・まとめ	102

I. 調査に至る経過

仙台市東部に位置する南小泉遺跡周辺は宅地化が進みつつある地域であるが、田畠が散見する地域もある。仙台バイパスから太平洋側にかけては広大な田園風景もみられ、遺跡の保存については良好な部類に属する地帯である。

昭和56年8月、青葉女子学園々長福間信行より同学園新営工事に係る南小泉遺跡の発掘調査依頼が仙台市教育委員会に提出された。この工事地内は仙台市古城二丁目311に所在し、宮城刑務所作業所として使用されていた地域で現状は畠地となっていたところである。昭和52年11月に仙台市教育委員会が実施した遺跡踏査で土師器・須恵器片が広範囲に散布することが確認されていた地点である。(註1)

以上の点から仙台市教育委員会では学園新営工事地内の試掘調査を実施することとした。昭和56年4月24日に実施し、土壌1基を確認し多量の土器類を採集した。これらのことから再度協議を行なった結果、開発部分の事前調査を行なうことになり、昭和56年9月17日より記録保存を目的とした調査を実施した。

II. 遺跡の位置と周辺の環境

南小泉遺跡は東北本線仙台駅より東南約3.5kmの地点、仙台市遠見塚一丁目・二丁目・南小泉二丁目・古城三丁目・南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ目に所在し、東西約1.5km、南北約1kmの範囲を有する。

遺跡周辺は仙台平野の中央部に位置しており、付近一帯は広大な沖積地が形成されている。遺跡南方3km地点では広瀬川と名取川の合流点がみられ、この両河川周辺には自然堤防、後背湿地が発達しており旧河道も観察される。遺跡はこの自然堤防上に立地しており、標高は10m前後である。

遺跡が周知されたのは昭和14年頃で、霞ノ目飛行場拡張工事の際に多くの遺物や竪穴住居跡が発見されてからである。遺物には弥生土器・土師器・石器などがあり、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であることが確認され、学会でも注目されるにいたった。その後、宅地開発や都市計画関係等での発掘調査が実施され古墳時代から平安時代の遺物や遺構が発見され、各時代にまたがる遺跡であることが確認されているが、広大な面積を有する遺跡であることからも未だ不明な点も多い。

今回の調査地点は遺跡の南西端部に位置する。標高は10m前後である。調査地点を中心とし

(註2)

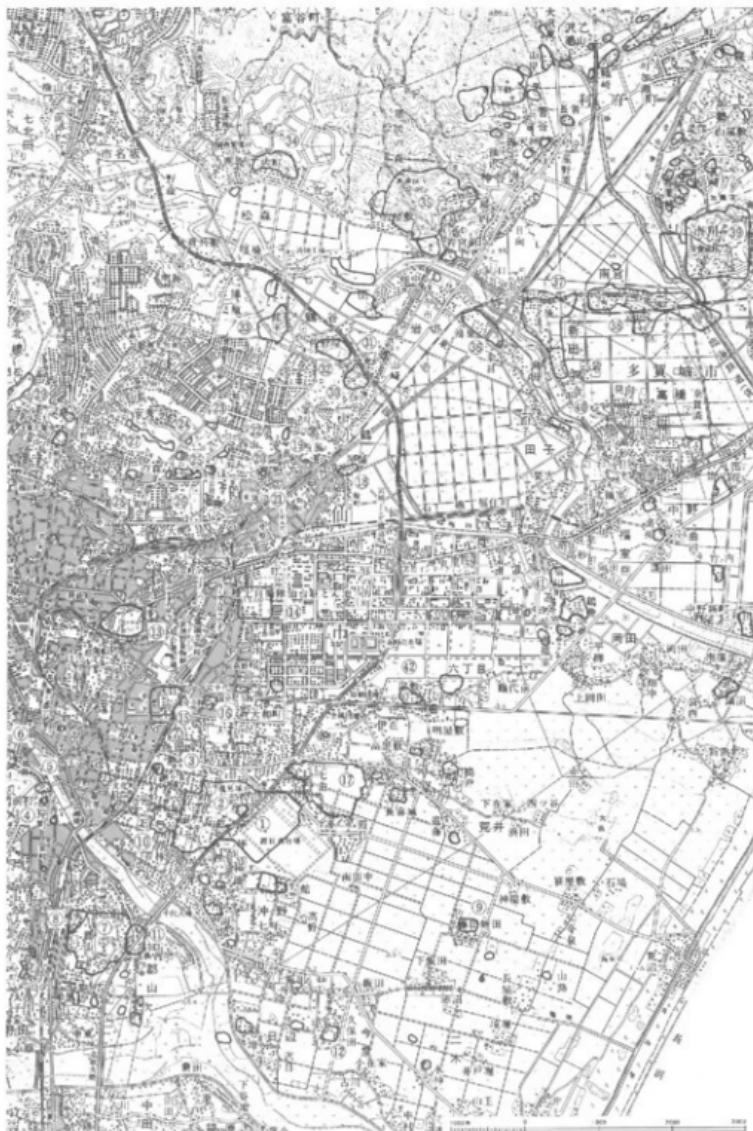


図1 周辺の遺跡

て西側と東側へゆるやかな傾斜がみられ舌状に張り出した自然堤防上に位置していると考えられる。特に、西側は傾斜が強く後背湿地との接点部が考えられる。昭和52年度の遺跡踏査や試掘調査で土師器や須恵器が採集されており、平安時代の遺構の存在が予想された地点である。

当遺跡周辺には多くの遺跡が分布している。特に広瀬川・名取川周辺にみられ、多くは両河川の自然堤防上に立地している。時代別にみると、旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていないが、弥生時代になると広瀬川南岸に西台畠遺跡がみられる。遺構として單棺墓・土塚墓が検出されている。他には浜堤に立地する藤田新田遺跡があるが、数的には少ない。古墳時代になると遺跡数も増加し遠見塚古墳を中心とする古墳羣が開始され、法船塚古墳・猪塚古墳・兜塚古墳などの大小の古墳がみられる。これらに随連して集落の増加も考えうるが、南小泉遺跡が中心となっていたようである。古墳時代も終末の頃、広瀬川南岸の自然堤防上に郡山遺跡が造営されている。陸奥国の国府である多賀城以前の官街遺跡であることが確認され、方四丁にわたる柵木列や建物群が検出されている。奈良時代になると、南小泉遺跡北方1.5km地点に陸奥国分寺・同尼寺が造営される。前述の郡山遺跡を含めて、当地域は早い時期から律令社会に組みこまれていたことが推察される。

このように、南小泉遺跡は弥生時代から連続と続く遺跡群で構成されていることが知られ、古代における一中心地域であったことがうかがわれる。

註1 仙台市教育委員会：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第13集

註2 仙台市教育委員会：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第35集

＊ 仙台市教育委員会：「年報2」『仙台市文化財調査報告書』第28集

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代	
1	南小泉遺跡	集落	自然堤防	新石器時代-平安	22	安達寺下南路	墓	丘陵斜面	奈良	
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(中期)	23	安達寺中岡古跡	墓	丘陵斜面	平安	
3	法船塚古墳	円墳	自然堤防	古墳(後期)	24	安達寺配水池地盤	水	丘陵斜面	奈良	
4	兜塚古墳	後方後円墳	自然堤防	古墳(中期)	25	江邊	墓	丘陵斜面	平安	
5	宗福寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳-奈良	26	神明社	古跡	水路	丘陵斜面	平安
6	曲山横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳-奈良	27	少子廟	古跡	丘陵斜面	平安	
7	郡山遺跡	官道	自然堤防	古墳-奈良	28	庚申前里跡	空	丘陵斜面	奈良	
8	西台畠遺跡	邑舍地	自然堤防	奈良-古墳	29	瓦井自然災害	墓	丘陵斜面	平安	
9	藤田新田遺跡	邑舍地	浜堤	奈良	30	西浦遺跡	官街?・集落	丘陵	奈良-平安	
10	若林城跡	城跡	自然堤防	中世	31	平入塚古墳	円	丘陵	平安	
11	北口城跡	城跡	自然堤防	中世	32	麻原塚遺跡	包含地	丘陵	平安	
12	今泉城跡	集落・城跡	自然堤防	奈良-平安-中世-平安	33	若森城跡	城	丘陵	中世	
13	国分院跡	城跡	丘陵	平安	34	松森城跡	城	丘陵	中世	
14	南日城跡	城跡	自然堤防	中世	35	野切城跡	城	丘陵	中世	
15	陸奥國分寺跡	寺院	河床平野	奈良	36	鴻ノ巣遺跡	包含地	自然堤防	古墳-平安-中世	
16	陸奥國分寺跡	寺院	自然堤防	奈良	37	野田城跡	包含地	自然堤防	古墳-中世	
17	仙台東堀塩理跡	塩理跡	沖積平野	奈良	38	山上遺跡	包含地	自然堤防	古墳-奈良-平安	
18	小朝城跡	城跡	丘陵	中世	39	多賀城跡	官衙(国衙)	丘陵	奈良-平安-中世	
19	藤田横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳-奈良-平安	40	下池路	包含地	自然堤防	平安	
20	室内古墳	円墳?	丘陵	古墳(後期)	41	相田遺跡	包含地	自然堤防	平安	
21	大蔵寺墓群	墓群	丘陵斜面	古墳(中期)	42	北山散逸路	包含地	沖積平野	近世	

表1 遺跡地名表



図2 遺跡周辺地形

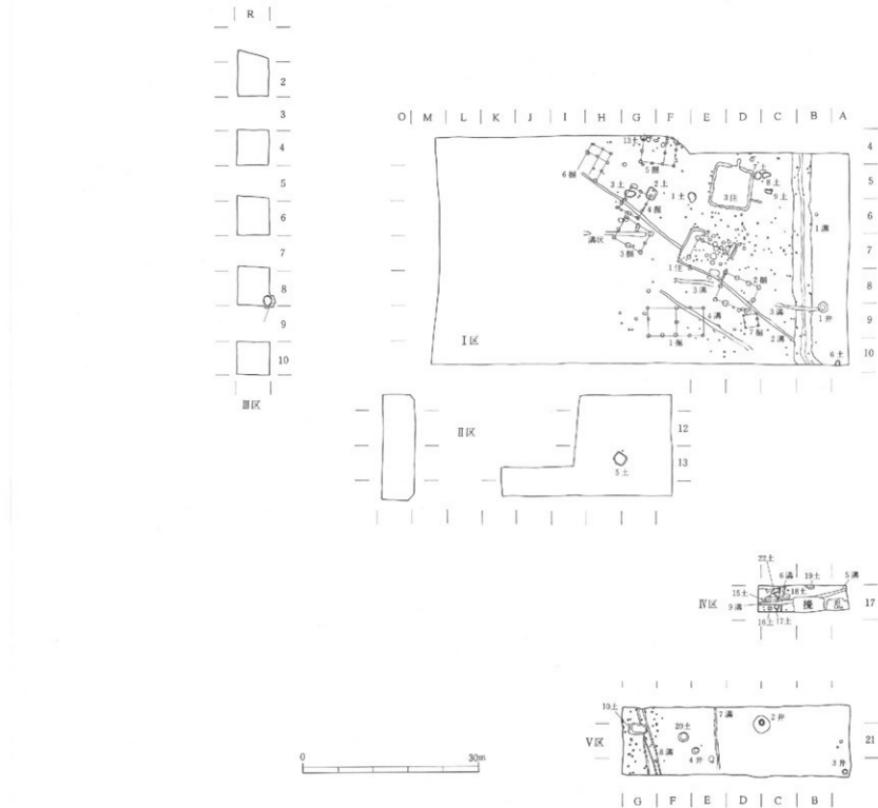


図3 造構配置

III. 調査の方法と経過

今回、提出された青葉女子学園新營工事の開発総面積は約19,000m²にのぼる。この中で発掘の対象としたものは校舎等の構築物の建つ部分で面積として約7,000m²である。

調査区域は建物の配置から便宜的にI～Vの5区に分け、任意に南北（真北線から西へ約13°偏する）に基準線を設け6×6mを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北軸にアラビア数字、東西軸にアルファベット文字を用いた名称を使用した。

調査は発掘開始時期との関係から二年度にまたがることが予想され、56年度はI・II区を対象に調査を実施し、III～V区は遺構確認のみを行ない57年度に調査を行なうことにしていた。I・II区の調査は昭和56年9月17日より開始した。表土排除は重機を使用し、後人力で遺構確認を進めていった。調査区全体はかなり深めの天地返し作業が行なわれており攪乱が著しく遺構確認面まで80cm程の深さを計る所もあり遺構の遺存状況は全体的に不良であった。

遺構確認はI区からV区へと進めていったが、II・III区のように部分的な調査で終了した地点もある。遺構が数多く確認されたのはI区で特に中央部から東側に集中して確認された。大形の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土壙が検出されている。昭和57年2月3日にI区の調査が終了し、56年度分の調査を終了した。

57年度分の調査として4月12日よりIV・V区の調査を開始した。石組みの井戸跡・溝跡・土壙などが確認され、調査が終了したのは5月20日である。最終発掘面積は約3,670m²である。

IV. 調査区の地形と基本層位

調査区は広瀬川北岸の自然堤防から後背湿地に接する地点に位置する。現状は畠地で全域にわたり40～80cm程の天地返し作業がみられ著しい攪乱を受けているが、地表面は四方にわたりなだらかな傾斜面をみせている。

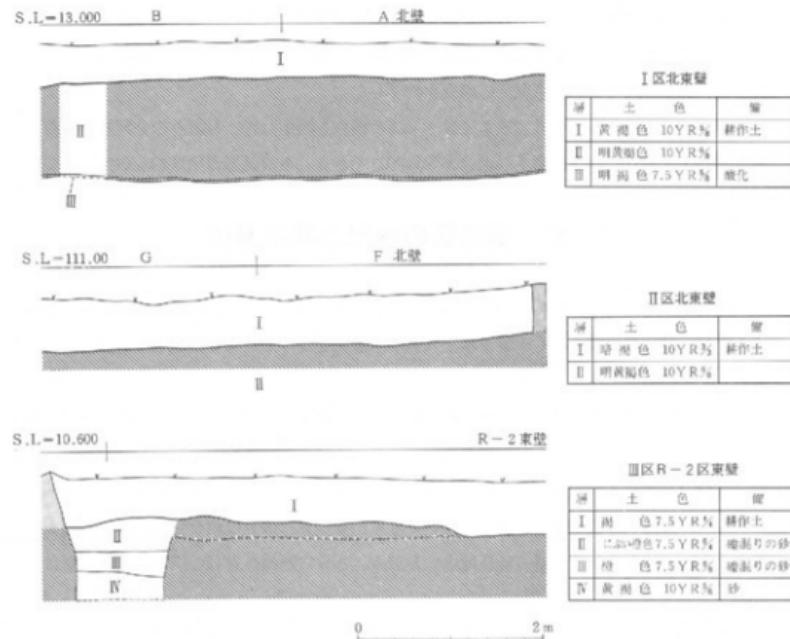
調査区の地形は大きく調査I・II・IV・V区と調査III区に分けられる。前者は上述の自然堤防上に位置するものである。微地形を観察すると、北側から南側へかけて傾斜がみられ、I区中央部付近を中心として東西へも傾斜がみられる。II区では西側へ、IV・V区では東側へ傾斜がみられ、馬背状の微高地が形成されていると考えられる。後者は後背湿地に接する地点に位置するもので、西側への傾斜の延長地点にあたる。さらに西側へ進むと高まりがみられはじめる。

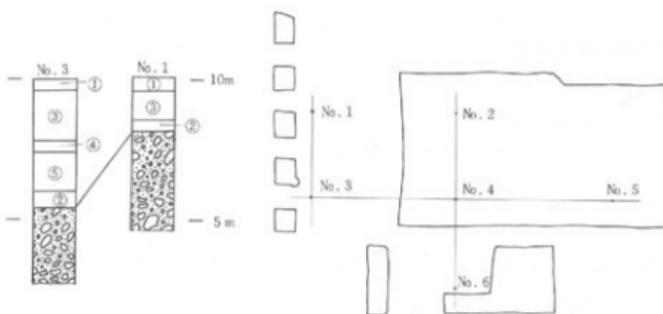
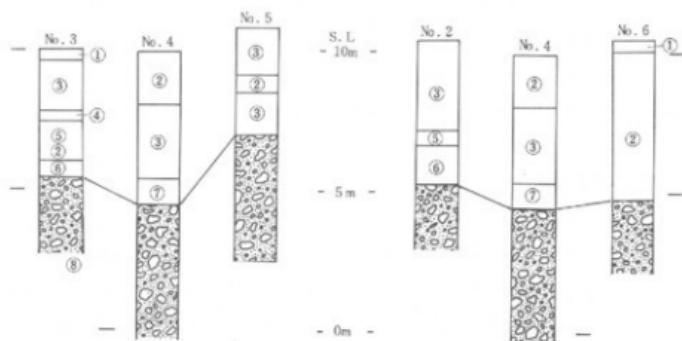
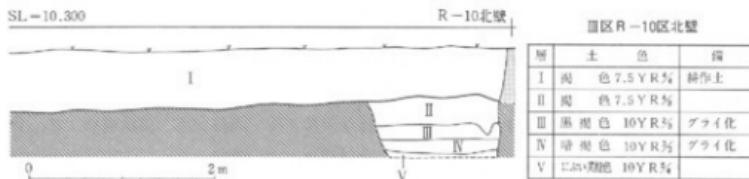
遺構はこの耕作土（I層）下部で確認されている。ほとんどの遺構は削平を受けている。遺

構確認面はこのⅡ層面のみである。また、Ⅰ層下部の地山土を4層まで確認したが、地山形成の形態に違いがみられた。大きくみるとシルト土層と砂層・グライ土層の違いで、これは上述の自然堤防と後背湿地の立地からくるものと考えられる。自然堤防上の層成は褐色系のシルト層で厚く堆積し広がっており、後背湿地との接地部では小礫を含む粗砂の層を主として傾斜面向かって広く分布している。

次に、調査区内でボーリング調査が行なわれているので資料を紹介しておく。ボーリング調査は計7ヶ所実施しており、地表面より最高10.25mまで掘り下げている。

土層は10層に細分されているがシルト層と砂礫層が主体を占めており、間層として他の層が分布している。全体的にみて表土層から砂質・粘土質シルト層の上部は水平堆積を示し、下部の砂礫層では傾斜をみる特徴がある。No. 2-No. 6とNo. 3-No. 6では同様な堆積状態を示しているが、No. 1-No. 3では砂礫層が急な傾斜をみせている。No. 4では深掘りを行なっているが海拔下になども砂礫層が観察されている。また、表土微地形と砂礫層上面の状態に共通性がみられた。





- ① 表土
- ② 砂質シルト
- ③ 粘土質シルト
- ④ 砂礫
- ⑤ 中砂
- ⑥ 硬湿り中砂
- ⑦ 細砂
- ⑧ 砂礫

図5 土層柱状図

V. 発見遺構と出土遺物

発見された遺構には竪穴式住居跡2軒・掘立柱建物跡7棟・溝跡10条・溝状遺構3基・井戸跡4基・土壙18基・柱穴・ピット多数がある。遺構は地山面で確認された。なお、調査区一帯はかなり深めの天地返し作業が行なわれており消滅した遺構の存在も十分に考えうる。

遺物は整理箱にして50箱程の出土量である。弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・硯・瓦・石製品・金属製品・獸骨などがある。土器類が大半を占めており、ロクロ使用のものがほとんどである。

調査は大きく5区に分け実施している。以下、調査区ごとに記述して行く。

1. I 区の調査成果

調査区北東部に位置する。現状は畠地となっていた。地形はほぼ平坦であるが南西方向へゆるやかな傾斜がみられた。調査においてはE・Fラインを境として東側と西側へ傾斜をもつ微地形がみられ、主なる遺構はこのE・Fラインを中心にして確認された。発見された遺構には竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡7棟・溝跡4条・溝状遺構1基・井戸跡1基・土壙8基・柱穴ピットがある。

1) 住居跡と出土遺物

1号住居跡

調査段階で住居間に重複があると考えたため1号・2号住居跡としていたが、本来は一軒の住居跡であることが確認され2号住居跡は欠番となっている。

〔平面形〕北辺と東辺の一部が削平をうけ不明な点はあるが方形を基調とする東西に長い隅丸方形を呈する。

〔重複関係〕西辺から南辺にかけて2号溝跡と東辺で2号掘立柱建物跡と切り合いがあり両者を切っている。周溝部においては中小のピットに切られている。

〔規模〕東西軸で8.69m・南北軸で6.67mを計る。面積57.96m²を有する。南北軸東側の方向は約N-38°-Eである。

〔堆積土〕堆積土はほとんど削平されており周溝部を含めて3層確認されたのみである。粘土質のシルト層である。

〔壁面・周溝〕地山を壁としているが削平のためほとんど残存しておらず詳細は不明である。周溝は各辺にめぐらしているが削平のため途切れている部分がある。上幅14~42cm、底面幅8~

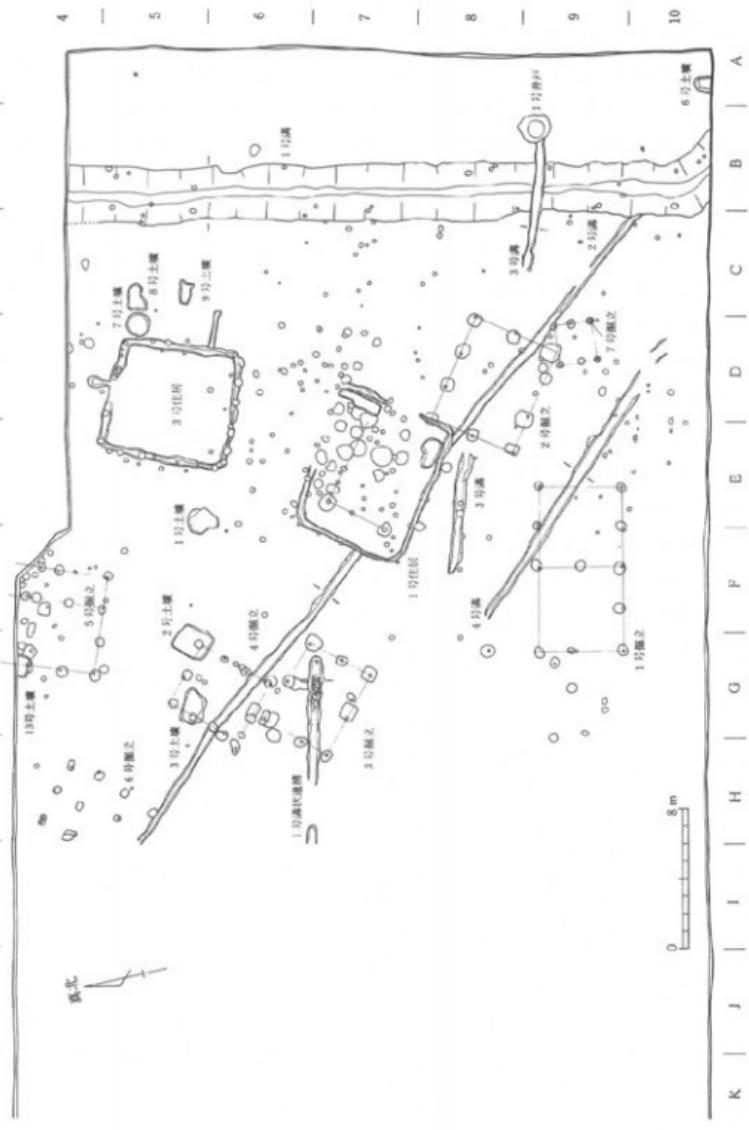


图 6 I区勘探配置

30cm・深さ2~12cmを計る。

〔床面〕部分的に残存するのみである。地山面を床面としておりほぼ平坦である。床面確認時ににおいて大小の土壤・ビットを検出したが住居に伴うものか不明なものが多い。

〔柱穴〕住居跡において計42個のビットを検出した。P.6とP.7は住居角や内側に位置し掘り方と柱痕跡が確認され柱穴と考えられる。また、前述の柱穴との位置関係や深さからP.11も柱穴と考えられる。これらのことから柱穴は住居対角線上に位置する柱で構成され4本柱であったと考えられるが、他の1本については不明である。P.6とP.7の柱間寸法は360cmを計りP.6とP.11は約500cm程である。P.6とP.7の柱痕跡は円形を呈しており径はそれぞれ36cm・34cmで深さは52cm・75cmを計る。

〔その他の施設〕住居東辺北側と南辺東側の周溝に接して貯蔵穴状ピット二基（貯蔵穴・南側貯蔵穴）を確認した。

貯蔵穴一平面形は長方形を呈し北側部がやや細くなっている。長軸256cm・短軸76cm・深さ24cm程を計る。底面はほぼ平坦で南側に浅い段をもつ。土師器壺類が多量に出土しており墨書き器もみられる。

南側貯蔵穴一平面形はやや不整な梢円形を呈する。長軸180cm・短軸112cm・深さ34cmを計る。土師器・須恵器が出土している。

〔出土遺物〕床面からの遺物はなく堆積土・周溝・二基の貯蔵穴状ピットからの出土である。特に貯蔵穴状ピットからは多量の遺物が出土している。土器類では土師器壺・壺・須恵器壺・甕・壺があり、金属製品では古銭・鈎先などがある。土師器壺の中には墨書き土器が多く含まれ「比」・「升」・「染」・「守」などの文字が確認されている。また、土師器の中に灰釉陶器の影響を受けたと考えられる器形をもつものがある。土器類の中で切り廻し技法が判明し得えたものは全て回転糸切り技法であった。

南北断面

層	土 色	七 仕	編 号
1	黑 黄 色7.5 YR 5/4	粘土質シルト	
2	褐 黄 色 10YR 5/6	粘土質シルト	
3	灰 黄 色7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
1	褐 色7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
P	かい青褐色 10YR 5/6	砂質シルト	
3	黑 黄 色 10YR 5/6	粘土質シルト	炭化物を含む
3	暗 褐 色 10YR 5/6	粘土質シルト	
5	黑 黄 色 10YR 5/6	粘土質シルト	
3	褐 色7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
P	褐 褐 色7.5 YR 5/6	粘土質シルト	
3	深 黄 色 2.5 Y 5/6	砂質シルト	
4	黑 色10YR 1/6	シ ル ト	無
5	かい青褐色 10YR 5/6	粘土質シルト	

柱穴註記

	P.6(奥り方)	P.6(柱 60)	P.7(奥り方)	P.7(柱 80)	P.11
平面形	清 円 形	円 形	椭 圆 形	円 形	不整円形
規 模	96 × 68	36 × 34	73 × 72	34 × 32	90 × 101
深 度	52	52	75	75	37

(単位cm)

表2 1号住居跡観察表

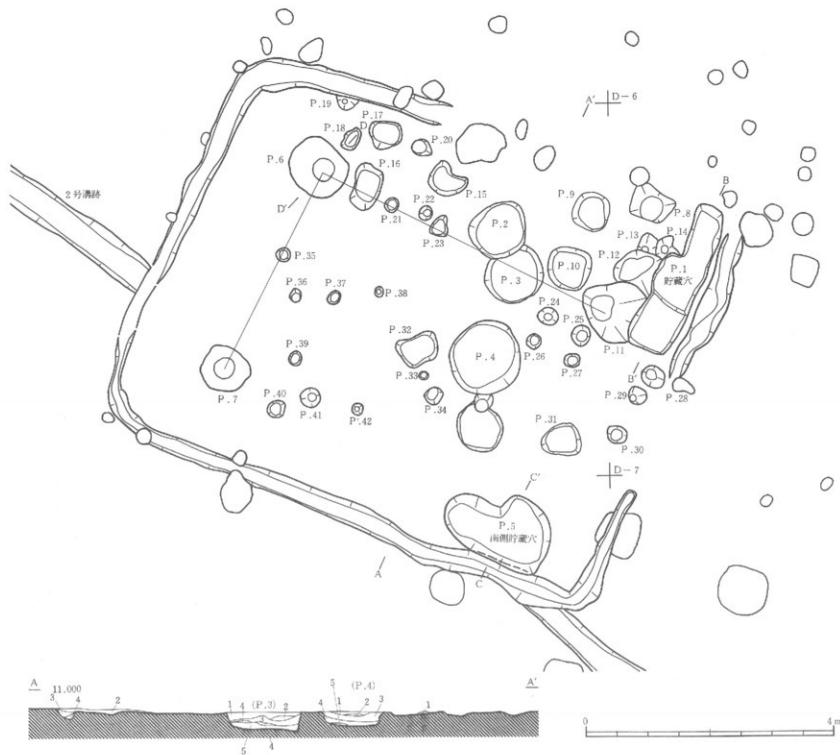
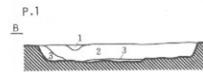
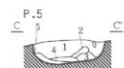


図7 1号住居跡実測図



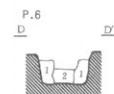
断面註記

層	色	土 性	備 考
1	黄褐色 10YR 5/4	シルト	
2	黒褐色 10YR 4/2	シルト	植物を多量に含む
3	黄褐色 10YR 5/4	シルト	



断面註記

層	色	土 性	備 考
1	黒褐色 7.5YR 4/2	粘土質シルト	地盤・遺物を含む
2	黒褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	
3	明黄褐色 10YR 5/4	黄土	
4	黒褐色 7.5YR 4/2	粘土質シルト	遺物を含む
5	明黄褐色 10YR 4/2	砂質シルト	



断面註記

層	色	土 性	備 考
1	浅黄褐色 2.5YR 5/2	粘土質シルト	
2	黑褐色 10YR 5/2	粘土質シルト	浅黄色土をブロックに含む

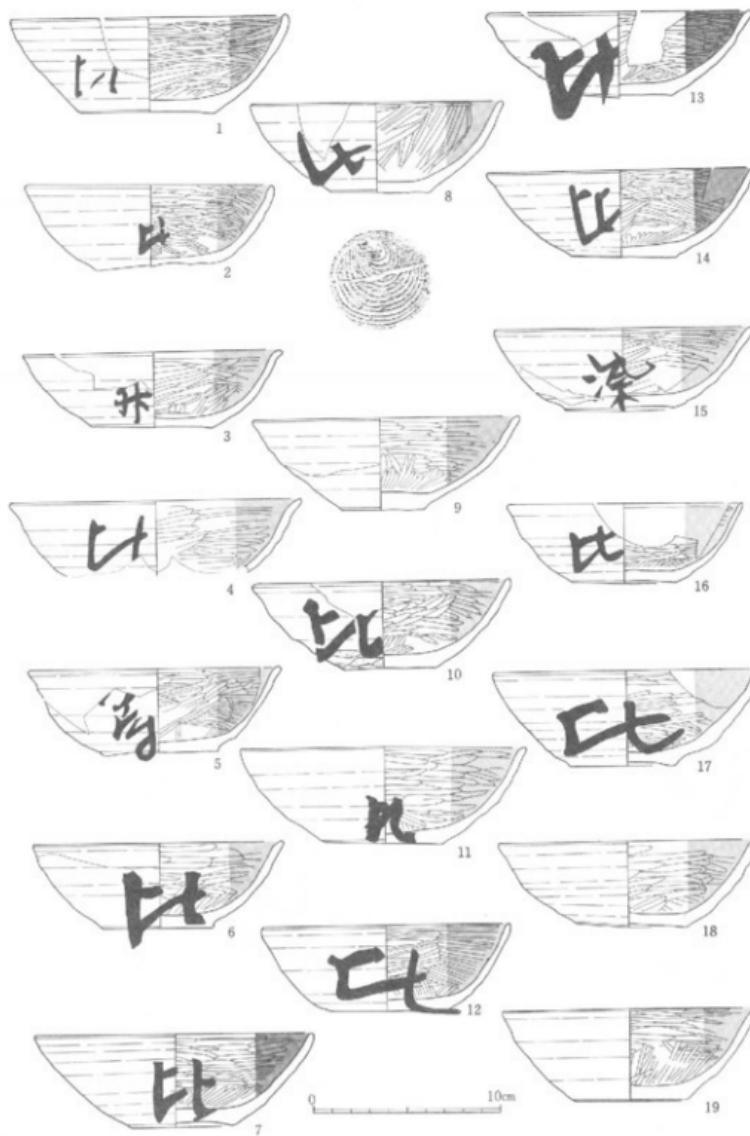


図8 1号住居跡出土遺物Ⅰ

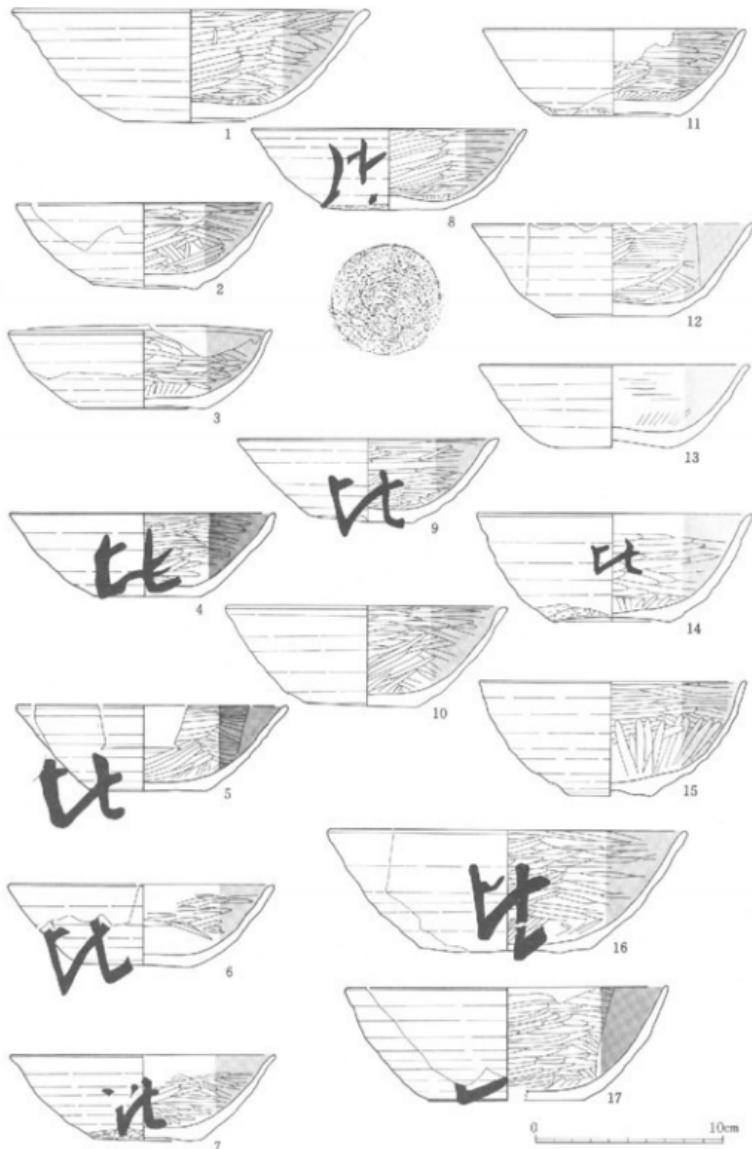


図9 1号住居跡出土遺物Ⅱ

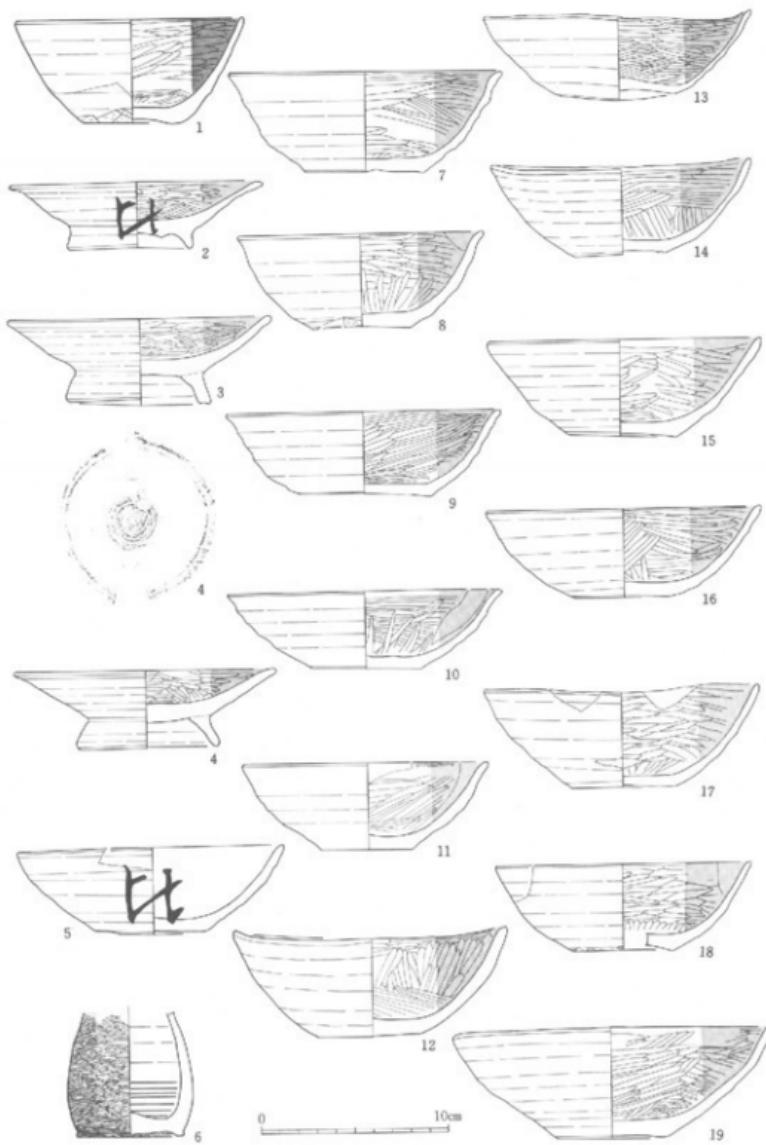


図10 1号住居跡出土遺物Ⅲ

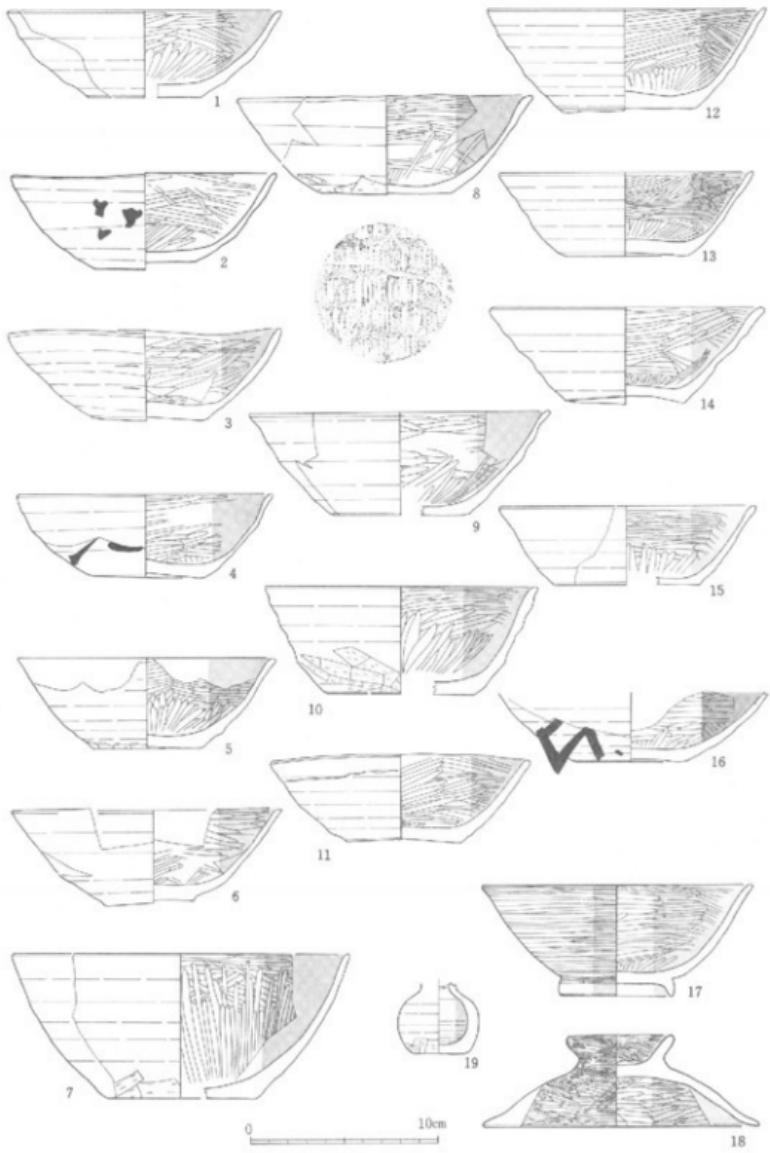


図11 1号住居跡出土遺物IV

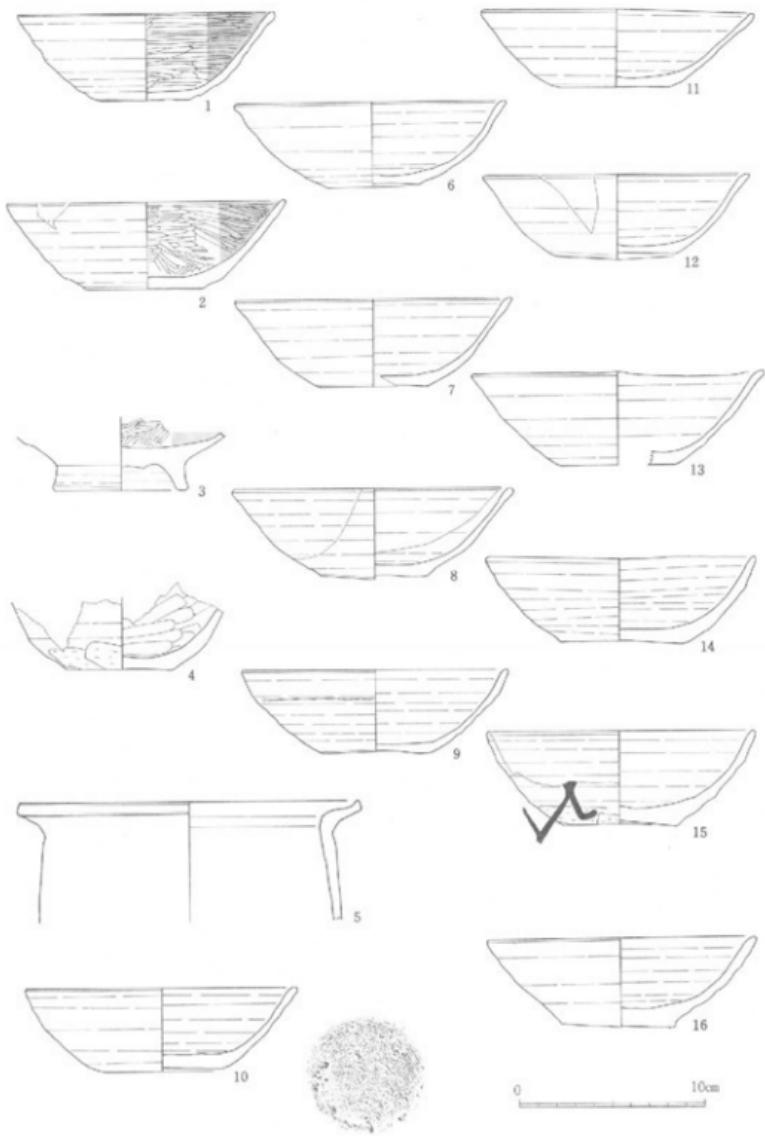


图12 1号住居跡出土遺物V

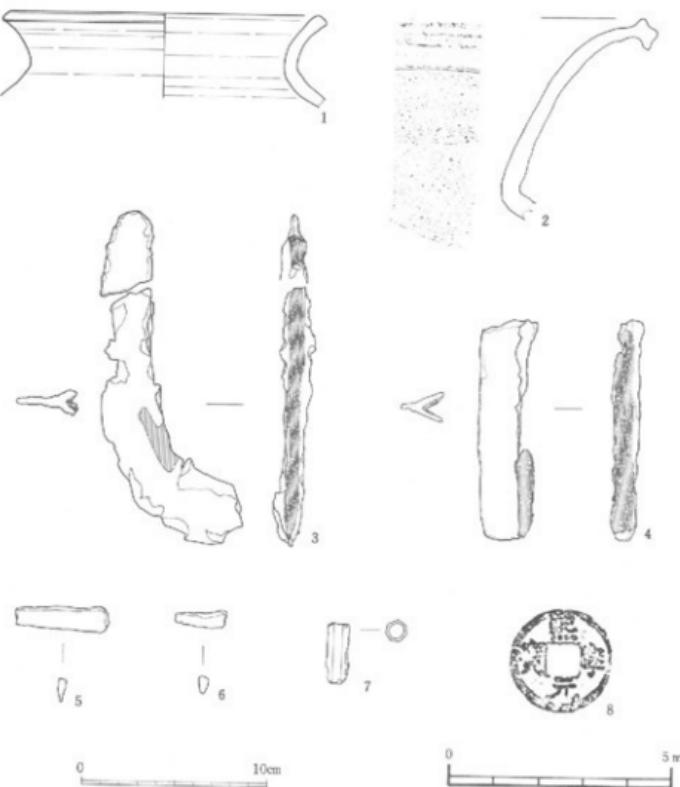


図13 1号住居跡出土遺物VI

土 師 器						赤 燐 上 器						
环			高台付环・皿			甕			环			
口縁	体部	底部	(温書)	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部
624	454	129	比・8	4	0	0	69	630	29	30	24	13

頸 惠 器					
环			甕		
口縁	体部	底部	(温書)	口縁	体部
100	103	29	比・1	3	11

表3 1号住居跡土器破片集計

回・番	種別	器種	所位	外面調整	内面調整	L径	底径	高さ	分類	備考
8-1	土師器	环	鉢底穴 部	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.7	7.1	5.1	BⅢ	「比」の墨書
-2	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.3	6.6	4.4	*	「比」の墨書
-3	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.8	6.5	4.0	*	「比」の墨書
-4	*	*	*	クロ調整 底部欠損	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	15.6	—	—	*	「比」の墨書
-5	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右) 後手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.4	6.2	4.5	BⅢ	「一」の墨書 墨書き
-6	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.4	5.9	4.6	*	「比」の墨書
-7	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.8	5.5	5.0	BⅣ	「比」の墨書
-8	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.3	5.2	4.8	*	「比」の墨書
-9	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.1	4.4	4.9	*	
-10	*	*	*	クロ調整 底部-手-底部-手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.6	5.9	4.7	BⅢ	「比」の墨書
-11	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	15.2	6.4	5.2	*	「比」の墨書
-12	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.1	6.1	4.6	*	「比」の墨書
-13	*	*	*	クロ調整 底部-手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.0	5.5	4.8	*	「比」の墨書
-14	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.3	5.5	4.6	*	「比」の墨書
-15	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.7	5.9	4.5	*	「染」の墨書
-16	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	12.5	5.7	4.3	*	「比」の墨書
-17	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.2	5.6	5.1	*	「比」の墨書
-18	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.8	5.9	4.6	*	
-19	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.6	6.0	4.9	*	
9-1	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	19.0	6.6	6.0	BⅣ	
-2	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.6	5.5	4.6	BⅢ	
-3	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.0	6.7	4.5	*	
-4	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.1	5.6	4.5	*	「比」の墨書
-5	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.5	6.2	4.6	*	「比」の墨書
-6	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-不明) 黒色処理	14.2	6.1	4.3	*	「比」の墨書
-7	*	*	*	クロ調整 底部-手-底部-手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.2	5.8	4.6	*	「比」の墨書
-8	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右) 底部-手-底部-手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-一向向) 黒色処理	14.6	6.1	4.4	*	「比」の墨書
-9	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り、手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-横横位) 黒色処理	13.9	5.5	4.5	BⅤ	「比」の墨書
-10	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	14.9	5.7	5.4	BⅢ	
-11	*	*	*	クロ調整 底部-手-底部-手持ち-ハラケズリ	ヘラミガキ(横位-放射状) 黒色処理	13.9	6.9	4.7	*	
-12	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(体部-底面) 黒色処理	15.0	6.1	4.9	*	
-13	*	*	*	クロ調整 底部-回転糸切り(右)	ヘラミガキ(体部-底面) 厚らぬため削りとしない	14.3	6.0	4.4	*	

(単位 cm)

表4 1号住居跡掲載遺物観察表I

国・番号	別	器種	部位	外 観 特 徴	内 観 特 徴	II形	III形	IV形	V形	備考
9-14	土師器	杯	鉢底穴 底	ロクロ凹窪、体部下端一 底部一側切り後手持ちハラケズリ	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.6	6.1	5.8	BⅢ	「此」の墨書き
-15	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一子持ちハラケズリ	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.2	4.5	6.1	BⅢ	
-16	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	19.2	9.1	6.4	BⅢ	「此」の墨書き
-17	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	17.2	8.2	6.1	*	「此」の墨書き
10-1	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	12.1	4.8	5.6	*	
-2	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り付高台	ヘラミガキ(横位・複数位) 黒色地埋	13.4	6.5	3.0	I	「此」の墨書き
-3	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り付高台	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.0	7.5	4.6	II	
-4	*	*	*	ロクロ凹窪 付高台	ヘラミガキ(横位・底面一面削) 黒色地埋	13.9	6.1	4.1	*	
-5	赤土器	16	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・底面一面削) ナヌスヘラミガキ?	14.2	6.0	4.7	*	「此」の墨書き
-6	土師器	小 瓶	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り付高台	付高台一側面ロクロ凹窪 (へり状)足	—	6.1	—	—	
-7	*	浮 横	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.4	6.2	5.4	BⅢ	
-8	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り 底部下端一側面斜切り	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	12.9	5.1	5.0	BⅢ	
-9	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	6.9	4.4	BⅢ	
-10	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	5.8	4.1	*	
-11	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	15.0	4.8	4.6	BⅢ	
-12	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	5.4	5.3	*	
-13	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.1	6.0	4.5	BⅢ	
-14	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・複数位) 黒色地埋	13.7	4.8	4.7	BⅢ	
-15	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・複数位) 黒色地埋	14.5	5.7	5.2	*	
-16	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	5.1	4.7	*	
-17	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	5.6	5.1	*	
-18	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り 手持ちハラズ?	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	13.5	5.3	4.6	BⅢ	
-19	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	16.8	5.9	6.0	BⅢ	
11-1	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.0	5.9	4.7	*	
-2	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.2	5.3	5.1	*	「此」の墨書き
-3	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.5	5.8	4.9	*	
-4	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	13.6	5.8	4.5	BⅢ	無縫合
-5	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	13.7	5.9	4.9	*	
-6	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	14.9	4.7	5.0	BⅢ	
-7	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	18.0	7.9	7.7	*	
-8	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	13.6	6.7	5.3	BⅢ	
-9	*	*	*	ロクロ凹窪 底部一側面斜切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色地埋	16.0	7.2	5.6	*	

表 5 1号住居跡揭露遺物観察表II

回・番	種別	器種	層位	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底厚	高さ	分類	備考
11-10	土師器	杯	南野遺土理	ロクロ調整 底部下端一部・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	14.4	7.8	5.8	BⅡ	
-11	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右) 「X」の刻線	ヘラミガキ (横位・放射性) 黒色処理	13.7	6.0	4.5	BⅡ	
-12	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右) 後一部手持ちヘラケズリ	黒色処理	14.7	7.1	5.4	*	
-13	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	13.5	6.5	4.5	*	
-14	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	14.5	6.3	5.2	*	
-15	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	13.5	7.7	4.2	*	
-16	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右) 「X」の刻線	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	—	5.7	—	「北」の墨跡	
-17	*	甕	*	口縁～高台一回転ヘラミガキ 高台二～三周立	ヘラミガキ (横位・放射状) 黒色処理	14.3	6.0	5.9		
-18	*	甕?	*	ツマミ～L字跡へラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ (上部・放射状、 下部一横位) 黒色処理	14.1	5.8	4.9		
-19	*	甕	*	ロクロ調整 口縁部欠損 全体下端～底部一手持ヘラケズリ	ロクロ調整 黒色処理	—	2.8	—	ミニチュア土器	
12-1	*	杯	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ヘラミガキ (横位・一方向) 黒色処理	13.6	4.7	4.6	BⅣ	
-2	*	*	*	ロクロ調整 底部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ (横位・一方向) 黒色処理	14.8	6.3	4.6	BⅡ	
-3	*	高台付皿	周溝	ロクロ調整 底部一糸切り 高台は付合台で底縁はナメ調整	ヘラミガキ (縱横位) 黒色処理	—	7.0	—		
-4	*	甕	埋上	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右) 後ヘラケズリ	ロクロ調整 底面ナメ調整	—	5.7	—		
-5	*	*	1層	ロクロ調整 後ナメ調整	ロクロ調整	18.0	—	—		
-6	酒壺器	杯	貯藏穴埋土理	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整	14.3	4.9	4.5	IV	
-7	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.7	5.8	4.7	*	
-8	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.7	5.6	4.9	*	
-9	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.1	6.2	4.3	Ⅴ	
-10	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.4	6.2	4.4	*	
-11	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.4	5.9	4.2	*	
-12	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.1	6.5	4.5	*	
-13	*	*	南野成理	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	15.5	6.2	5.0	*	
-14	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.2	6.5	4.4	*	
-15	*	*	*	ロクロ調整 底部下端一手持ヘラケズリ、底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.2	6.0	5.0	*	
-16	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り (右)	ロクロ調整	14.2	6.1	4.7	IV 「北」の墨跡	
13-1	*	甕	1層	ロクロ調整	ロクロ調整	17.1	—	—		
-2	*	*	*	口縁～平行タタキ後 ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—		
-3	鉄製品	鍔先	苔覆穴埋上	欠損品 U字状を呈する。現存長17.7cm、本部が残存						
-4	*	*	*	欠損品 13-3と同一個体と思われる。焼化した木質部がみられる。現存長11.9cm						
-5	*	刀子	*	欠損品 平根下造り 現存長4.9cm 捻幅4mm 刀幅1.2mm						
-6	*	*	*	欠損品 平根平造り 現存長2.8cm 捻幅5mm 刀幅9mm						
-7	銅製品	神田町品	P.18	表面に錆色がみられる。金網製 現存長3.2cm 梱約1cm 厚さ約1mm 表面七角形						
-8	*	古鏡	1号	熊家元宝 北宋錢 制譜年1068年 書体一貫						

表6 1号住居跡揭露遺物観察表Ⅲ

3号住居跡

〔平面形〕方形を基調とするやや南北に長い隅丸方形である。各辺の長さが違うため歪になっている。

〔規模・改築〕東辺長6.54m・西辺7.46m・南辺6.48m・北辺6.04mを計る。面積約43.6m²を有する。南北軸西辺の方向は約N-21°-Eである。当住居跡は規模を変へずに住居本体の改築とカマドの作り替えが行なわれている。改築以前については「床面下の状況」で記述する。

〔堆積土〕削平が著しく床面上においては1層確認したのみである。

〔壁・周溝〕地山を壁としているがほとんど残存していない。周溝は各辺にめぐっているが、北側部のカマド付近で一部途切れている。上幅36~58cm・底面幅20~43cm・深さ10~54cmを計る。

〔床面〕床面は削平と一部掘りすぎたため不明な点はあるが、ほぼ全面に貼床が検出された。貼床はにぶい黄褐色と灰白色のしまりの強いシルト質土で構成され、厚さは1~8cm程で版築状にかたくつきかためられている。床面上では数個の小ピットが確認されたのみである。

〔柱穴〕住居周溝内において計25個のピットを検出した。床面上で柱穴となりうるピットが確認されず、周溝内のピットが柱穴となっていたと考えられる。周溝南辺部のピットはほぼ等間隔の配列がみられP.10~P.17は柱穴と考えうるが、他の周溝内のピットは規模・配列とも不揃いのものが多く、柱穴と断定するにいたらず、全体的な柱穴の配置は不明である。

〔カマド〕北壁中央部に付設されている。燃焼部は焼土が検出されたのみで残存しておらず、煙道部のみの確認である。煙道部は壁より120cm程のびるもので、先端へ向うにつれて幅が広くなり先端部は丸くおさまっている。また、このカマドは煙道部において作り替えが確認されている。古い煙道部は燃焼部付近より北側へ傾斜をもち低くなってしまっており、煙り出し部で40cm程の深さをもつ。新しい時期の煙道部は古い煙道部の埋土上に構築され、北側へかすかに傾斜をみると深さは18cm程と浅く、煙道部は10cm程長いものである。

	P.1	P.2	P.3	P.4	P.5	P.6	P.7	P.8	P.9	P.10	P.11	
平面形	円形	橢円形	橢円形									
規模	36×29	24×18	22×14	30×24	21×19	19×15	29×28	29×20	39×37	36×22	52×30	
深さ	49	15	16	19	28	20	36	12	3	36	52	
	P.12	P.13	P.14	P.15	P.16	P.17	P.18	P.19	P.20	P.21	P.22	P.23
平面形	円形	橢円形	橢円形	円形								
規模	48×46	44×40	46×36	48×40	36×26	40×34	25×29	22×19	24×19	44×40	35×30	26×17
深さ	73	48	62	81	67	49	27	18	17	42	26	
	P.24	P.25	P.26	P.27	P.28	P.29	P.30	P.31				
平面形	円形											
規模	40×30	42×38	15×14	28×25	22×18	38×32	22×14	24×22				
深さ	39	33	4	23		17	13					

表7 3号住居跡ピット観察表

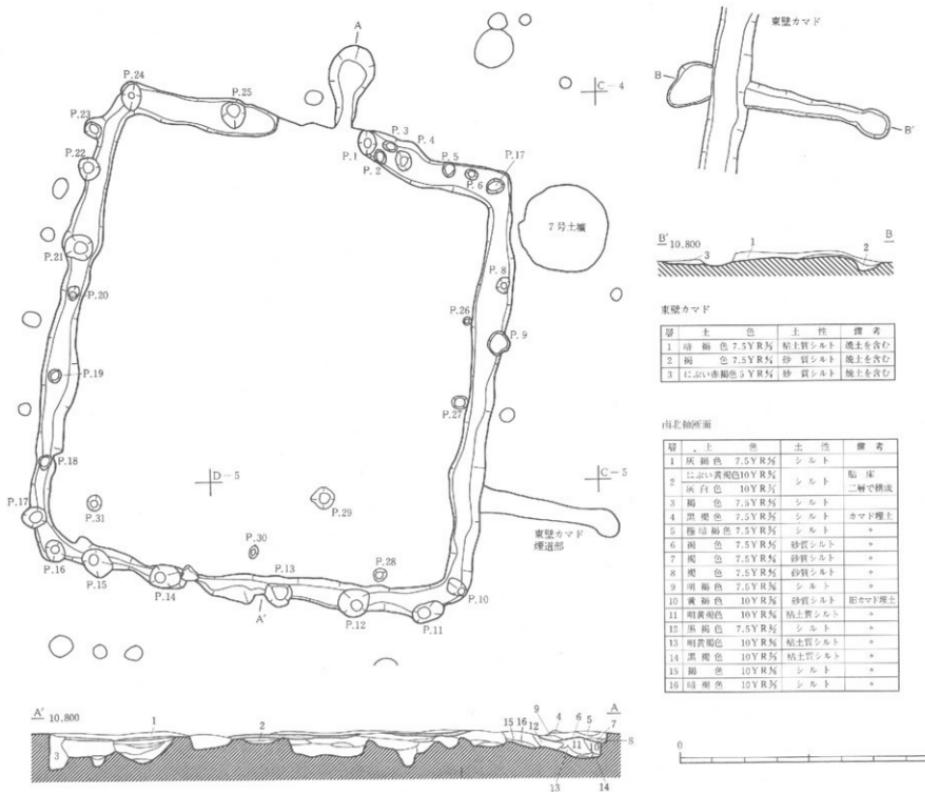


図14 3号住跡実測図

〔床面下の状況〕床面下の掘り下げに際して、東辺南側でカマドを1基、大小の土壌を多数確認した。

住居確認時において、東辺南側で東へ延びる溝状の落ち込みを検出しており、焼土等がみられ煙道部と推定されていた。貼床を除去した結果、溝状の落ち込みへ続く焼土を含んだ不整形の落ち込みがみられ、カマドであることが確認された。一部周溝に切られているが東西長約164cmを計る。貼床下層の確認であり住居改築以前のカマドである。

土壤は貼床下層全面に検出されている。上述のカマド下面でも検出され、土壤間の切り合いもみられる。40基程確認されており、平面は円形や橢円形を呈する。ほとんどの土壤から焼土・炭化物が検出され、破片となった土器類が多量に出土している。柱穴としての性格をもつ土壤の存在も考えられたが切り合い等が著しく不明であった。ほとんどのものは廃棄としての性格をもつものと考えられる。

以上、住居改築以前は、生活層は検出されなかつたが、最底一枚の生活層の存在が考えられた。また、カマドや土壤の位置から規模を変えていないことも確認された。

〔出土遺物〕床面での遺物はなく堆積土・周溝・貼床下層面・カマドからの出土である。特に貼床下層面での土壤から多量に遺物が出土している。土器類では土師器壺・甕、須恵器壺・甕があり、石製品では巡方・砾石が、土製品では土玉などがある。

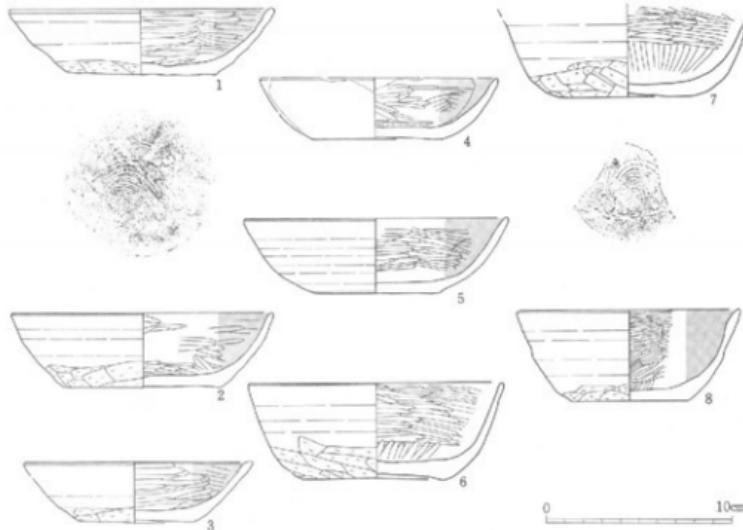


図15 3号住居跡出土遺物Ⅰ

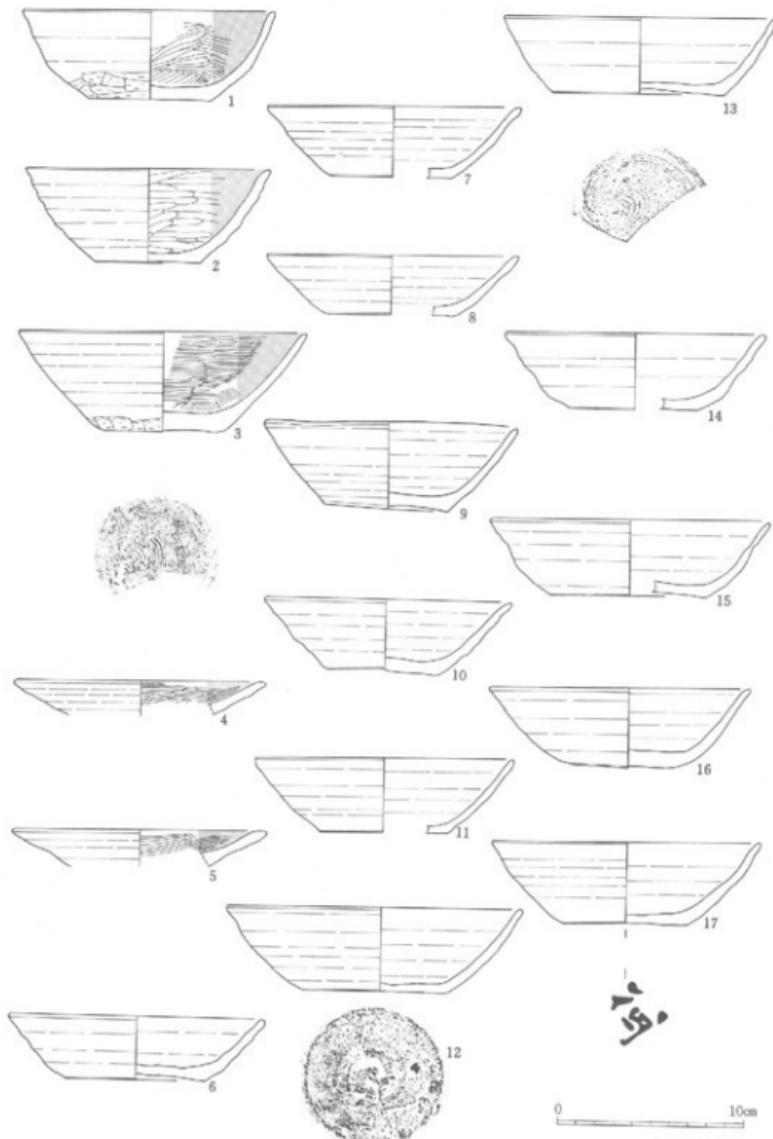


图16 3号住层出土遗物Ⅱ

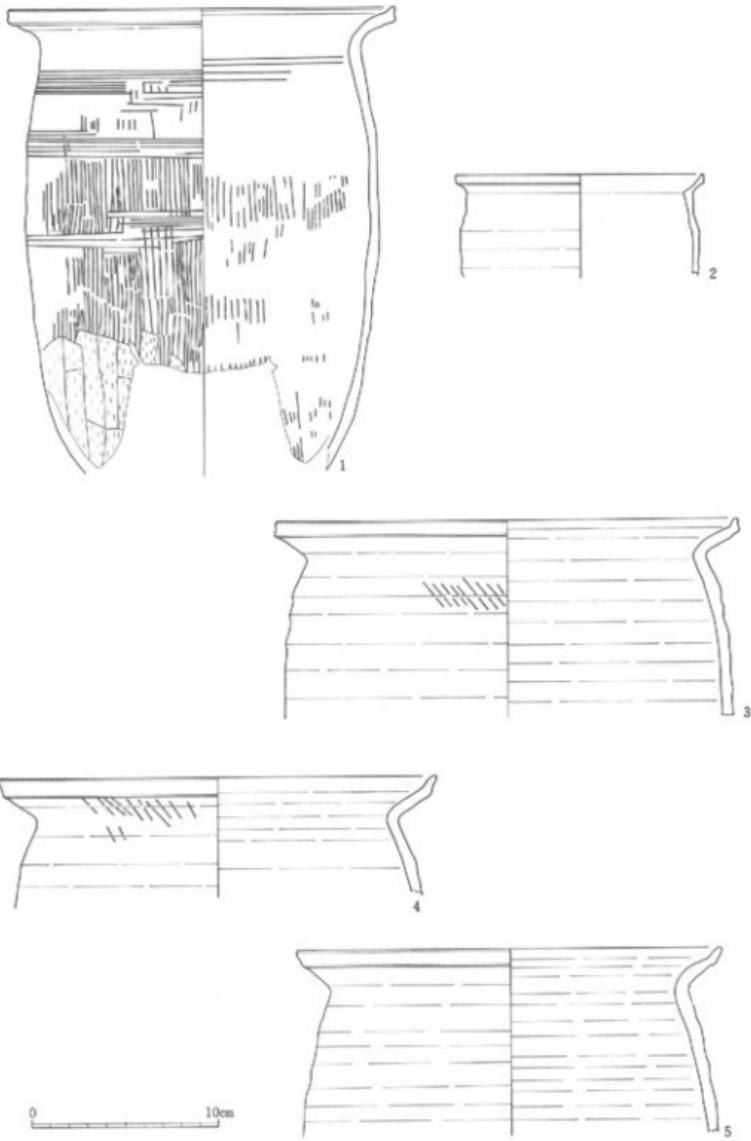


図17 3号住居跡出土遺物Ⅲ



図18 3号住居跡出土遺物IV

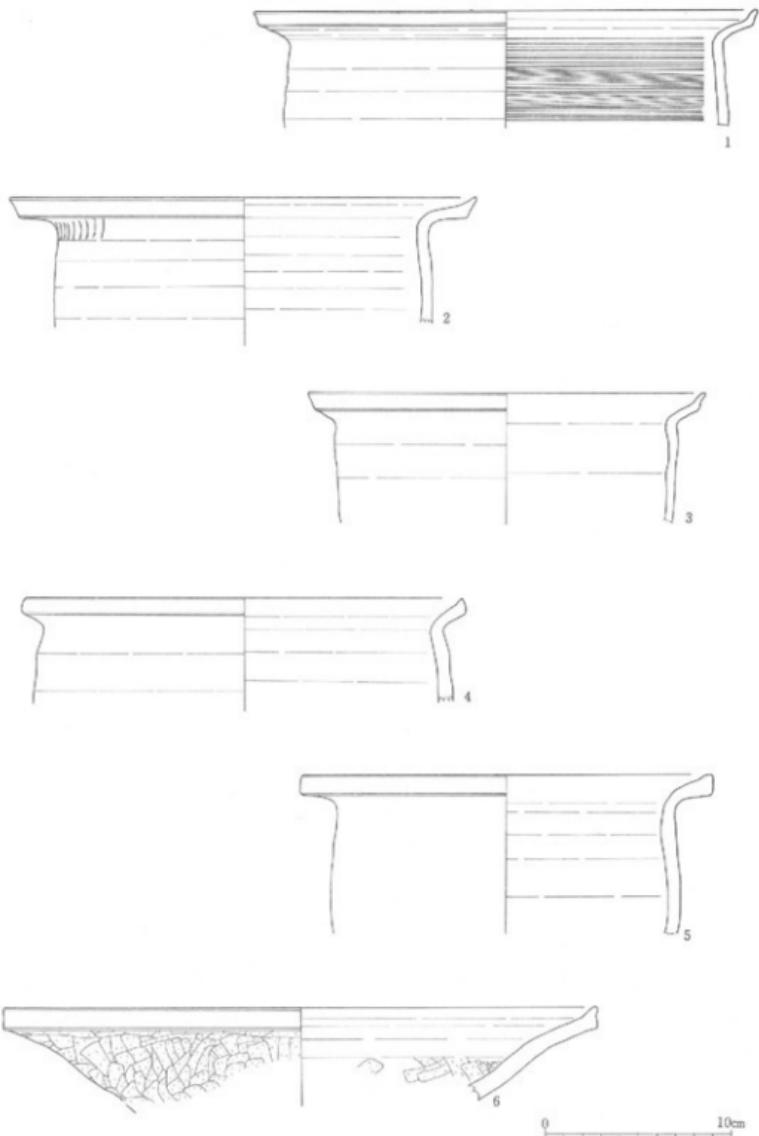


図19 3号住居跡出土遺物V

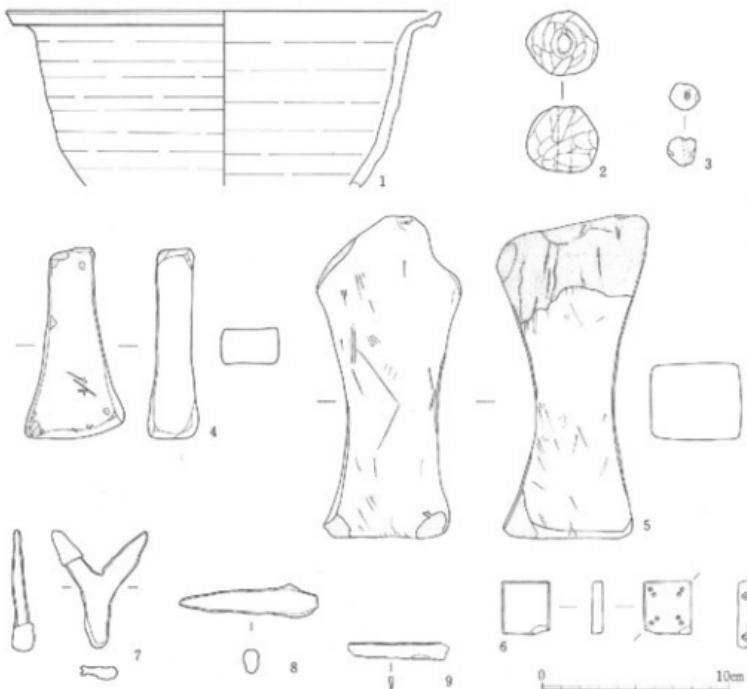


図20 3号住居跡出土遺物VI

土器			高台付杯・盤			甕			赤燒土器		
环			口縁			口縁			环		
口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部
703	675	218	0	1	12	473	4887	183	90	78	30

須恵器					
甕			壺		
口縁	体部	底部	口縁	体部	底部
207	150	96	8	100	12
				6	1
					0

表8 3号住居跡土器破片集計

回番	種別	器種	器位	外面調査	内面調査	口径	底径	器高	分類	備考
15-1	土師器	环	基座下端	クロコ調整 底部-凹凸高欄内 外部下端-底部-手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横化・一方向) 黑色處理	14.0	7.8	3.5	B I	
-2	*	*	*	クロコ調整 底部-手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横化・一方向) 黑色處理	14.0	8.2	4.0	*	
-3	*	*	*	クロコ調整 底部下端-底部-手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横化・一方向) 黑色處理	12.2	6.1	3.3	*	

表9 3号住居跡掘載遺物観察表I

(単位 cm)

国・番	種別	器種	部位	外観・病変	内面調整	口径	底径	高さ	分類	備考
15-4	土師器	环	1層	セクロ調整 底部一回転系切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色處理	12.6	6.7	3.3	B I	
-5	*	*	底部下層	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ヘラミガキ(横位) 裏面は摩擦の為不明	14.0	6.8	4.0	*	
-6	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右) 体部下端一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横位・放射状)	13.6	7.4	5.1	B II	再酸化?
-7	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右) 体部下端一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横位・放射状)	—	7.2	—	*?	再酸化?
-8	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右) 体部下端一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色處理	12.0	6.0	4.9	*	
16-1	*	*	底溝 底部	ロクロ調整 体部下端一底部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ(横位・一方向) 黒色處理	13.4	6.3	4.8	B III	
-2	*	*	底部下層	ロクロ調整 底部一回転系切り	ヘラミガキ(横位・横横位)	13.0	5.6	5.1	*	底部擦傷有り
-3	*	*	*	ロクロ調整 体部下端一手持ちヘラケズリ 底部一回転系切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 黒色處理	15.3	6.4	5.4	*	
-4	*	*	底溝	ロクロ調整	ヘラミガキ(横位) 黒色處理	13.4	—	—		
-5	*	*	*	ロクロ調整	ヘラミガキ(横位) 黒色處理	13.6	—	—		
6	須島器	环	*	ロクロ調整 底部一回転系切り?	ロクロ調整	13.7	7.4	3.4	II	
-7	*	*	1層	ロクロ調整 底部一切り離し不明	ロクロ調整	13.4	6.4	3.8	III	
-8	*	*	底部下層	ロクロ調整 底部一切り離し不明	ロクロ調整	13.4	7.0	3.2	II	
9	*	*	1層	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	13.4	6.6	4.7	III	
-10	*	*	底部下層	セクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	13.2	6.0	4.0	*	
-11	*	*	*	ロクロ調整 底部一切り離し不明	ロクロ調整	13.8	6.8	4.0	*	
-12	*	*	1層	ロクロ調整 底部一回転系切り 後回転一ヘラケズリ	ロクロ調整	15.7	7.5	4.6	*	
-13	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	14.6	9.2	4.1	II	
-14	*	*	底部下層	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	14.0	6.8	4.1	*	
-15	*	*	*	ロクロ調整 底部一手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	15.0	8.2	4.1	*	
-16	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	14.0	6.4	4.3	III	
-17	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転系切り(右)	ロクロ調整	14.4	6.6	4.1	*	得?の隠書
17-1	土師器	束	カマド	平行タタキ、ハケヌ、ロクロ調整 剥出し 体部下部一ヘラケズリ	ハケ目剥削後ロクロ調整	20.6	—	—		
-2	*	*	底部下層	セクロ調整	ロクロ調整	13.1	—	—		
-3	*	*	*	平行タタキ後ロクロ調整	ロクロ調整	24.6	—	—		
-4	*	*	*	平行タタキ後ロクロ調整	ロクロ調整	23.4	—	—		
-5	*	*	*	平行タタキ後ロクロ調整	ロクロ調整	22.6	—	—		
18-1	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	19.6	—	—		
-2	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	21.2	—	—		
-3	*	*	*	タタキ後ロクロ調整	ロクロ調整	22.6	—	—		
-4	*	*	*	タタキ後ロクロ調整	ロクロ調整	19.4	—	—		

表10 3号住居跡揭露遺物観察表 II

団・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
18-5	土器器	甕	踏床下層	タタキ後クロ調整	クロ調整	21.2	—	—	—	—
—6	—	—	—	クロ調整	クロ調整後回転ヘラナダ	22.3	—	—	—	—
19-1	—	—	—	クロ調整	クロ調整後回転ヘラナダ	26.8	—	—	—	—
—2	—	—	—	クロ調整	クロ調整	24.7	—	—	—	—
—3	—	—	—	タタキ後クロ調整	クロ調整	21.1	—	—	—	—
—4	—	—	—	クロ調整	クロ調整	23.6	—	—	—	—
—5	—	—	—	クロ調整	クロ調整	22.0	—	—	—	—
—6	—	—	—	クロ調整後ヘラケズリ	クロ調整後ヘラケズリ	31.6	—	—	—	—
20-1	須恵器	—	黑溝	クロ調整	クロ調整	23.0	—	—	—	—
—2	土器品	土玉	踏床下層	高さ3.5cm、幅3.7cm、球形を呈する。中央部に径7mmの孔が穿たれている。土師質	—	—	—	—	—	—
—3	—	—	—	高さ1.4cm、幅1.4cm、偏平な球形を呈する。中央部に径2mmの孔有り。土師質	—	—	—	—	—	—
—4	石製品	砥石	—	長さ10.1cm、横幅2.2cm、厚さ5.3cm、厚さ1.9cm、後端部上部以外使用痕跡有り分調整	—	—	—	—	—	—
—5	—	—	—	長さ17.3cm前面に使用痕跡有り。中央部をしく磨り減っており鉋状。	—	—	—	—	—	—
—6	—	石器	—	遙方 2.8×2.5×0.5cm 黒面村角線上に計8ヶの穴が穿たれている。大理石製	—	—	—	—	—	—
—7	鐵製品	鍼	—	極又式鉄鍼 長さ6.5cm厚さ4mm先端部「Y」字形に開く。	—	—	—	—	—	—
—8	—	刀子?	—	銹化が著しいが刀子と考えられる。現存長7.4cm	—	—	—	—	—	—
—9	—	刀子	—	刀部のみ残在。平底平造り。現存長5.4cm	—	—	—	—	—	—

表11 3号住居跡揭露物観察表Ⅲ

2) 掘立柱建物跡と出土遺物

1号掘立柱建物跡

E・F・G-9区に位置する。桁北西側と梁東妻で柱穴が確認されなかったが、桁行4間、梁行2間の東柱をもつ東西棟の建物跡と考えられる。建物方向は梁西妻側で約N-12°-Eを計る。柱穴掘り方は梢円形を呈し、最大のもので径70cm、最小のもので径40cmと不揃いである。柱痕跡は計9個確認され10~20cm程の径をもつ。柱間寸法は桁南側で西から242+239+217+240cmで総長938cmを計り、梁東妻で総長468cm、梁西妻で北から推定180+300

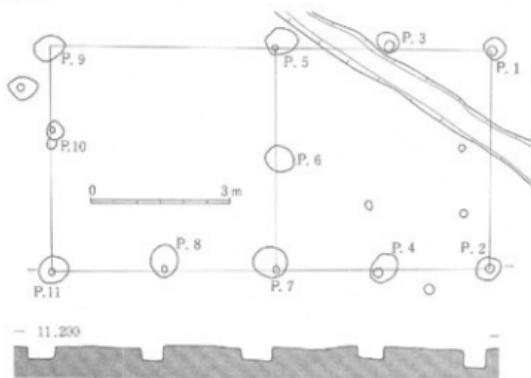


図21 1号掘立建物跡

cmで総長480 cmを計る。P. 5と東柱としたP. 6の底面から30cm程の河原石が検出されている。検出状況から礎板としての使用が考えられる。柱穴埋土より土師器片が少量出土している。

2号掘立柱建物跡

D・E-8・9区に位置する。

桁南東側で柱穴が1基確認されなかったが、桁行3間、梁行2間の東西棟の建物跡である。建物方向は梁西妻列で約N-35°-Eである。柱穴掘り方は方形を基調とする隅丸のもので、最大のもので104×106 cm、最小で60×68 cmの規模をもつ。柱痕跡は計7個確認され径20 cm程のものである。柱間寸法は桁北側で西から推定194+212+228 cmで総長634 cmを計り、梁西妻で北から推定254+257 cmで総長511 cmを計る。1号住居跡と重複関係にあり切られている。柱穴埋土より土師器片が出土している。

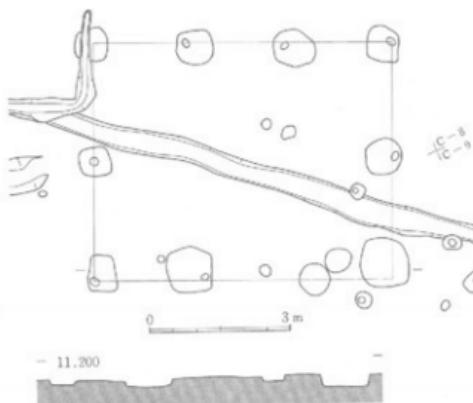


図22 2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡

G・H-6・7区に位置する。桁行2間梁行2間の東西棟の建物跡である。建物方向は梁西妻で約N-42°-Eである。柱穴掘り方は方形と円形のものがみられる。最大のもので92×84 cm、最小で60×50 cmを計る。柱痕跡は全てで確認され径20 cm程のものである。柱間寸法は桁北側で西から254+252 cmで総長506 cm、梁東妻で北から206+186 cmで総長392 cmを計る。桁北側のP. 4とP. 6で柱穴状のビットと重複関係にある。柱の

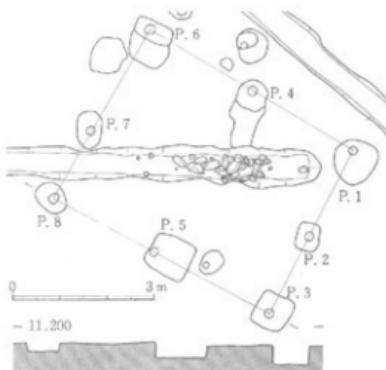


図23 3号掘立柱建物跡

建替えとも考えうるが不明であった。柱穴埋土より土師器片が出土している。

4号掘立柱建物跡

G・H-5・6区に位置する。桁行3間、梁行2間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側で約N-42°-Eを計る。柱穴掘り方は不整形を呈す円形や方形のもので、径は40~60 cm程

である。柱痕跡は計5個確認され径14~18cm程のものである。柱間寸法は桁東側で北から推定 $150+150+150$ cmで総長450cmを計り、梁南妻で総長414cmを計る。梁南妻の柱穴P.4、P.6、P.10には重複がみられ、位置関係から建替えの可能性がある。2号・3号土壙と重複関係にあり切られている。

5号掘立柱建物跡

E・F-4・5区に位置する。東西列3間、南北列2間または2間以上で、東側に間仕切りまたは廂をもつ建物跡である。建物方向は南北列東側で約N-22°-Eである。柱穴掘り方は不整方形や梢円形を呈し、径40~60cmを計る。柱痕跡は径12~16cm程である。柱間寸法は東西列南側で378(2間分)+176cmで総長554cmを計り、南北列西側で2間分北から184+194cmを計る。13号土壙と重複関係にあり土壙に切られている。

6号掘立柱建物跡

H・I-4・5区に位置する。削平等のため遺存状況が悪く、東西列2間、南北列3間を確認したのみである。総柱の建物とも考えうるが不明である。建物方向は柱穴・柱痕跡とも不揃いであるため確定しにくいがN-40°~50°-Eの範囲である。柱穴掘り方は円形または方形のもので径35~70cm程である。柱痕跡は径12~18cmである。柱間寸法はP.8からP.1で178+166cmを計り、P.8からP.9で210cm、P.1からP.2で156cmを計る。2号溝跡と重複関係にあり切っている。

7号掘立柱建物跡

D-9区に位置する。桁行2間、梁行1間の建物跡である。建物方向は桁西側で約N-3°-Eである。柱穴掘り方は円形または梢円形で、径36~46cm程である。柱痕跡は計5個確認され径12~26cm程のものである。柱間寸法は桁東側で北から98+116cmで総長214cmを計り、梁北側では230cmを計る。2号溝跡と重複関係にあり溝を切っている。

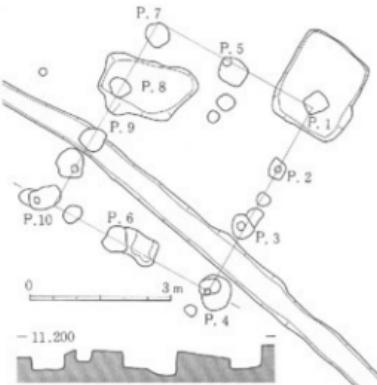


図24 4号掘立柱建物跡

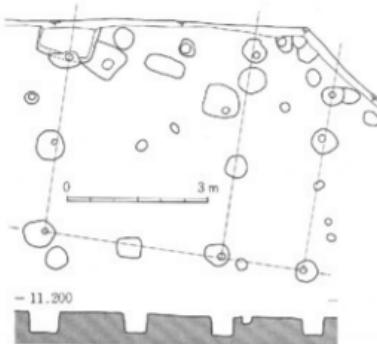


図25 5号掘立柱遺物跡

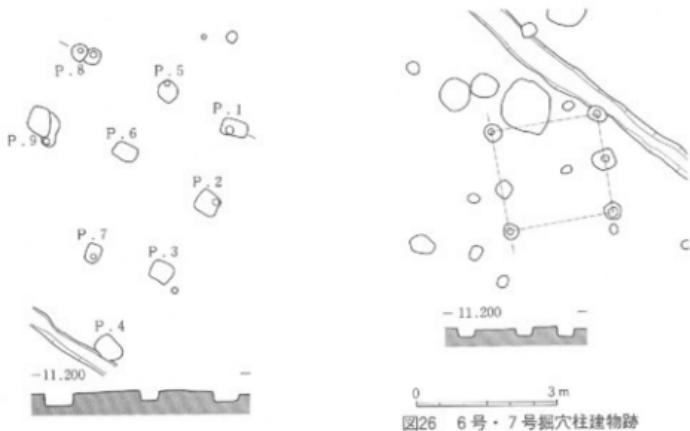


図26 6号・7号掘穴柱建物跡

3) 溝跡・溝状遺構と出土遺物

1号溝跡

B・C-4～10区に位置する。南北に延びる溝で調査区南側で東側へ屈曲している。確認長は36.4mを計る。上幅はほぼ均一で約3mを計り、底面幅は0.3～0.8mで深さ1.2～1.3mを計る。断面は溝中段付近で張り出しがみられるがほぼ逆台形を呈する。底面は浅い凹凸がみられるがほぼ平坦である。壁は底面から急な立ち上がりをみせ、中段付近から大きく外傾している。底面・壁面に大小のピットが確認されたが組み合うものもみられず性格は不明となっている。

2号・3号溝跡と重複関係にあり、前者を切っており後者に切られている。堆積土は溝中央付近で11層確認されている。ほぼ粘土質のシルト層で構成されておりレンズ状堆積を示している。遺物には土師器壺・皿・甕、須恵器壺・甕・壺、赤焼土器、石庵丁、獸骨が出土している。特にB-6・7区上層で多量に出土しており、廃棄としての性格が考えられる。

2号溝跡

C-10区～I-5区に位置する。調査区内を斜めにはしる溝で直線的に延びる。確認長は47mを計り、上幅は40～70cm・底面幅30～50cm・深さは5～20cmである。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。1号住居跡、6・7号掘立柱建物跡、1号溝跡と重複関係にあり全てに切られている。堆積土は粘土質シルト層を1層確認した。遺物には土師器・弥生土器片がある。

3号溝跡

B・C-9～E・F-8区に位置する。溝中央部が途切れているが確認時においてはかすかながら一本に続いていたもので浅い蛇行をみながら東西に延びる。確認長は25.4mを計り、上幅30～65cm、底面幅18～40cm、深さ4～10cmである。断面は浅い皿状を呈する。1号溝跡、4

号土壤と重複関係にあり前者を切って後者に切られている。堆積土は粘土質シルト層を1層確認した。土師器片が若干量出土している。

4号溝跡

B-8~F-10区に位置する。擾乱のため両端が切れているが確認長は19mを計る。上幅は40~65cm、底面幅25~46cm、深さ18~20cmを計る。断面は逆台形を呈しており底面はほぼ平坦で壁はゆるい立ち上がりをみせる。堆積土は粘土質シルト層を1層確認した。土師器片が出土している。

1号溝状遺構

G-H-6・7区に位置する。遺構西側が削平されているが確認長は10.4mを計る。上幅50~90cm、底面幅30~50cm、深さ30~35cmである。断面はU字形を呈し底面はほぼ平坦である。東側端部で壁が急な立ち上がりをみせる。北壁東側では大形のピットと重複関係にありピットを切っている。堆積土はシルト層を3層確認した。また、1層上面にのる状態で河原石を確認している。径10~50cm程のもので重なりあう状態で検出した。河原石下面からは何も検出されず廃棄物とも考えうるが性格は不明である。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺・甕がある。

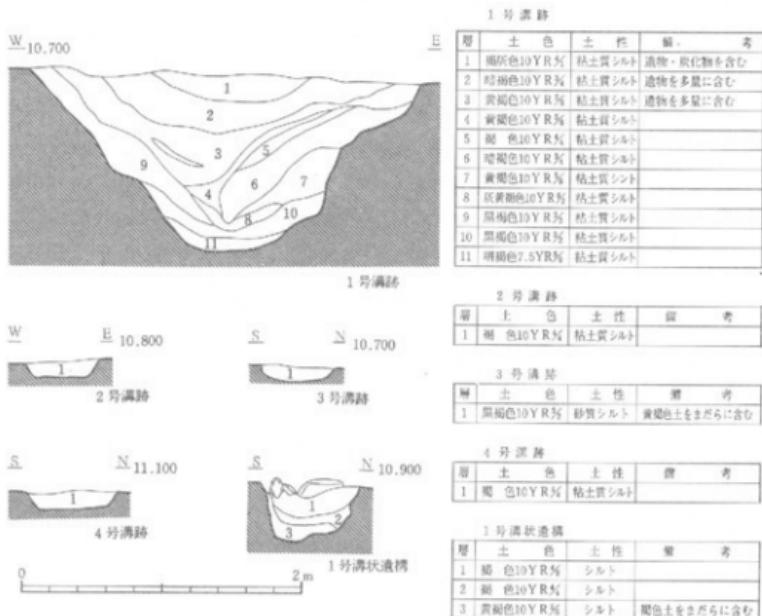


図27 I区、遺跡、溝状遺構断面図

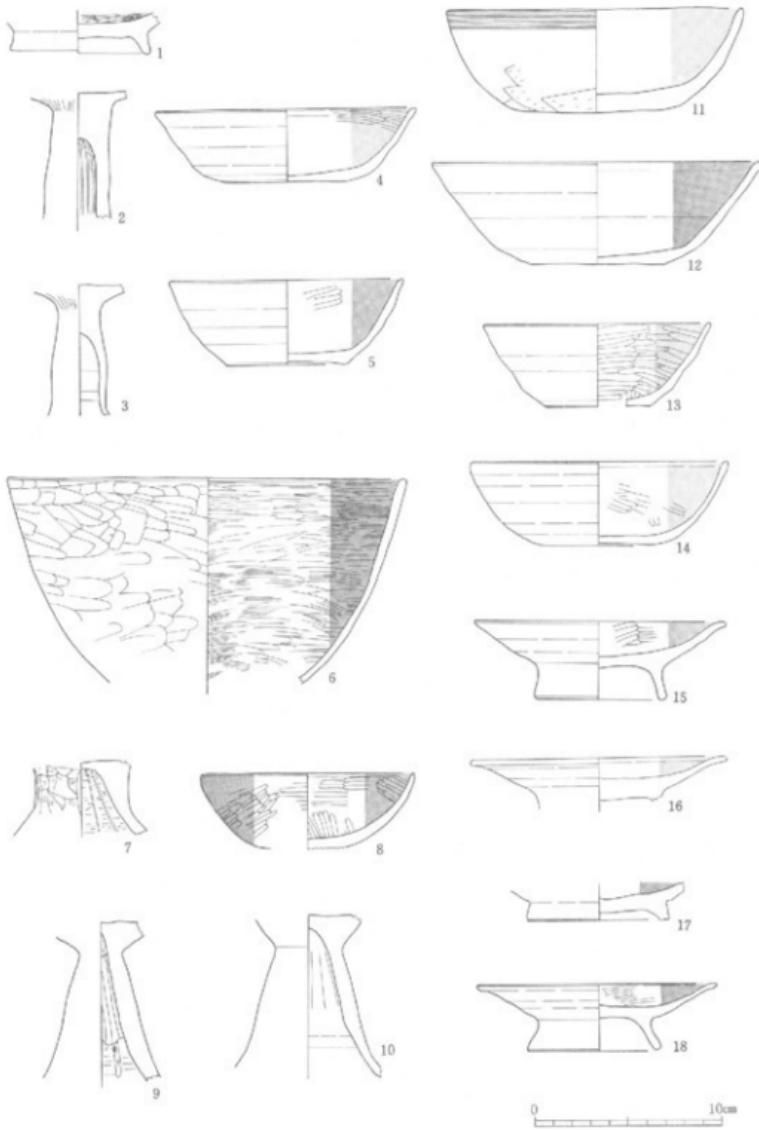


图28 1号满跡出土遺物 I

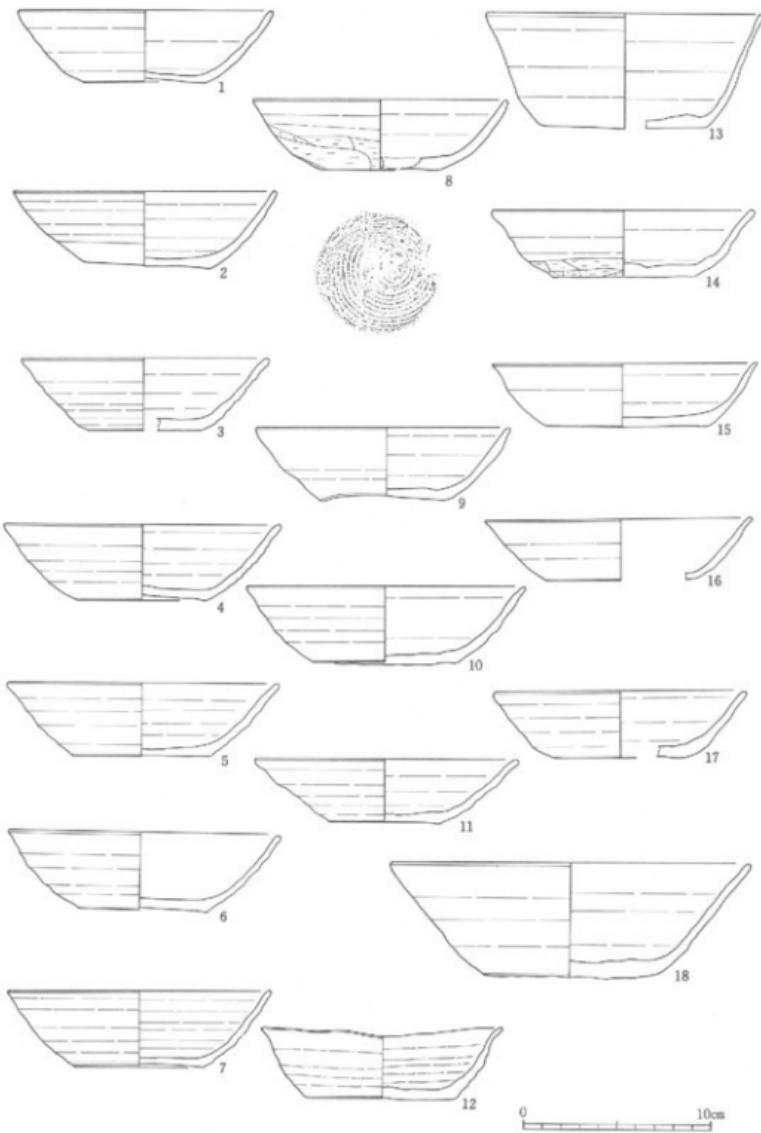


図29 1号溝跡出土遺物II

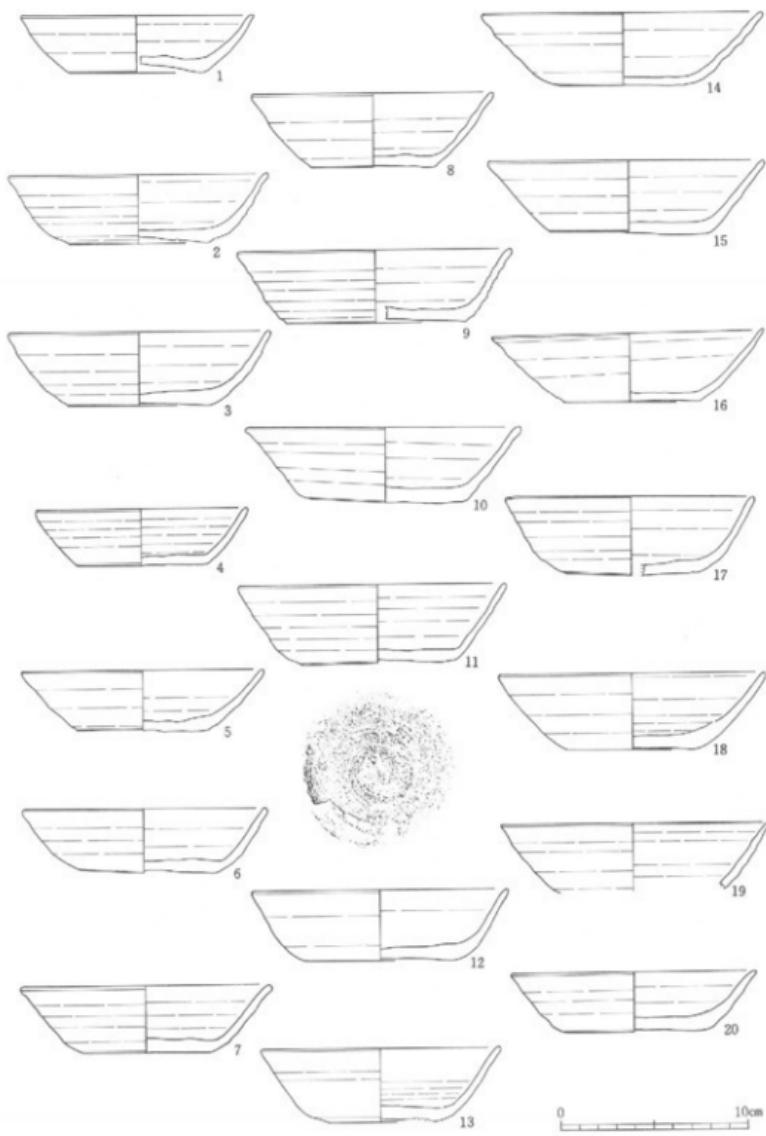


図30 1号溝跡出土遺物Ⅲ



圖31 1號溝跡出土遺物IV

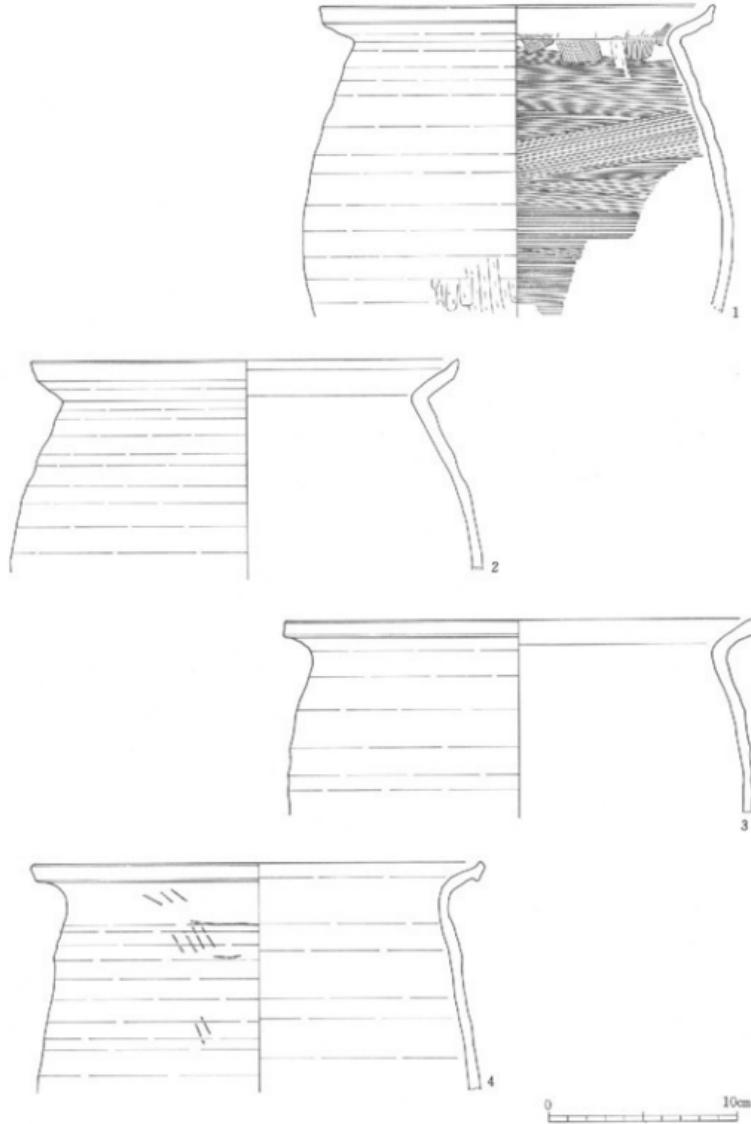
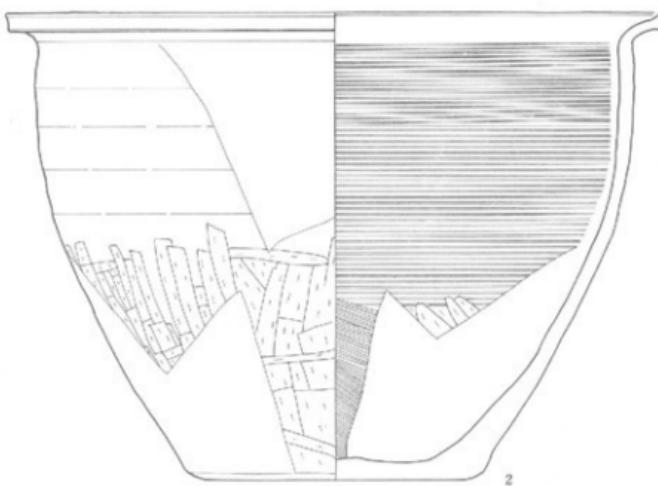
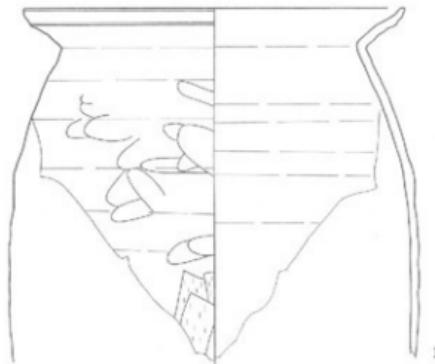


图32 1号沟出土遗物V



0 10cm

圖33 1號溝跡出土遺物VI

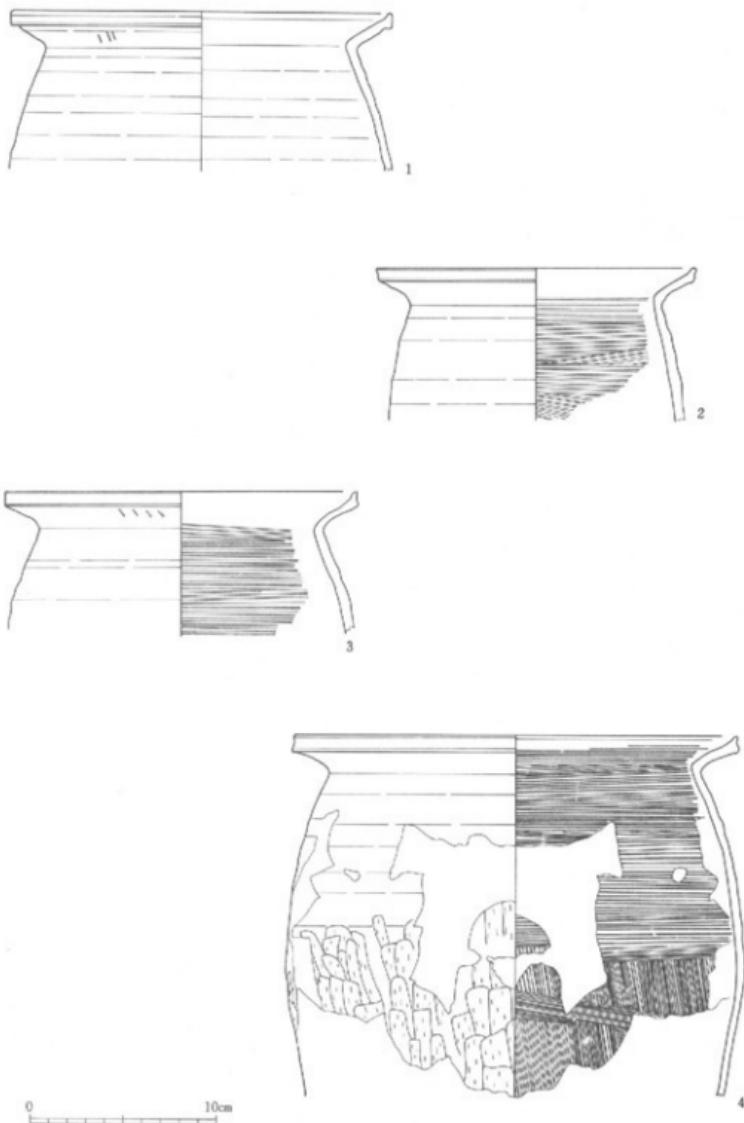


图34 1号溝跡出土遺物図

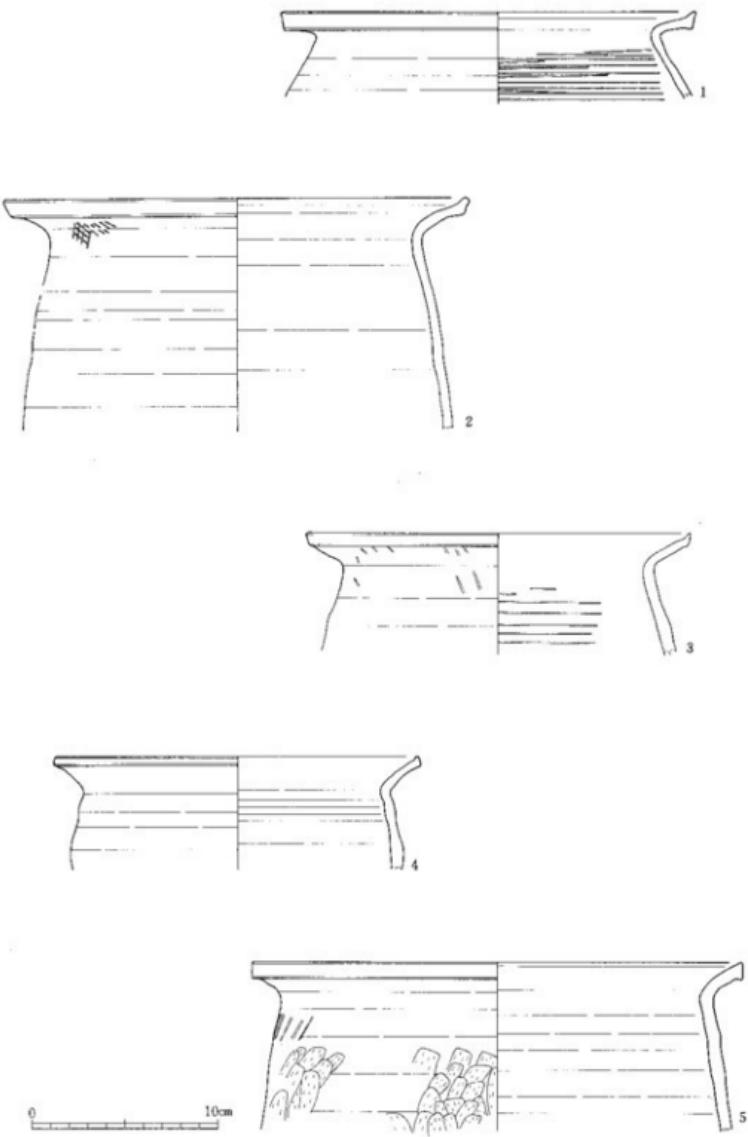


图35 1号沟出土遗物
Figure 35: Relics found in the No. 1 trench

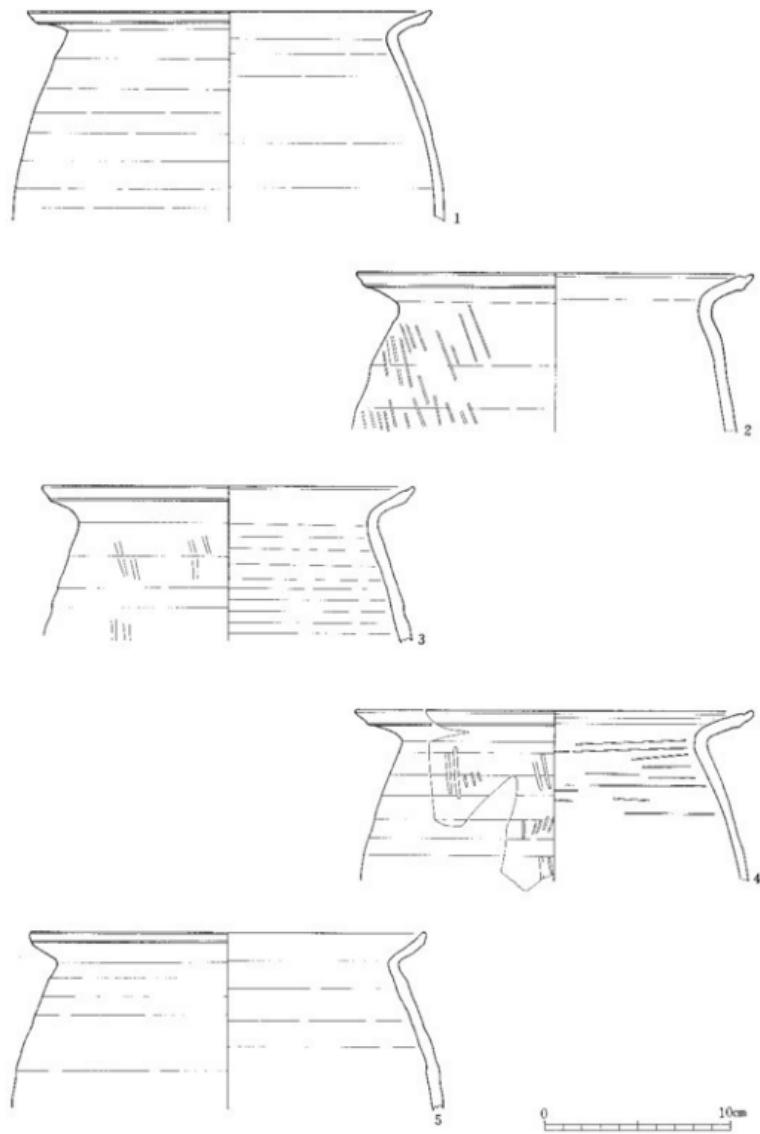


图36 1号沟出土遗物区

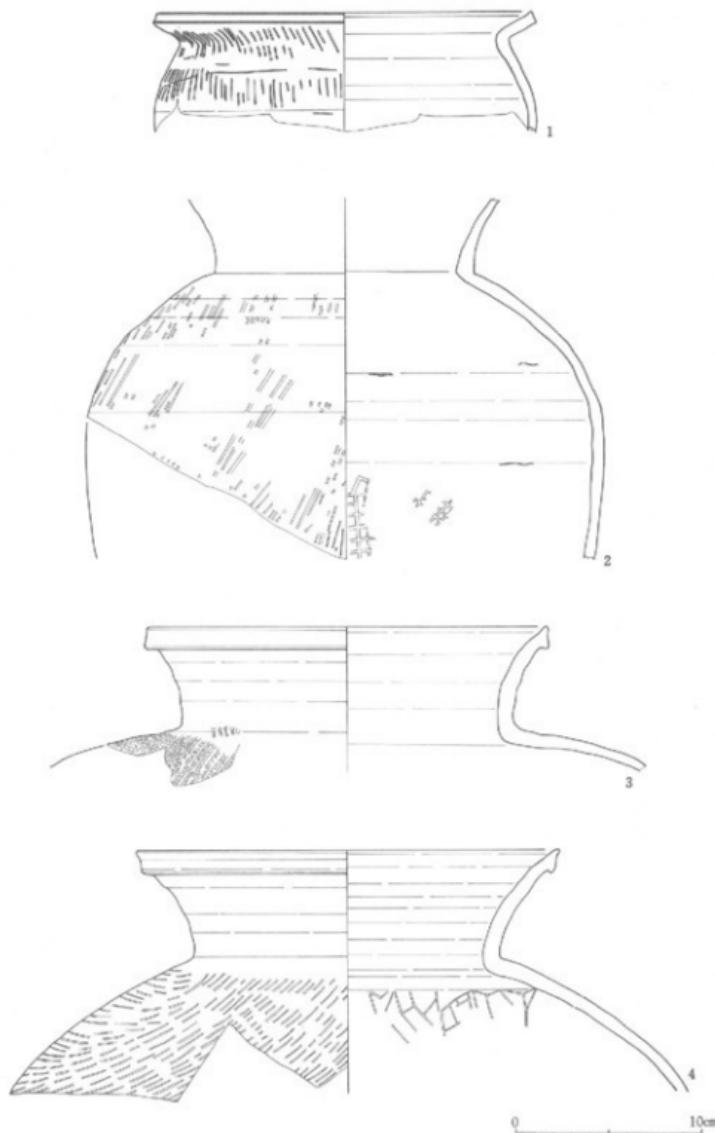


图37 1号墓葬出土遗物X

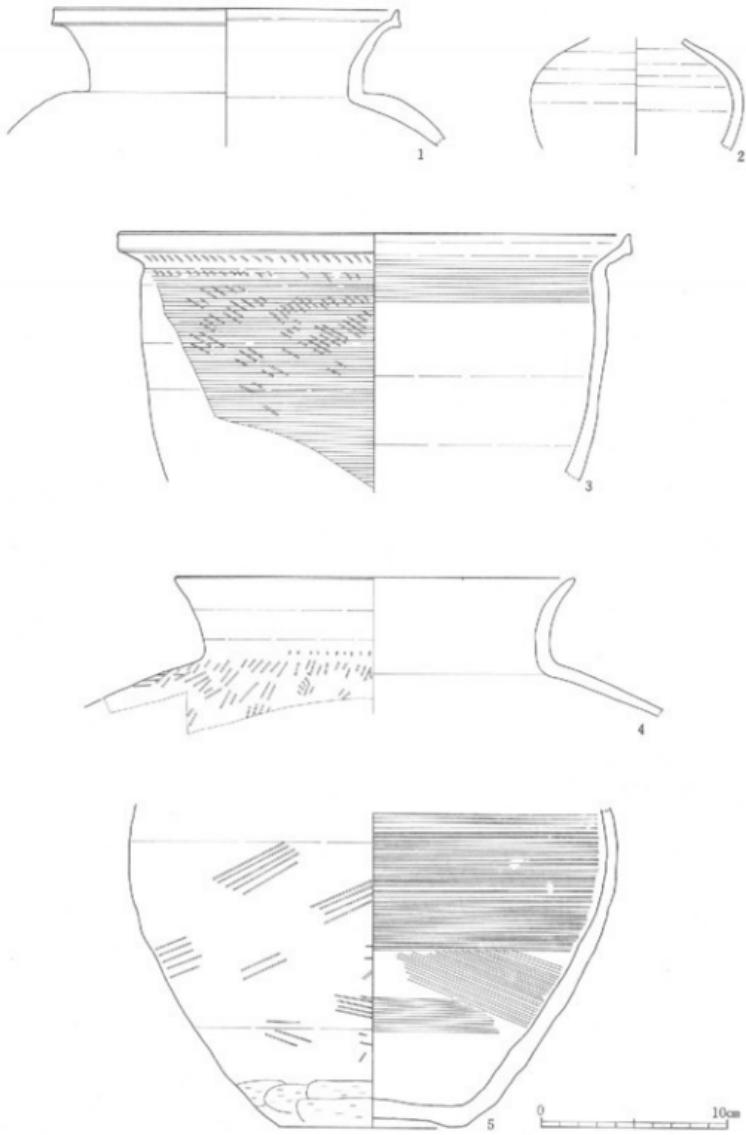


図38 1号溝跡出土遺物 XI

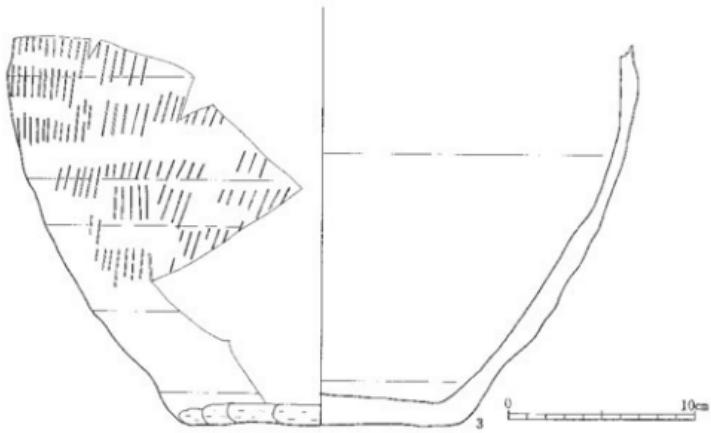
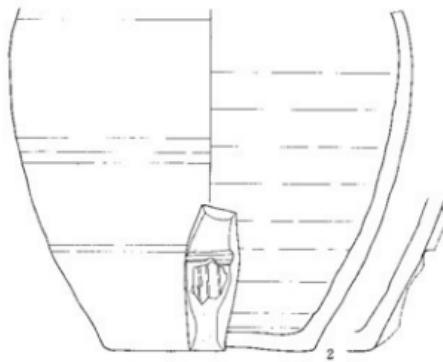
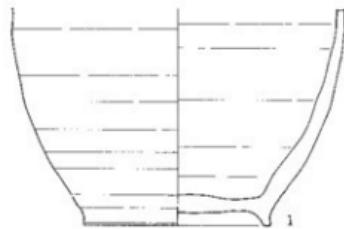


图39 1号满跡出土遗物 XII

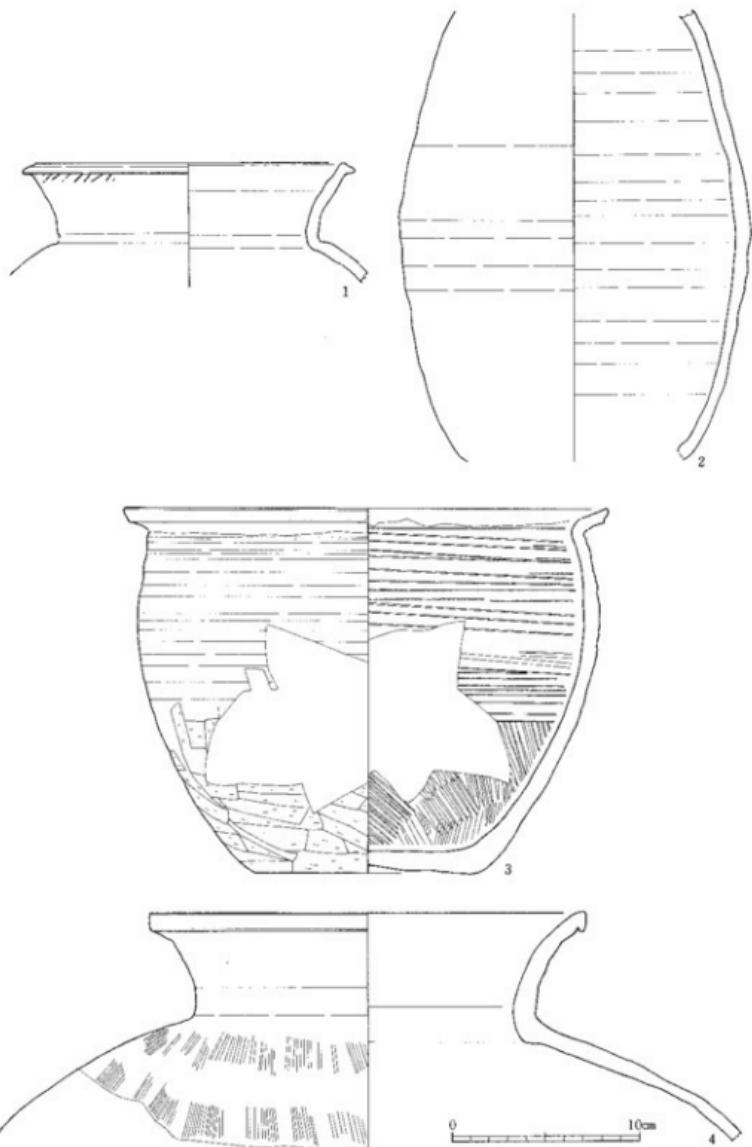
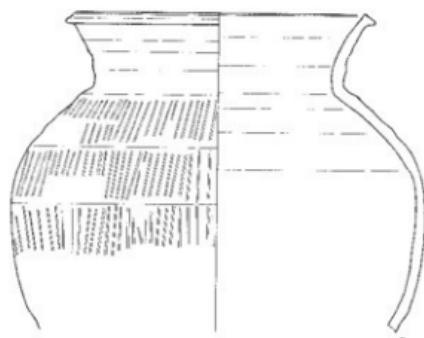
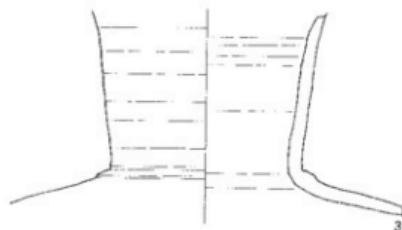
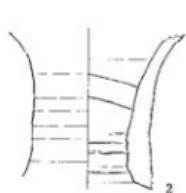
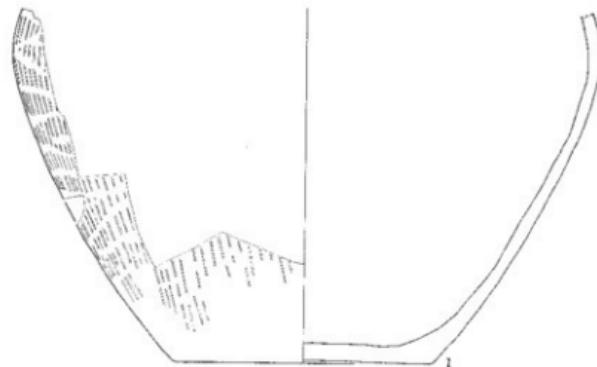


图40 1号墓葬出土遗物 XIII



0 10cm

図41 1号溝跡出土遺物 XIV

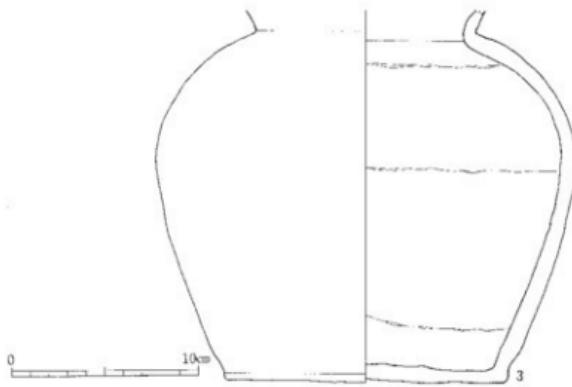
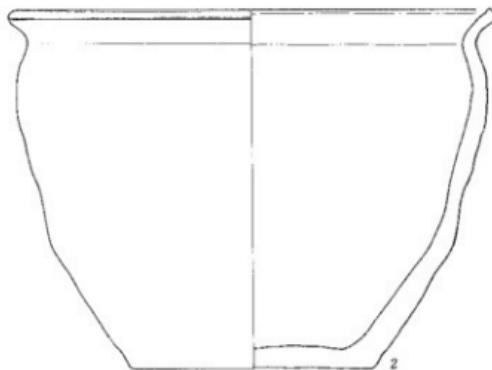


図42 1号溝跡出土遺物 XV

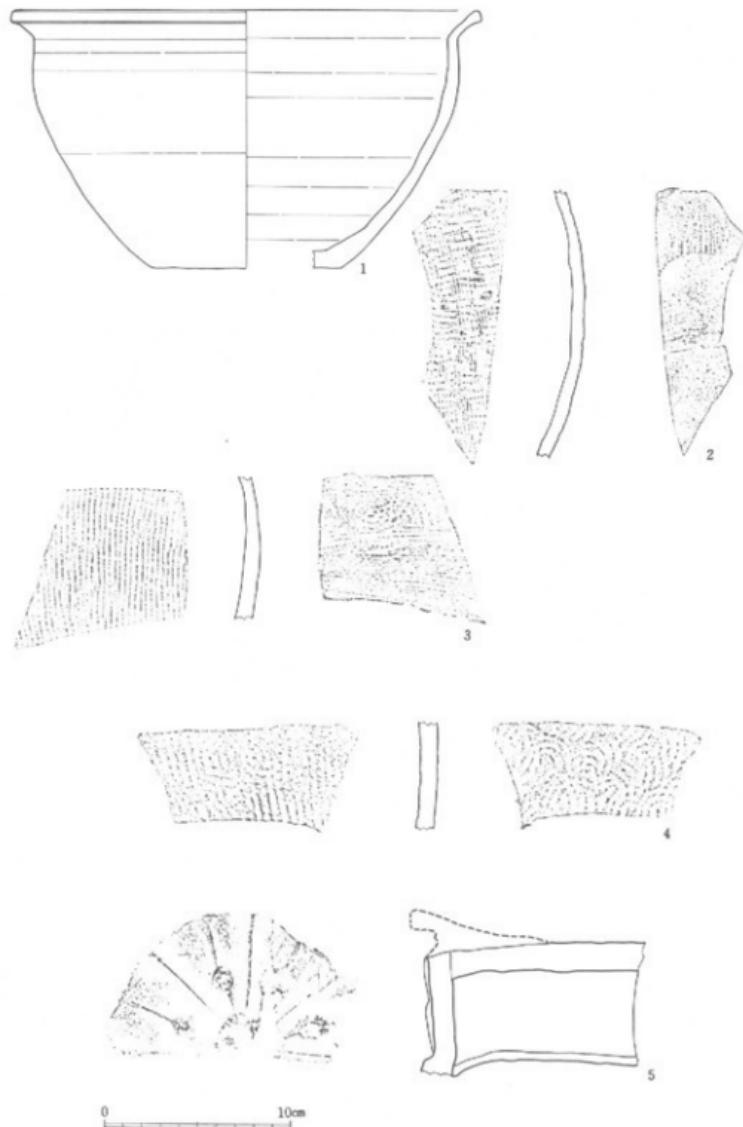


图43 1号沟出土遗物 XVI

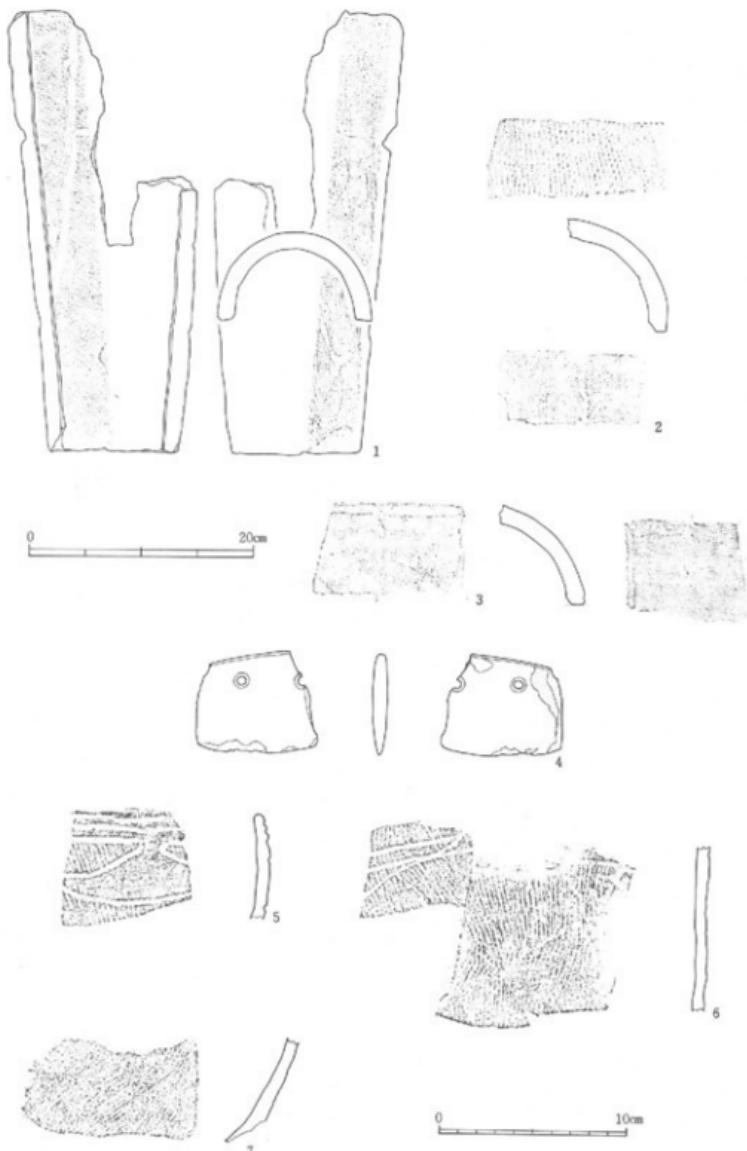


図44 1号・2号溝跡出土遺物 XVII

回・番	種別	器種	解剖	外 面 調 査	内 面 調 査	印 徒	毫毛	器高	分類	備 考
28-1	土師器	高台付皿	1 番	ロクロ調整	ヘラミガキ (一方面) 黒色処理	—	(高台) 7.4	—	高台付4?	
-2	*	高坪	2 番	(脚部のう) (脚部のみ)	ハラミガキ	シボリメ	—	—	I	
-3	*	*	*	ハラミガキ		シボリメ	—	—	J	
-4	*	坪	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整 黒色処理	ヘラミガキ	13.9	6.5	3.9	III
-5	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転へラケズリ?	ロクロ調整	後ヘラミガキ	12.5	6.4	4.5	*
-6	*	*	3 番	あらいヘラミガキ	あらいヘラミガキ 黒色処理		21.2	—	—	A
-7	*	高坪	*	ヘラケズリ	ヘラケズリ		—	—	—	III
-8	*	坪	*	ハラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ 黒色処理		11.4	—	—	A
-9	*	高坪	*	不 明	シボリメ 浅いケズリ		—	—	—	II
-10	*	*	*	不 明	シボリメ		—	—	—	II
-11	*	坪	*	口縫部一様ナデ 底部へラケズリ 底部へラケズリ	ヘラミガキ? 黒色処理		15.7	7.4	5.6	A
-12	*	*	*	ロクロ調整 底部一手持ちへラケズリ	ロクロ調整 黒色処理		17.5	7.1	5.5	B III
-13	*	*	*	ロクロ調整 底部一手持ちへラケズリ	ロクロ調整 黒色処理		12.1	5.5	4.4	*
-14	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整 黒色処理	ヘラミガキ	13.0	5.7	4.5	*
-15	*	高台付皿	*	ロクロ調整 後手ナ	ロクロ調整 黒色処理	ヘラミガキ	13.4	(高台) 6.9	4.2	I
-16	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整 黒色処理	ヘラミガキ	13.6	—	—	?
-17	*	*	*	ロクロ調整 底部一手持ちへラケズリ	ヘラケズリ		—	7.5	—	高台付4?
-18	*	*	壇	ロクロ調整 後ナデ	一方向のミガキ 黒色処理		13.7	(高台) 7.1	3.6	I
29-1	洗器	坪	1 番	ロクロ調整 底部一回転へラ切り	ロクロ調整		13.5	6.5	3.9	III
-2	*	*	*	ロクロ調整 底部へラケズリ	ロクロ調整		14.0	6.6	4.0	*
-3	*	*	2 番	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		13.2	5.8	3.9	*
-4	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		14.7	6.8	4.1	*
-5	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		14.4	7.3	3.9	*
-6	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		14.5	6.7	4.2	*
-7	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		14.1	6.8	4.1	*
-8	*	*	*	上部ロクロ調整 底部一手持ちへラ ケズリ 志部一回転糸切り 2度行った跡	ロクロ調整		13.1	6.1	3.8	*
-9	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転糸切り	ロクロ調整		13.6	6.6	3.9	*
-10	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転へラ切り	ロクロ調整		14.9	7.6	4.1	*
-11	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転へラ切り	ロクロ調整		14.1	5.9	3.4	*
-12	*	*	*	ロクロ調整 底部へラ切り	ロクロ調整		22.9	8.0	3.3	II
-13	*	*	*	ロクロ調整 底部へラ切り	ロクロ調整		14.7	8.6	6.2	I

(単位 cm)

表12 1号溝跡掲載遺物観察表 I

国・番	候別	名種	着位	外 色 調 整	内 色 調 整	口径	底径	器高	分類	備考
29-14	須恵器	坪	2号	ロクロ調整 底部一側持へラケズリ	ロクロ調整	14.0	7.5	3.6	II	
-15	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	14.1	8.5	3.4	*	
-16	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	14.3	7.5	3.3	*	
-17	*	*	2~3号	ロクロ調整 底部一側持へラ切りか?	ロクロ調整	13.4	6.8	3.6	*	
-18	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	19.1	8.6	6.1	III	
30-1	*	*	3号	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	12.2	7.0	3.1	II	
-2	*	*	*	セクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.8	7.4	3.7	*	
-3	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.9	7.5	4.0	*	
-4	*	*	*	セクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	11.2	6.8	3.1	*	
-5	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り(右)	ロクロ調整	12.8	6.8	3.2	*	
-6	*	*	*	セクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.0	7.1	3.4	*	
-7	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.4	6.9	3.6	*	
-8	*	*	*	セクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	12.9	6.6	4.0	*	
-9	*	*	*	セクロ調整 底部一側持へラ切り	セクロ調整	14.6	9.5	3.9	*	
-10	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	14.7	8.4	4.0	*	
-11	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り(右)	ロクロ調整	14.3	8.2	4.2	*	
-12	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.7	7.9	3.8	*	
-13	*	高台付坪	*	ロクロ調整 底部一側持へラケズリ	ロクロ調整 体部下側一側持へラケズリ	12.8	15.7	3.9		
-14	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	14.9	7.0	3.9	III	
-15	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	14.7	8.3	3.9	*	
-16	*	*	*	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	14.4	7.1	3.7	*	
-17	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	13.2	7.0	4.2	*	
-18	*	*	*	ロクロ調整 底部半周	ロクロ調整	14.2	6.7	4.1	*	
-19	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	14.3	—	—		
-20	*	*	壁上	ロクロ調整 底部一側持へラ切り	ロクロ調整	13.0	8.4	3.2	II	
31-1	土師器	甕	2号	ロクロ調整、タタキ 下部一側持へラケズリ	ヘラナダ	17.1	—	—		
-2	*	*	*	11号ヨコナダ 体部一側持へラナダ 下部一側持へラケズリ	口縁一側持へラナダ 体部一側持 ロクロ調整	23.2	—	—		
-3	*	*	*	ロクロ調整 下部一側持へラケズリ	ロクロ調整 下部一側持へラナダ 後壁持へラナダ	23.6	—	—		
-4	*	*	*	ロクロ調整 固松へラナダ タタキ	ロクロ調整 固松へラナダ	23.6	—	—		
32-1	*	*	*	ロクロ調整 甕一部へラケズリ	口縁へタナダ 体部固松へラナダ	21.0	—	—		
-2	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	22.8	—	—		

表13 1号溝跡揭露遺物観察表II

固番	種別	品種	部位	外面調整	内面調整	口径	底径	高さ	分類	備考
32-3	土器	甕	2層	ロクロ調整	ロコナデ	25.2	-	-		
-4	*	*	*	ロクロ調整 平行タタキ	ロクロ調整	24.2	-	-		
33-1	*	*	*	ロクロ調整 一部ナゲ 下部一ロクロ調整後ケズリ	ロクロ調整 一部ロクロ調整 一部ロクロ後ケズリ 体部一ロクロ調整	29.2	-	-		
-2	*	*	*	ロクロ調整 ヘラケズリ	ロクロヘラナデ	35.0	13.9	25.0		
34-1	*	*	*	ロクロ調整 平行タタキ	ロクロ調整	22.3	-	-		
-2	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	17.1	-	-		
-3	*	*	*	ロクロ調整	ロクロヘラナデ	18.9	-	-		
-4	*	*	*	ロクロ調整 一部ヘラケズリ	ロクロヘラナデ	20.4	-	-		
35-1	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	24.0	-	-		
-2	*	*	*	ロクロ調整 平行タタキ	ロクロ調整	25.0	-	-		
-3	*	*	*	ロクロ調整 平行タタキ	ロクロ調整	21.6	-	-		
-4	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	19.7	-	-		
-5	*	*	*	ロクロ調整 一部ヘラケズリ 平行タタキ	ロクロ調整	26.4	-	-		
36-1	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	21.6	-	-		
-2	*	*	2~3層	ロクロ調整 後ロクロナデ	ロクロ調整	21.3	-	-		
-3	*	*	*	平行タタキ 後ロクロ調整	ロクロ調整	19.9	-	-		
-4	*	*	3層	平行タタキ 後ロクロ調整	ロクロ調整	21.4	-	-		
-5	*	*	1~2層	ロクロ調整	ロクロ調整	21.3	-	-		
37-1	*	*	甕	平行タタキ 後ロクロ調整	ロクロ調整	20.5	-	-		
-2	須恵器	*	1層	ロクロ調整 体部-平行タタキ	ロクロ調整	-	-	-		
-3	*	*	*	ロクロ調整 体部-椅子口のタタキ	ロクロ調整	21.7	-	-		
-4	*	*	1~3層	ロクロ調整 体部-平行タタキ	ロクロ調整	22.7	-	-		
38-1	*	*	2層	ロクロ調整	ロクロ調整	18.7	-	-		
-2	*	甕	*	ロクロ調整	ロクロ調整	-	-	-		
-3	*	甕	*	ロクロ調整	ロクロ調整	27.5	-	-		
-4	*	*	*	ロクロ調整 一部ロクロ調整 体部-平行タタキ ロクロ調整	ロクロ調整	21.4	-	-		
-5	*	*	*	ロクロ調整 体部-手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	-	10.0	-		
39-1	*	甕	1~2層	ロクロ調整 一部ロクロヘラナデ 体部-付高台	ロクロ調整	-	10.0	-		
-2	*	甕	2層	ロクロ調整	ロクロ調整	-	11.2	-		
-3	*	*	*	ロクロ調整 体部-平行タタキ 底部-手持ちヘラケズリ	ロクロ調整	-	14.0	-		
40-1	*	*	1~3層	ロクロナデ L型機器-平行タタキ	ロクロ調整	17.7	-	-		

表14 1号溝跡揭露遺物観察表III

回番	種別	器種	層位	外面調査	内面調査	口径	延径	沿高	分類	備考
40-2	須恵器	壺?	埋 土	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—		
-3	*	甕	1~3層	ロクロ削鉗、体部下端一手持 ヘラケズリ	上部両脇へツナデ 下部ヘタナデ	25.8	12.0	19.6		
-4	*	*	2~3層	ロクロ調整 体部一平行タキ	ロクロ調整	23.3	—	—		
41-1	*	*	*	ロクロ調整 体部一平行タキ	ロクロ調整	—	13.5	—		
-2	*	壺	3 層	ロクロ調整	ロクロ調整 後ヨコナゲ	—	—	—		
-3	*	*	*	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—		
-4	*	甕	*	ロクロ調整 開絞ヘラケズリ	ロクロ調整	—	—	—		
-5	*	甕	*	ロクロ調整 体部一平行タキ	ロクロ調整	16.5	—	—		
42-1	*	*	*	ロクロ調整 体部一平行タキ	ロクロ調整	30.3	—	—		
-2	*	*	*	ロクロ調整 体部下端一底部へヘラケズリ	ロクロ調整	26.1	12.9	19.3		
-3	*	甕	*	ロクロ調整	ロクロ調整	—	15.0	—		
43-1	*	甕	2.3.4層	ロクロ調整	ロクロ調整	24.9	10.1	13.9		
-2	*	*	1 层	破片 外面一格子のタキメ、内面一平行状のオサエ後ナデ						
-3	*	*	3 层	破片 外面一平行のタキメ、内面一同心円文のオサエ後ナデ						
-4	*	*	*	破片 外面一格子のタキメ、内面一同心円文のオサエ						
-5	瓦	軒丸瓦	*	重弁蓮瓣文軒丸瓦(破片)						
44-1	*	丸 瓦	2 層	行基式、粘土板巻き作り、凹面一系切り痕跡、布目廣 凸面一繩叩き目、後ナデ						
-2	*	*	3 层	破片、粘土板巻き作り、凹面一系切り痕跡、布目廣、凸面一平行叩き目						
-3	*	*	*	破片、粘土板巻き作り、凹面一布目廣、凸面一繩叩き目 後ナデ						
-4	石製品	石塊	下 层	両端欠損、刃部は実銳、径7mmの孔二ヶ所に穿がたれています。最大厚-8mm						
-5	骨生土器	深 践	1 层	平口縁、口縁部にための沈線一束、磨消溝文(斜位L R縁文) 变形工字文						
-6	*	*	*	横位のための沈線一束、斜位のL R縁文 44-2と同 個体と考えられる。						
-7	*	浅 践	*	横位のL R縁文						

表15 1号・2号溝跡揭露遺物観察表IV

4) 井戸跡・土壤と出土遺物

1号井戸跡(4号土壤)

B-9区北東部に位置する。平面形は確認時においては不整円形であったが、下方につれて円形となっている。不整部分は崩落の跡と考えられる。規模は長軸100cm・短軸92cmを計り、深さは195cmまで確認した。3号溝跡と重複関係にあり溝跡を切っている。堆積土はシルト質土を10層まで確認した。9・10層ではグライ化がみられる。壁はほぼ垂直に落ちているが下方につれて径が小さくなり断面は逆台形を呈している。枠組など検出されず素掘りの井戸跡と考えられる。遺物には土師器壺、甕、赤焼土器、砥石、陶器片がある。

1号土壤

E-5区南側、3号住居跡南西に位置する。平面形は円形を基調とするが一端がすぼまっており丸みをもった扇形を呈する。規模は長軸182cm・短軸145cm・狭端部70cm・深さ5~14cmを計る。堆積土はシルト質土を2層確認している。底面は浅い凹凸がみられるがほぼ平坦である。壁は底面からゆるやかに立ち上っているが、北側壁ではスロープ状になっており南壁にかけて傾斜をもつ。底面大半と壁一部が焼けており、焼け面の厚さは1~2cm程認められ、特に底面南側が頗著で硬く焼きてしまっている。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺・甕、赤焼土器がある。全て小破片である。

2号土壙

G-5区東南側、1号土壙西に位置する。平面形は方形を基調とする隅丸方形を呈する。規模は長軸201cm・短軸168cm・深さ18~24cmを計る。ピットと6号掘立柱建物跡と切り合い関係にあり、ピットは堆積土を切り込んでおり、柱穴は土壙底面で確認した。堆積土はシルト質土を3層確認した。1層で焼土・炭火物を多量に検出した。底面は全体的に平坦であるが東側がいくらか低くなっている。壁は底面から急に立ち上がりをみせ垂直に近い部分もある。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺・甕、赤焼土器、瓦がある。

3号土壙

G-5区西側、2号土壙西に位置する。平面形は方形を基調とするが一部丸みをもつ不整形形を呈する。規模は長軸202cm・短軸120cm・深さ20~28cmを計る。6号掘立柱建物跡と重複関係にあり柱穴を切っている。堆積土はシルト質土を5層確認した。底面はほぼ平坦であるが一部かるい段のつく所がある。壁は底面から急な立ち上がりをみせる。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺・甕、鉄鋌がある。

6号土壙

A-10区南壁に位置する。平面形は調査区外へ一部延びるため全容は不明であるが方形を基調とすると考えられる。規模は東西軸94cm・壁までの南北軸93cm・深さ33~35cmを計る。堆積土はシルト質土を7層確認した。底面は中央部が若干低くなっている。壁は底面から急な角度をもって立ち上っている。若干量の土師器壺・甕片が出土している。

7号土壙

D-5区、3号住居跡の東に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は径137~139cm・深さ14~23cmを計る。堆積土はシルト質土を6層確認した。上層において炭火物・焼土が多量にみられた。底面はほぼ平坦で壁は底面から急な立ち上がりをみる。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺・甕、赤焼土器がある。「比」の墨書きをもつ土器壺が1点含まれている。

8号土壙

C-5区、7号土壙東に位置する。平面形は方形を基調とする不整形形を呈する。規模は東西

軸 160 cm・南北軸 109 cm・深さ 6~8 cmを計る。堆積土はシルト質土を1層確認したのみである。底面は浅い凹凸がみられ、壁はゆるやかに立ち上がりスロープ状になっている。遺物には土師器壺・甕、須恵器壺、赤焼土器がある。「比」の墨書きもつ土師器壺が1点含まれる。

9号土壤

C-5区南西側、3号住居跡東に位置する。平面形は方形を基調としているが東側が乱れており不整形を呈する。規模は長軸121cm・短軸72cm・深さ12cm程度を計る。堆積土はシルト質土を2層確認した。土器片・炭化物を多く含む。底面は北側から南側にかけてスロープ状になっており、南壁では急な立ち上がりがみられる。遺物には土師器壺・甕、須恵器甕、赤焼土器がある。

13号土壤

G-4区北壁に位置する。平面形は調査区外へ延びるため全容は不明であるが方形を基調とする。規模は東西軸124cm・北壁までの南北軸72cm・深さ20~27cmを計る。4号掘立柱建物跡と南側で重複関係にあり柱穴を切っている。堆積土はシルト質土を4層確認した。底面はほぼ平坦であるが壁際でわずかに丸みをもつ。壁は急な立ち上がりをみる。遺物には土師器壺・高台付皿・甕、須恵器壺・甕、赤焼土器、風字硯がある。

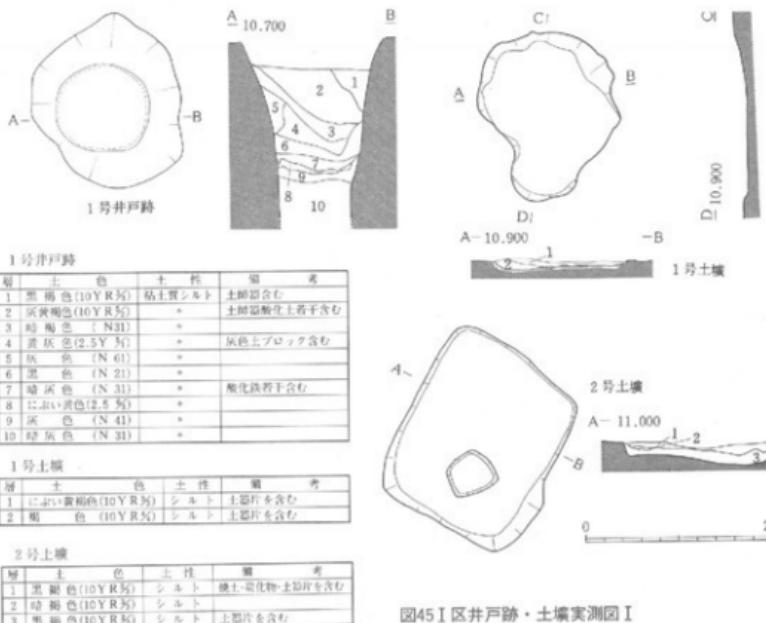


図45 I-1区井戸跡・土壤実測図 I

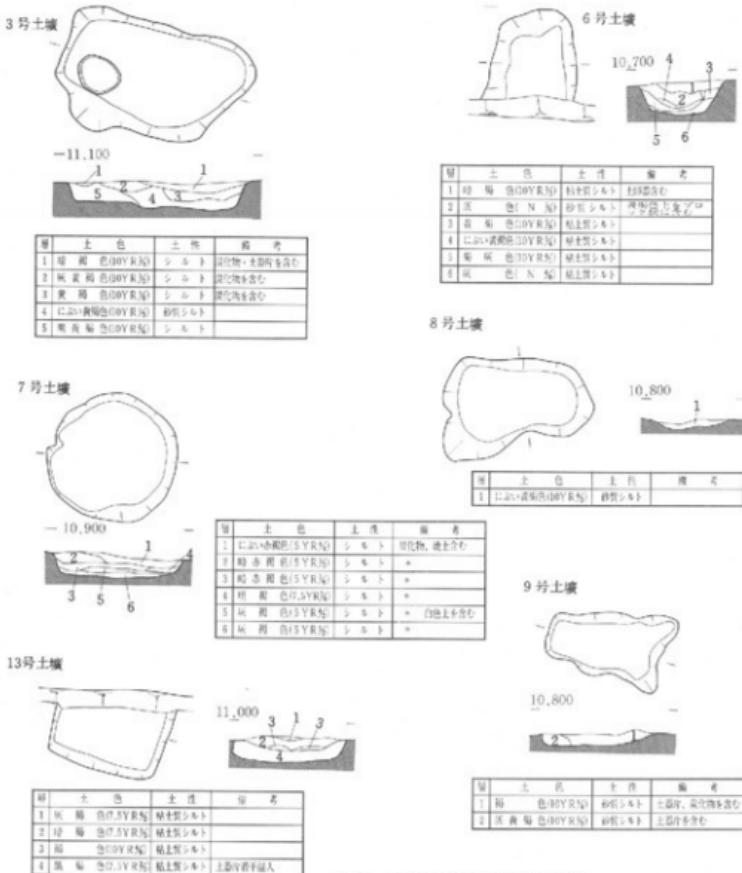


図46 I区井戸跡・土壤実測図Ⅱ

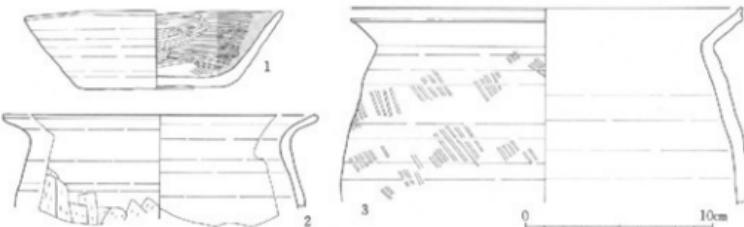


図47 I区井戸跡・土壤出土遺物Ⅰ

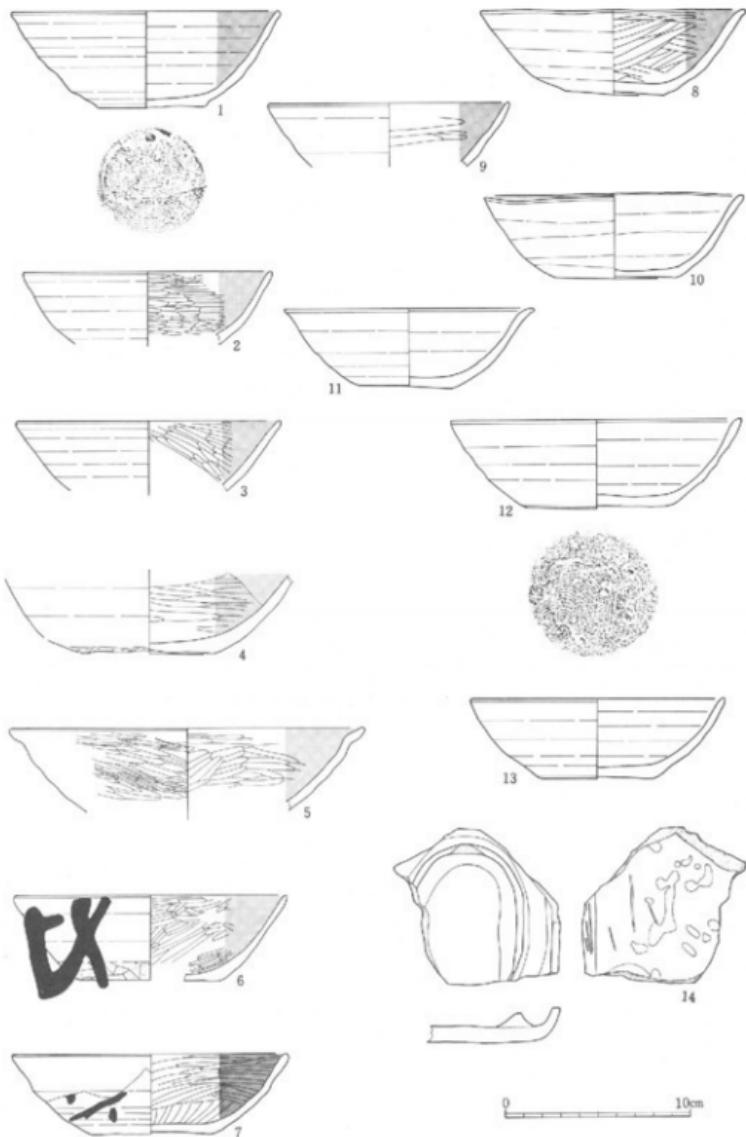


図48 I区土壤出土遺物II

因・番	種	別	器	種	層	位	外	面	調	整	内	面	調	整	口	径	武	基	高	分	類	備	考
47-1	土	師	器	種	層	位	ロクロ調整	底部	一回転	手切り	後手	持ち	ハラケズリ	ヘラミガキ	(横位)	13.6	7.8	4.2	B	IV	2号土模		
-2	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	手持ち	ハラケズリ				ロクロ調整		16.7	-	-	-	-	4号土模			
-3	*	*	*	*	*	*	タタキ接ロクロ調整						ロクロ調整		21.0	-	-	-	-	*			
48-1	*	环	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整	黒色	頭位	14.4	5.8	5.2	B	IV	7号土模		
-2	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整						ロクロ調整	黒色	頭位	13.3	-	-	-	-	*		
-3	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整						ヘラミガキ	(横位)	14.2	-	-	-	-	*			
-4	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り	後手	持ち	ハラケズリ	ヘラミガキ	(横位)	-	6.8	-	-	-	*		
-5	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	後	ハラミガキ	(横位)			ロクロ調整	黒色	頭位	19.0	-	-	-	-	*		
-6	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り	後手	持ち	ハラケズリ	ヘラミガキ	(横位)	14.6	7.6	4.5	B	IV	*		
-7	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整	黒色	頭位	14.8	6.4	4.3	*	比	化の墨書き		
-8	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り	後手	持ち	ハラケズリ	ヘラミガキ	(横位・放射状)	14.2	5.3	4.6	B	IV	8号土模 比の墨書き		
-9	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整						ロクロ調整	黒色	頭位	12.9	-	-	-	-	9号土模		
-10	半	砂	土	基	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整		13.8	6.4	4.6	-	-	*			
-11	根	老	基	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整		13.4	5.0	4.2	N	*				
-12	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整		15.0	7.7	4.8	N	*				
-13	*	*	*	*	*	*	ロクロ調整	底部	一回転	手切り			ロクロ調整		13.6	6.0	4.2	N	13号土模				
-14	現	城	字	原	*	*	周縁部欠損	、	隙縫部	U	字	状	に	陸	部	と	海	が	区	間		*	

表16 I区井戸跡・土壤掲載遺物観察表

△	上						中						下						瓦	陶器	磁石	鉄				
	环			要			环			中			下			壁										
	門縫	体部	底部	門縫	体部	底部	門縫	体部	底部	門縫	体部	底部	門縫	体部	底部	門縫	体部	底部								
1号井戸	3	8	1	5	30	4	4	7	0	1	2	0	0	4	0	0	1	1								
1分土模	5	2	2	0	18	3	1	1	0	2	0	0														
2号土模	38	41	19	10	115	6	25	38	11	11	16	6	0	6	0	2	0									
3分土模	6	22	2	0	10	0	4	2	1	2	1	0	1	3	0											
6号土模	1	1	0	0	4	0																				
7号土模	43	22	6	11	43	1	8	8	5	21	10	1	0	1	0											
8号土模	13	17	4	0	8	0	0	4	0	0	3	0														
9号土模	28	98	17	1	0	1	2	4	0				0	1	0											
13号土模	7	9	7	1	49	1	2	1	0	9	0	9	0	3	6											

表17 I区井戸跡・土壤遺物破片集計

2. II区の調査成果

調査区中央部に位置する。現状は畠地であった。地形はほぼ平坦であるが東側から西方向へかけて傾斜がみられる。当調査区も天地返し作業のため攪乱が著しく、そのためII区中央部の調査を中断している。発見された遺構は土壤1基のみである。

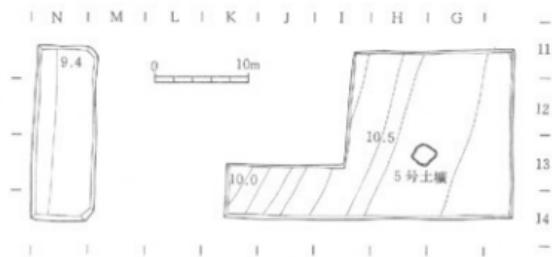


図49 II区遺構配置

1) 5号土壤と出土遺物

G・H-13区に位置する。平面形は隅九方形を呈する。規模は長軸220cm、短軸215cm、深さ12~24cmを計る。堆積土はシルト質土を6層確認した。焼土・炭化物が多くみられる。底面は若干低くなつており皿状を呈している。壁は底面から急に立ち上がりをみせる。遺物には土師器環・甕・赤焼土器環・須恵器環・甕・刀子・鉄鋒がある。

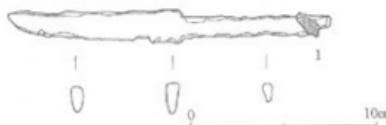


図51 5号土壤出土遺物

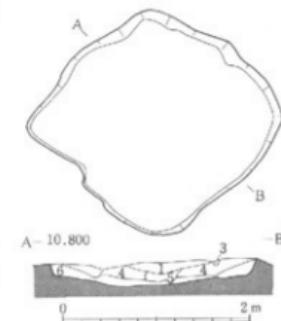
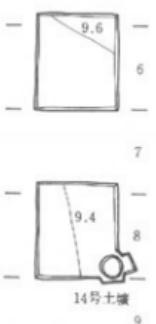
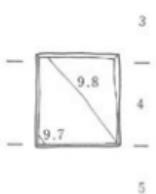
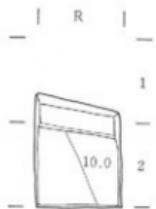


図50 5号土壤実測図

固・番	機 別	露 案	層 位	特 徴				備
				特 徴				
54-1	鉄製品	刀 手	現 土	平鋸平造り、刀身長17.2cm、刀長9.3cm、切先はフクラが枯れている。				
上 間 器	赤 焼 土 器	須 恵 器	鐵 鋒					
环	环	环	环					
口縁 体部 底部	口縁 体部 底部	口縁 体部 底部	口縁 体部 底部					
13 32 4	6 38 1	3 3 2	4 5 7	1 27 0	1			

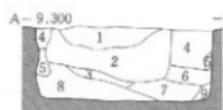
表18 5号土壤出土遺物観察・破片集計

3. III区の調査成果



1) 14号土壤と出土遺物

平面形はほぼ円形を呈する。径は185 cm程で深さ70cmを計る。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。堆積土は9層に細分される。全体的に炭化物がみられるが、特に1・2層で多く検出された。遺物は1・2層から出土しており、骨片・歯・貝殻・土師質土器皿・陶器・磁器・刀・銅製品がある。鑑定の結果、骨片・歯はシカで貝殻はアサリであることが確認されている。



層	土色	土性	特徴
1	褐色 7.5YR 5/4	シルト	骨片、貝殻、陶器断片を含む
2	赤褐色 10YR 4/2	砂質シルト	骨片、炭化物を含む
3	茶褐色 10YR 5/4	砂質シルト	
4	黄褐色 10YR 5/4	砂質シルト	
5	茶褐色 10YR 5/4	シルト	
6	茶褐色 10YR 5/4	砂質シルト	
7	明褐色 10YR 4/2	砂質シルト	
8	明褐色 10YR 4/2	砂質シルト	
9	褐褐色 10YR 4/2	シルト	

図53 14号土壤実測図

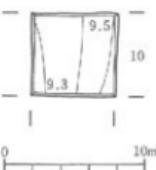


図52 III区遺構配置

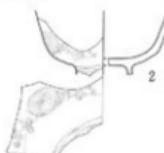


図54 14号土壤出土遺物

図・版	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底深	器高	分類	備
54-1	土師質 土器	壺	埋土	足口調整 底部二側斜め切り(右)	口クロ調整	14.3	7.4	3.2		
-2	磁器	茶碗	*	内外面花柄模様の染付	把前削?	法杖不明				
-3	*	*	*	内外面染付	法杖不明					

表19 14号土壤掲載遺物観察表

(単位 cm)

土師質土器	磁器	陶器	須恵器	刀	銅製品	貝類	哺乳類
瓶 1	茶碗 2	壺 1	甕 1	2	1	アサリ	(シカ) 頸・大腿骨・脛節骨・排骨

表20 14号土壤出土遺物集成

4. IV区の調査成果

調査区東南部に位置する。地形は平垣である。遺構は西側に集中してみられ、多くは重複関係にある。発見された遺構には溝跡4条・溝状遺構2基・土壤6基・ピットがある。

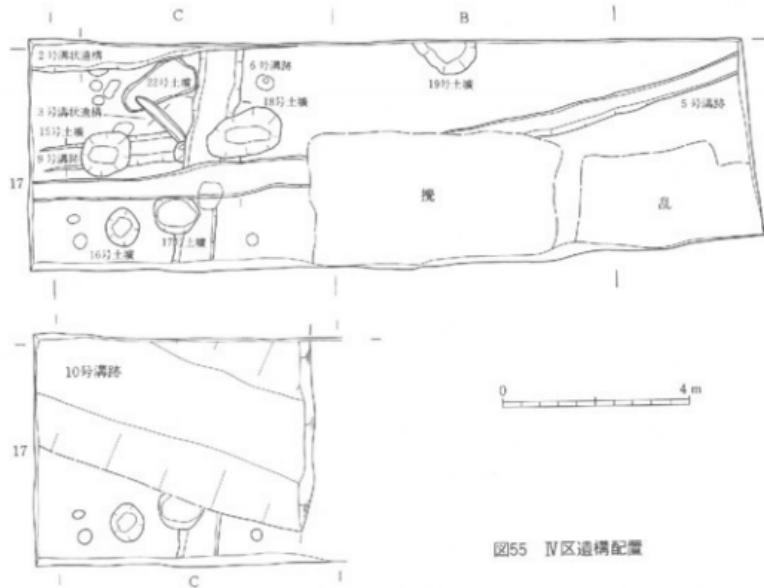


図55 IV区遺構配置

1) 溝跡・溝状遺構と出土遺物

5号溝跡

東西方向に延びるものでやや南側に屈曲している。確認長は15.2mを計る。上幅は42~78cm、底面幅30~63cm、深さ20~25cm程度である。断面は浅いU字状を呈する。6号溝跡と17号土壤と重複関係にあり両者を切っている。堆積土は粘土質シルト層を1層確認した。遺物には土師器壺・甕・須恵器蓋・甕がある。

6号溝跡

南北に延びる溝跡である。確認長は4.54mを計る。上幅は80~90cm、底面幅60cm、深さ23~

31cm程である。底面には浅い凹凸がみられ、断面はU字状を呈する。17号・18号土壤・5号溝跡・2号溝状遺構・ピットと3号溝状遺構と重複関係にあり前者に切られ後者を切っている。堆積土はシルト質土を3層確認した。遺物には土師器甕・須恵器甕・甕がある。

9号溝跡

東西に延びる小溝跡である。確認長は2.8mを計る。上幅60cm、底面幅30~40cm、深さ15~18cmである。断面はU字状を呈する。15号土壤・3号溝状遺構と重複関係にあり切られている。堆積土はシルト質土を1層確認した。遺物には土師器甕・甕・須恵器甕・甕がある。

10号溝跡

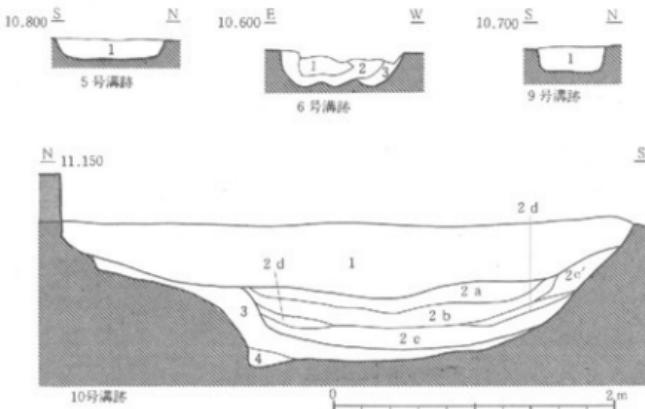
擾乱部のため調査区西側のみの確認にとどまっている。調査区外へ延びているため上幅は不明であるが4m程と推定される。底面幅は1.6~1.8m、深さ2m程である。壁はゆるく立ち上がり断面は皿状を呈する。ほとんどの遺構は当溝跡の堆積土内で確認されている。堆積土は大別して4層確認された。遺物には土師器甕・甕がある。

2号溝状遺構

調査区北西側に位置し南辺のみの確認である。南辺部確認長は5.7mを計る。南壁は垂直に立ち上がり深さは50cm程を計る。6号溝跡・ピットと重複関係にあり両者を切っている。堆積土は粘土質シルト土を6層確認した。遺物には土師器甕・甕・須恵器甕・甕がある。

3号溝状遺構

北西~南東に延びるものである。確認長は1.4mで上幅25cm、底面幅15cm、深さ25cm程を計る。9号溝跡・22号土壤と6号溝跡と重複関係にあり前者を切って後者に切られている。堆積土は粘土質シルト土を1層確認した。遺物は検出されなかった。





5号溝跡

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	酸化鉄を含む

6号溝跡

層	土色	土性
1	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト
2	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト
3	黄褐色 10YR 4/2	砂質シルト

9号溝跡

層	土色	土性	備考
1	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	

10号溝跡

層	土色	土性	備考
1	にぼい黄褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	
2a	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	グライジンを含む
2b	褐灰色 10YR 4/2	粘土質シルト	グライ
2c	にぼい黄褐色 10YR 4/2	砂	黄褐色土を含む
2d	にぼい黄褐色 10YR 4/2	砂	
2e	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	
3	にぼい黄褐色 10YR 4/2	砂	
4	にぼい黄褐色 10YR 4/2	粘土	

2号溝状遺構

層	土色	土性
1	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト
2	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト
3	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト
4	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト

3号溝状遺構

層	土色	土性
1	褐色 10YR 4/2	粘土質シルト

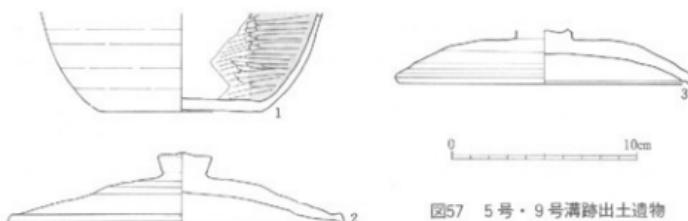


図57 5号・9号溝跡出土遺物

区分	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備考
5T-1	土師器	罐	埋土	ロクロ西側 底部一帯持ちハラケズリ	ハラミダギ(横位→方向) 黒色處理	—	8.6	—	5号溝	
—2	須恵器	壺	*	上部一側斜ヘラケズリ、下部ロクロ 口部縦縫、ツヅミ一層宝珠	ロクロ調整	18.0	—	3.8	*	
—3	*	*	*	底縫ヘラケズリ ツヅミ部欠損	ロクロ調整	18.0	—	—	号9溝	(単位 cm)

表21 5号・9号溝跡揭露遺物観察表

2) 土壤と出土遺物

15号土壤

平面形は梢円形を呈する。規模は長軸 105 cm、短軸 90 cm、深さ 36~47 cm を計る。9号溝跡、ピットと重複関係にあり両者を切っている。堆積土は粘土質シルトを 4 層確認した。底面はほ

ば平坦で壁はゆるく立ち上がり断面は浅いU字状を呈する。若干量の土師器甕、須恵器甕が出土している。

16号土壙

平面形はやや歪んだ円形を呈する。規模は径72~80cm、深さ44cmを計る。堆積土は大別して4層確認した壁はやや強く立ち上がり断面はU字状を呈する。遺物は検出されなかった。

17号土壙

平面形は梢円形を呈する。規模は東西軸100m、南北軸78cm、深さ24~29cmを計る。5号溝跡と6号溝跡と重複関係にあり前者に切られ後者を切っている。堆積土は粘土質シルト土を4層確認した。底面には凹凸がみられ壁は底面から垂直に立ち上がっている。遺物は検出されなかった。

18号土壙

平面形は北東部がやや幅をもつ梢円形を呈する。規模は長軸165cm、短軸90cm、深さ83~90cmを計る。6号溝跡と重複関係にあり切っている。堆積土は粘土質シルト層を確認した。底面はほぼ平坦で壁は急な立ち上がりをみせる。遺物には土師器甕・甕、須恵器甕・甕がある。

19号土壙

調査区北壁に位置しており全容は不明である。平面形は梢円形を呈すると思われる。規模はトレチノ北壁までの南北軸80cm、土壤南側での深さ70cmを計る。堆積土は大別して5層に分かれる。底面は浅い凹凸がみられ壁は急な立ち上がりをみせる。遺物には土師器甕、須恵器甕がある。

22号土壙

平面形は長円形を基調とする不整形である。規模は長軸170cm、短軸74cm、深さ16~26cmを計る。3号溝状遺構と重複関係にあり切られている。堆積土はシルト質土を4層確認した。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がっている。遺物は検出されなかった。

△	土 师 器				赤 燐 土 器				須 恵 器			
	甕		甕		甕		甕		甕		甕	
	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部
15号土壙			0	2	0				0	0	1	
18号土壙	1	4	1	0	34	0	0	8	0	1	0	0
19号土壙			0	14	0	0	4	0	0	0	1	

表22 IV区土壤遺物破片集計

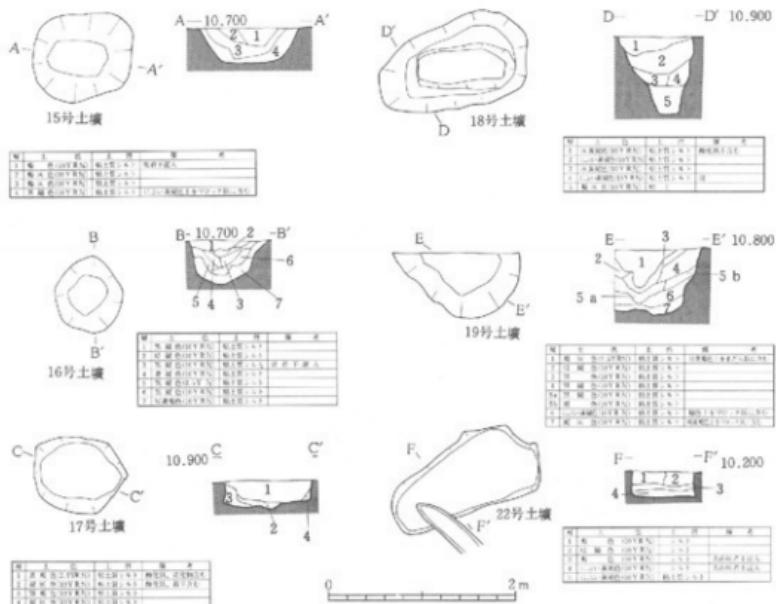


図58 VI区土壤実測図

5. V区の調査成果

調査区最南部に位置する。地形はほぼ平坦であるがゆるやかに東側へ傾斜をみる。調査区中央部から東側へかけて天地返し作業が著しい。発見された遺構には溝跡2条・井戸跡3基・土壙2基・ピット群がある。また、E-21区で焼土・炭化物が集中する場所があり住居カマド跡とも考えられたが攪乱が著しく不明となっている。

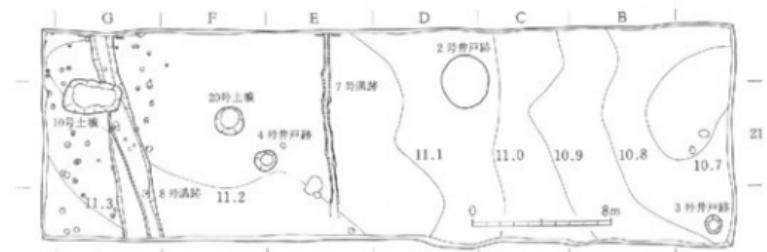


図59 V区遺構配置図

1) 溝跡と出土遺物

7号溝跡

南北に延びる溝跡である。天地返し作業のため南側が消失している。確認長は9.8mを計る。上幅20~46cm、底面幅12~26cm、深さ10~20cm程である。断面はU字状を呈す。堆積土はシルト質土を3層確認した。遺物には土師器甕がある。

8号溝跡

調査区西側を南北に延びる溝跡である。南側で段をもち幅広くなっている。確認長は12mを計る。上幅は北側で1.3m、南側で2m、底面幅は58~63cm、深さは40~80cmである。底面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。堆積土は大別して7層確認した。遺物は検出されなかった。

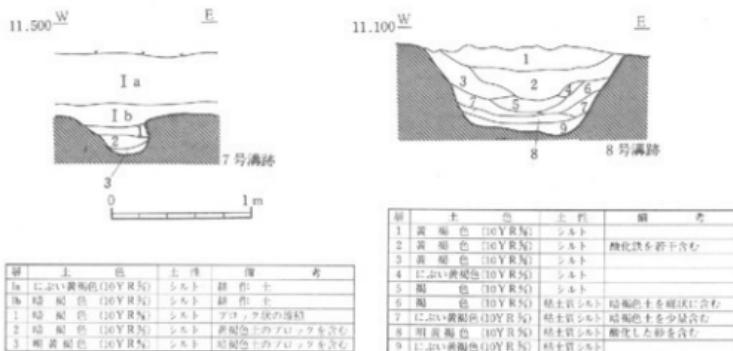


図60 7号・8号溝跡断面図

2) 井戸跡・土壤と出土遺物

2号井戸跡（11号土壤）

ほぼ円形の掘り方をもつ石組みの井戸跡である。掘り方は径2.6~3mを計り、壁は垂直に落ちており深さ2.2mまで確認した。掘り方埋土は6層まで検出した。粘土質・砂質シルト土で構成されており、ほぼ水平に積み上げている。石組みは掘り方北側に位置する。径30cm程の河原石を放射状に配し井戸枠としている。井戸枠の内法は80cmを計る。石組みの積み上げ方は乱積みである。井戸枠内の堆積土は3層確認したが、各層より多量の河原石が検出された。井戸枠内より須恵器甕が出土している。

3号井戸跡（12号土壤）

平面形はほぼ円形を呈する。径95~103cm、底面径60cm、深さ113cmを計る。壁面は急な立ち上

がりをみせ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は大別して3層まで確認した。柱組等が検出されず素掘りの井戸跡と考えられる。遺物には土師器甕・須恵器甕がある。

4号井戸跡 (21号土壤)

平面形は情円形を呈する。径115~120cm、底面形75cm、深さ165cmを計る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり上半部でやや外傾している。堆積土は大別して4層まで確認した。素掘りの井戸跡と考えられる。遺物には土師器甕・中世陶器・陶器がある。

10号土壤

平面形は方形を基調とする不整形を呈する。長軸315cm、短軸190cm、深さ62cmを計る。壁面は底面からゆるやかに立ち上がりをみせ、断面は皿状を呈する。8号溝跡と重複関係にあり切っている。堆積土は粘土質シルト土を3層確認した。遺物には土師器甕・甕・須恵器甕・甕、陶器がある。

20号土壤

平面形はほぼ円形を呈する。径は155~160cm、底面形105~110cm、深さ80cmを計る。底面は平坦で壁面は急に立ち上がり、断面は逆台形を呈する。堆積土は大別して5層確認した。遺物には土師器甕・須恵器甕・甕がある。

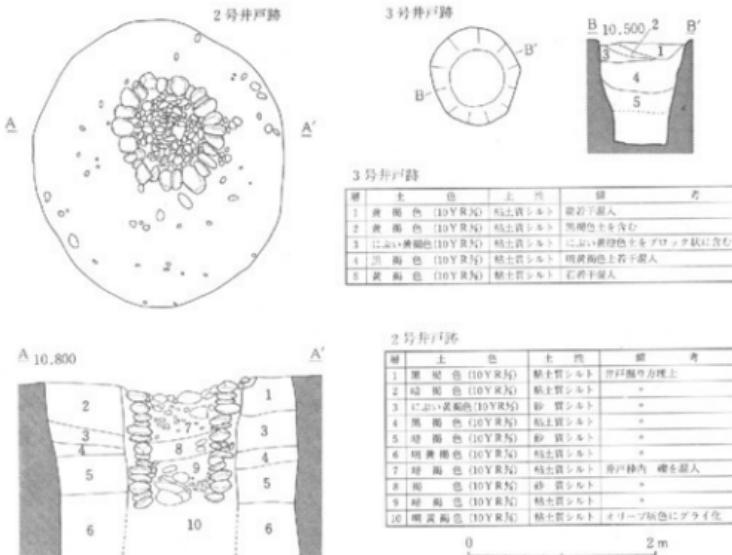


図61 2号・3号井戸跡実測図

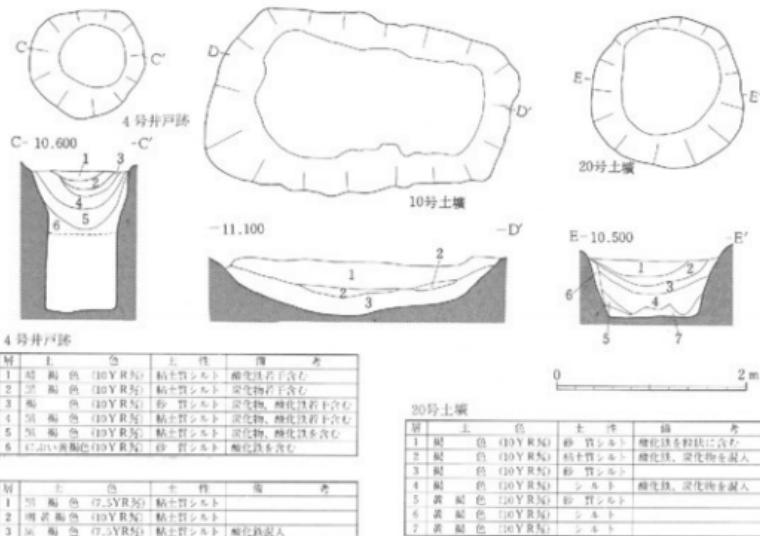


図62 4号井戸跡・10号・20号土壤実測図

層	土 器				須 恵 器				陶器	
	环		壺		环		壺			
	口縁	体部	底部	口縁	体部	底部	口縁	体部		
2号井戸跡								0	3	0
3号井戸跡				0	4	0		0	1	0
4号井戸跡	0	0	新石付壺	0	6	0		0	1	0
10号土壤	0	2	1	2	8	0	1	1	0	0
20号土壤				0	10	0	3	1	0	2

表23 V区井戸跡・土壤遺物破片集計

6. 遺構外の出土遺物

南小泉遺跡の当地区は前述の様に天地区C作業のために擾乱が著しく表土中に多量の遺物が含まれている。ほとんどが細片であるが図化可能なものが十数点含まれていた。種類としては土師器壺・高台付壺・高台付皿・甕・須恵器壺・壺、中世陶器、貨幣、鉄製品がある。

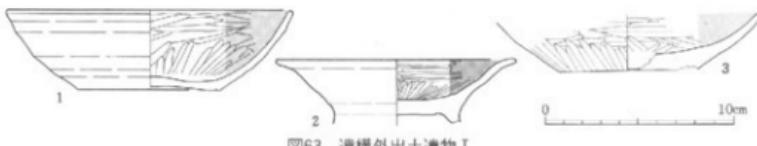


図63 遺構外出土遺物 I

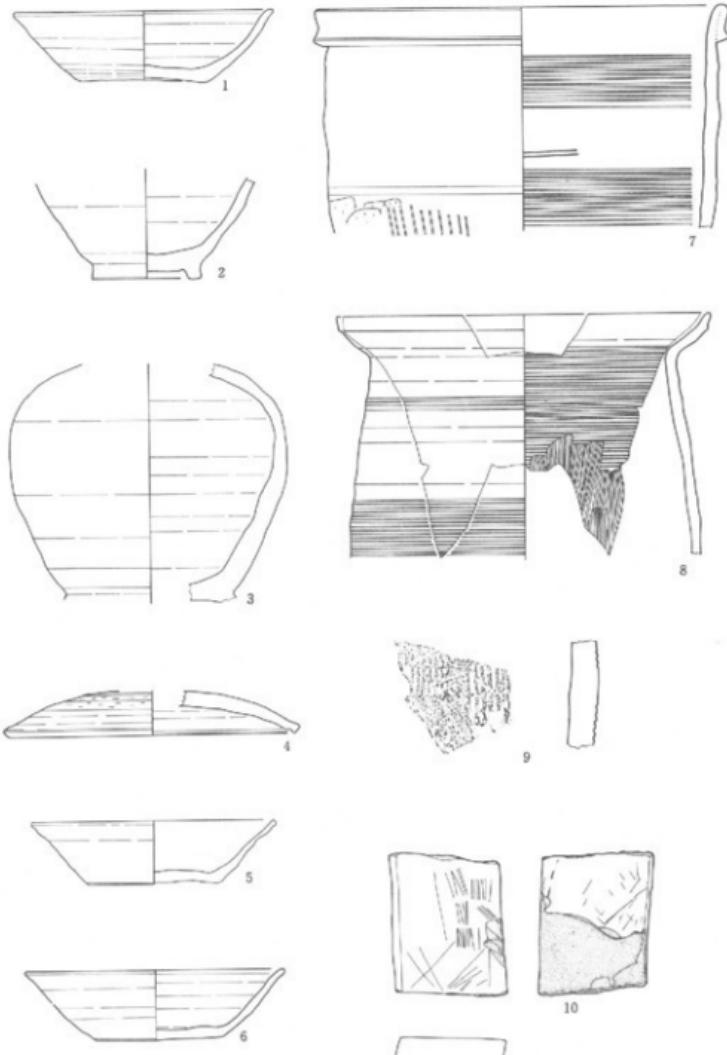


図64 遺構外出土遺物Ⅱ



図65 遺構外出土遺物Ⅲ

固・番	種別	器種	地区	外表面調査	内面調査	口径	底径	器高	分類	備考
63-1	土師器	环	I区	ロクロ調整 底部一回転ヘラ切り(右)	ヘラミガキ(横位・放射状) 無色地	15.3	7.6	4.3	BⅢ	
-2	*	高台付環	*	ロクロ調整	ヘラミガキ(横位・放射状)	12.8	—	—	I?	無色地
-3	*	高台付环	*	ヘラミガキ(横位・縱位)	ヘラミガキ(横位・放射状) 無色地	—	—	—		
64-1	須恵器	环	*	ロクロ調整 底部一回転ヘラ切り(右)	ロクロ調整	13.8	6.7	3.2	II	
-2	*	壺	*	ロクロ調整	ロクロ調整	—	(高台)	—		5.7
-3	*	*	*	ロクロ調整 下部ヘラケズリ	ロクロ調整	—	—	—		
-4	*	蓋	Ⅳ区	ロクロ調整 上部一回転ヘラケズリ	ロクロ調整	15.7	—	—		
-5	*	环	V区	ロクロ調整 底部一ヘラケズリ	ロクロ調整	13.0	6.9	3.4	III	
-6	*	*	*	ロクロ調整 底部一回転ヘラ切り	ロクロ調整	13.9	6.7	3.8	III	
-7	土師器	甕	*	ロクロ調整	ロクロ調整	21.9	—	—		折り返し 口縁
-8	*	*	*	ロクロ調整 後回転ヘラナデ	回転ヘラナデ 下部一ヘラナデ	19.9	—	—		
-9	小形陶器	*	*	窯外画面 暗赤褐色	細長い格子目に「X」の入る押印がみられる。					
-10	石製品	砥石	I区	上下端部欠損、長方形を呈すると考えられる。細かい小溝が全周にみられる。石材 粘板岩						
65-1	*	*	*	欠損部、細かい小溝が全周にみられる。石材 シルト岩						
-2	*	根状石製品	*	下部欠損、窯面がみられる。上面に「大」の形の刻線、端部に刻文、ヒトガタ?						
-3	鐵製品	鉗	*	鋸化が著しいU字状を呈する。						
-4	銅製品	古銭	V区	開元通宝、北宋銭、初鑄年 821年 書体一真書						

表24 遺構外揭露遺物観察表

(単位 cm)

VI. 出土遺物の総括

1. 遺物の種類と分類

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、土師質土器、硯、瓦、土製品、金属製品、動物遺存体がある。これらの中で土師器と須恵器の出土量が最も多く、また強い共伴関係のみられるものもある。以下、種類ごとに記述し、一部のものについては縦年的位置づけまで述べることにする。

弥生土器

弥生土器は口縁部資料 1 点、体部資料 2 点（図44-2・3・4）の計 3 点の出土である。

2：口縁部は平口縁でわずかに内厚している。平行した横位の太めの沈線が二条施こされ、その下部には磨消繩文（斜位の L R 繩文）による変形した工字文が施文されている。内面は横位のミガキがみられる。器形は深鉢と考えられる。

3：斜位の L R 繩文が施こされ、平行した横位の太めの沈線が三条施こされている。内面は横位のミガキがみられる。2 と同一個体と考えられる。

4：体部下端の資料で横位の L R 繩文が施こされている。内面は横位のミガキがみられる。器形は浅鉢と考えられる。

次にこれらの土器の縦年的位置づけについて考えてみたい。各資料の特徴を上げてみると、横位の太い沈線・磨消繩文・L R 繩文である。これらの特徴をもつ土器は大泉遺跡や鍾沼遺跡(註3)から出土しており「大泉式」とされているものである。これらから 4 の資料を除く土器は「大泉式」に比定されると考えられる。

土師器

土師器には高壺・壺・高台付壺・高台付皿・甕・壇・小瓶・蓋・ミニチュア土器の器種がある。成形段階でロクロを使用するものと使用しないものがあり、前者が圧倒的に多く出土している。図示総数は 155 点にのぼる。

高壺

図示したものは 5 点のみである。全て壺部と脚部下部が欠損しており、摩滅のため調整不明のものが多い。ロクロは使用していない。脚部の特徴から 3 類に分けられる。

I 類：脚柱状上部が中央で裾部が開くものである。器面調整は外面がヘラミガキ、内面はシ

ボリメが観察されるのみである。(図28-2・3)

Ⅱ類：脚部が柱状部から裾部にかけて円錐状に聞くものである。器面調整は外面は摩滅のため判然としない。内面は柱状部上部にシボリメがみられ、下部には浅いヘラケズリがみられる。

(図28-9・10)

Ⅲ類：脚部が幅広で短かく裾部が円錐状に聞くものである。器面調整は外面がヘラケズリ、内面は横位のヘラケズリがみられる。(図28-7)

以上、各類の特徴を述べたが全て欠損品であるため詳細は不明であるが、Ⅰ・Ⅱ類としたものは、南小泉遺跡や岩切鴻ノ巣遺跡から出土しており「南小泉式」に比定されるものである。

(註5) (註6)
Ⅲ類は栗遺跡等から出土しており「栗園式」に比定されると考えられる。

坏

図示資料は96点にのぼる。住居跡や溝跡からまとまりをもって出土しており強い共伴関係がみられる。また、墨書きもつもの多くみられる。

坏は製作技法の違いにより大きく2類に分けられる。ロクロ不使用のものとロクロ使用のものである。ロクロ不使用のものをA類、ロクロ使用のものをB類とする。両類はさらに器形・調整の違いで細分することができる。

A類：製作に際しロクロを使用していないものである。図示したものは3点(図28-6・8・11)と少なく欠損部も大きく全体の器形を知り得ない面があるため細分は行なわずに個々の特徴を述べるにとどめる。

6：底部が欠損している。体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。器面調整は外面があらいヘラミガキ、内面も横位のあらいヘラミガキが施されている。内面には黒色処理がみられる。大形のものである。

8：底部が剥離している。体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。内外面に黒色処理がみられる。小形のものである。

11：底部が丸底風平底のものである。体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけて浅いヘラケズリがみられる。内面調整は摩滅のため判然としないがヘラミガキが施されていると考えられる。内面には黒色処理がみられる。6・8の坏と較べると中形のものである。

B類：製作に際しロクロを使用しているものである。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。坏の法量(口径・底径・器高)の各々の割合の違いから大きく4類に分類できる。また、体部から口縁部にかけての形態の違いや調整の有無の違いからも細分が可能である。

B I類：口径に対する底径の割合が50~60%、口径に対する器高の割合が20~30%、底径に

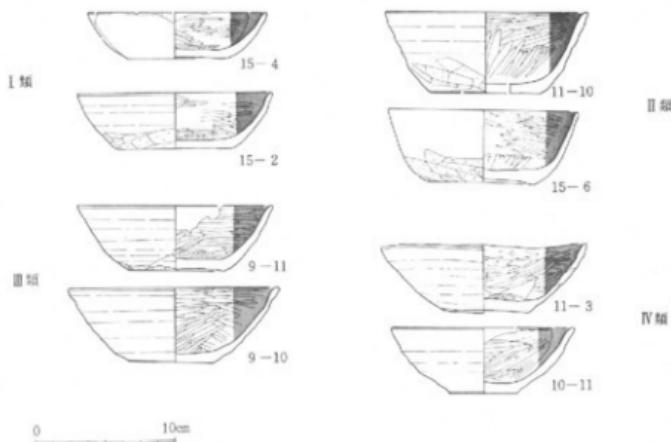


図66 土師器坏B類分類図

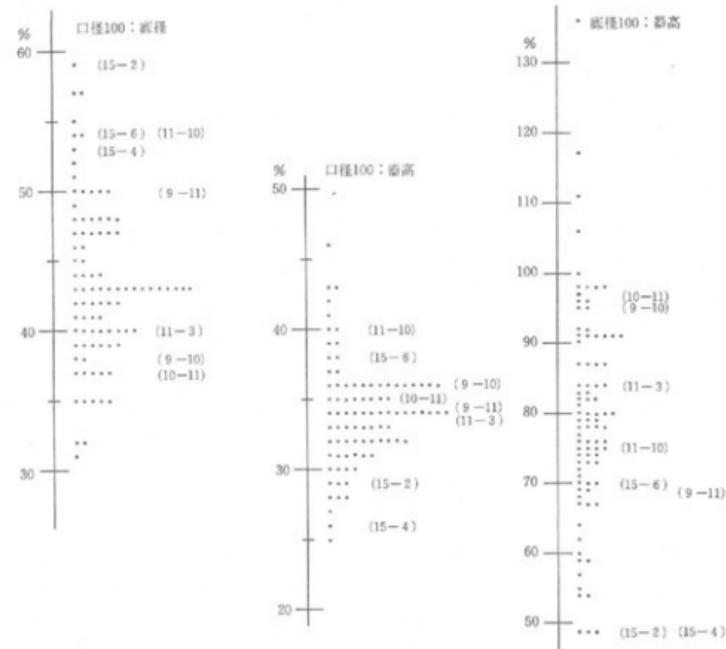


表25 土師器坏B類口径・底径・高さの比

対する器高の割合が50~60%のものである。他の類に較べて器高が低く全体的に扁平な器形をもつものである。大きさはほぼ同じ位である。形態・調整の違いから下記に細分できる。

A：体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり、再調整のみられるものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるが、回転糸切りの痕跡の残るもの(i)と切り離し痕跡の不明なもの(ii)がある。

B：体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がり、無調整のものである。底部には回転糸切りの痕跡がみられる。

B II類：口径に対する底径の割合が50~60%、口径に対する器高の割合が40%前後、底径に対する器高の割合が60~80%のものである。全体的に底径が大きく深めの器形をもつものである。ほぼ同じ法量をもつ。特徴として体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり、再調整のみられるものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされる。回転糸切り痕跡の残るもの(i)と切り離し痕跡が不明なもの(ii)がある。

B III類：口径に対する底径の割合が30~50%、口径に対する器高の割合が30~40%、底径に対する器高の割合が60~90%のものである。口径に対し底径が小さく、やや深めの器形をもつものである。大きさはほぼ同じ位であるが、大形のものも若干含まれる。形態・調整の違いから下記に細分できる。

A：体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるもの(a)、底部に手持ちヘラケズリが施こされるもの(b)、体部下端に手持ちヘラケズリが施こされるもの(c)、再調整のないもの(d)に分けられる。また、(a、b)については回転糸切りの痕跡の残るもの(i)と切り離し痕跡が不明なもの(ii)がある。

B：体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾しながら立ち上がるものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるもの(a)、底部に手持ちヘラケズリが施こされるもの(b)、体部下端に手持ちヘラケズリが施こされるもの(c)、再調整のないもの(d)に分けられる。また、(a、b)については回転糸切りの痕跡が残る(i)。

C：体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾しながら立ち上がり口縁部でわずかに外反するものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるもの(a)、底部に手持ちヘラケズリが施こされるもの(b)、再調整のないもの(d)に分けられる。また、(a、b)については回転糸切りの痕跡が残る(i)。

B IV類：口径に対する底径の割合が30~40%、口径に対する器高の割合が30~40%、底径に対する器高の割合が90%以上のものである。口径に対し底径が小さく、やや深めの器形をもつものである。B III類に類似するが底径がさらに小さい特徴をもつ。体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾しながら立ち上がるものである。再調整はみられない。

以上、坪はA・B類に分けられ、細分まで行なった。A類は製作技法、器形、調整の特徴から「国分寺下層式」に、B類は「表杉ノ入式」に比定されると考えられる。特にB類は4類に細分することができ、各類の組み合わせや須恵器との強い共伴関係がみられるため、別項で詳述したい。

高台付坪

図示資料は1点のみである。(図63-3) 製作に際しロクロを使用している。口縁部・高台部が欠損しており全容は不明である。器面調整は外面がヘラミガキ、内面もヘラミガキが施こされ、内面には黒色処理がみられる。底部の剝離面からみて付高台である。

高台付皿

大きくみて高台付坪の範疇に属するものであるが、皿部が坪に較べて器高が低く、体部から口縁部にかけて外傾又は外反気味に立ち上がるものを皿とした。

製作に際しロクロを使用している。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施こされている。台部は付高台である。形態の違いから2類に分類できる。

I類：高台部が「ハ」の字状に張り出し、皿部で体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がるものである。高台の高いから長いもの(a)、短いもの(b)に分けられる。底部に回転糸切りの痕跡がみられるものもある。全体的に薄での作りである。

II類：高台部が「ハ」の字状に張り出し、皿部で体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものである。底部に回転糸切りの痕跡がみられるものもある。I類に較べてやや大きめで厚での作りである。

甕

欠損品が多く全体の器形を知り得るものは少ない。製作に際しロクロを使用している。底部破片資料に回転糸切り痕跡のみられるものがある。残存部分の形態から大きく2類に分類できる。

I類：口縁下部から体部が外方へ張りだすものである。口縁部は体部から外反したのち、そのまま端部が丸くおさまるもの(図19-5)、端部上面が三角形に突き出すもの(図17-1)、端

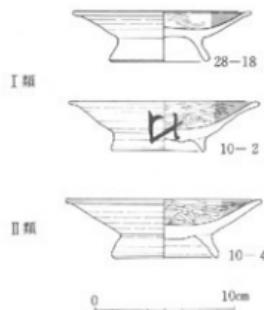


図67 高台付皿分類図

部がわずかに上方へ傾いて三角形を呈するもの(図36-1)がある。最大径の位置が口縁部にあるものと体部にあるものがある。器面調整は、外面では縦位のヘラケズリがみられる。ヘラケズリ前にハケメ調整のみられるものがあり、ロクロ調整前に平行タタキが認められるものもある。内面では回転ハケメ、ハケメ、ナデ調整が認められる。残存部分でみればロクロ調整のみが主体を占めている。口縁の違いから大形・中形・小形に分けることが可能である。大形のなかには長胴形のものが1点認められる。

II類：口縁部に最大径が位置するもので、いわゆる鉢形を呈するものである。口縁部は体部から外反したのち端部上部が三角形に突き出るもの(図33-2)、口縁部が直立し折り返し口縁となっているもの(図64-7)がある。器面調整は、外面では縦位のヘラケズリがみられ、ロクロ調整前に平行タタキが認められるものもある。内面は回転ハケメ、ナデが認められる。

壇

器形としては高台付壇の範疇に入るものであるが、各部位の特徴等から灰釉陶器の影響が認められ、あえて壇と呼称した。製作に際しロクロを使用している。ロクロからの切り離しは摩耗のため不明である。壇部は体部から口縁部にかけて内弯気味に丸く立ち上がり、口縁部でかるく外反する。高台部は低めのもので外面上部にかすかに稜がみられ、内面は内弯している。いわゆる三日月高台を呈する。内外面とも黒色処理が施され、外面には回転ヘラミガキ、内面にはヘラミガキがみられる。全体的に薄での作りである。(図11-17)

小瓶

口縁部が欠損しているが、灰釉陶器の影響での器形と考えられ小瓶と呼称した。製作に際しロクロを使用している。低めの台部があり、台部との接点から体部は下脹れ状に丸く上方に立ち上がる。底部には「十」の刻線がみられる。器面調整は、外面では台部の接地面を除いて全面ヘラミガキが施され、黒色処理されている。内面はロクロ調整のみである。(図10-6)

蓋

高台付皿とも考えうるが、器形・調整の面から相違がみられ、蓋とした。天井部は丸みをもって下がり口縁部でかすかに外反する。ツマミ部は直立気味に立ち上がりさらに外傾しラッパ状を呈する。内外面ともヘラミガキ・黒色処理が施されている。(図11-18)

ミニチュア土器

壇：口縁部が欠損しているが、器高4cm程の小形の壇である。底部から頸部にかけて丸みを

もって立ち上がり径2cm程の頸部をもつ。外面は底部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされており、内面はミガキ状のナデ調整がみられ黒色処理がなされている。(図11-19)

赤焼土器

ここで赤焼土器としたものは酸化炎焼成で焼かれたもので、ヘラミガキ・黒色処理の施こされていない土器をさす。外面色調は土師器と同系色を呈するが、焼成状態等から須恵器と区別し、内面調整等から上師器とも一応区別している。

図示資料は2点のみで、破片資料も他のものに較べると少ない。器形の特徴は、体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾しながら立ち上がるもので、再調整はみられない。法量の割合をみると、土師器環B III A d類に類似するものである。(図10-5・図48-10)

須恵器

須恵器には环、高台付环、甌、壺、蓋の器種がある。図示総数は101点にのぼる。

环

环の法量(口径・底径・器高)の各々の割合から大きく4類に分類できる。また、体部から口縁部にかけての形態、調整の有無、ロクロからの切り離し技法の違いから細分もできる。底部は全て平底である。

I類：口径に対する底径の割合が60%程、口径に対する器高の割合が40%程、底部に対する器高の割合が70%程のものである。他の類に較べて深めの器形をもつものである。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものである。底部に回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

II類：口径に対する底径の割合が50~60%、口径に対する器高の割合が30%以下、底径に対する器高の割合が40~60%のものである。全体的に器高が低く扁平な器形をもつものである。ほぼ同じ法量をもつ。形態の特徴は体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものである。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施こされるもの(a)、再調整のないもの(b)に分けられる。また、切り離し痕跡が回転糸切りのもの(i)、回転ヘラ切りのもの(ii)、切り離しが不明なもの(iii)がある。

III類：口径に対する底径の割合が50%前後、口径に対する器高の割合が30%前後、底径に対する器高の割合が60~70%のものである。II類に類似するがやや深めの器形をもつ。ほぼ同じ法量をもつ。形態・調整の違いから下記に細分できる。

A：体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものである。底部に回転ヘラケズリが施こされるもの(a)、再調整のないもの(b)に分けられ、切り離し痕跡が回転糸切りのもの(i)、回転

ヘラ切りのもの(II)がある。

B：体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾し立ち上がるるものである。底部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施こされるもの(a)、体部下端に手持ちヘラケズリの施こされるもの(b)、再調整のないもの(c)に分けられ、切り離し痕跡が回転系切りのもの(I)、回転ヘラ切りのもの(II)

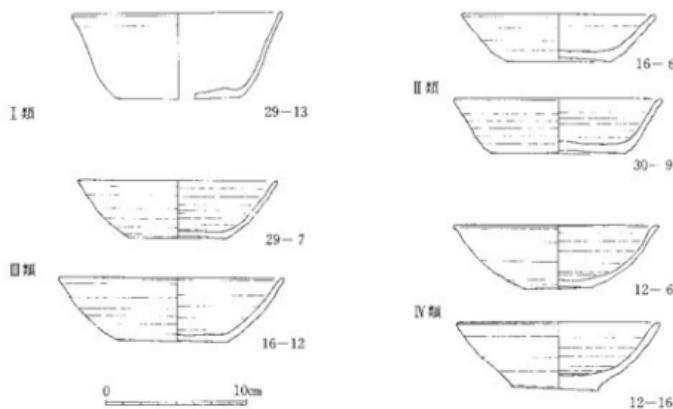


図68 須恵器壺分類図

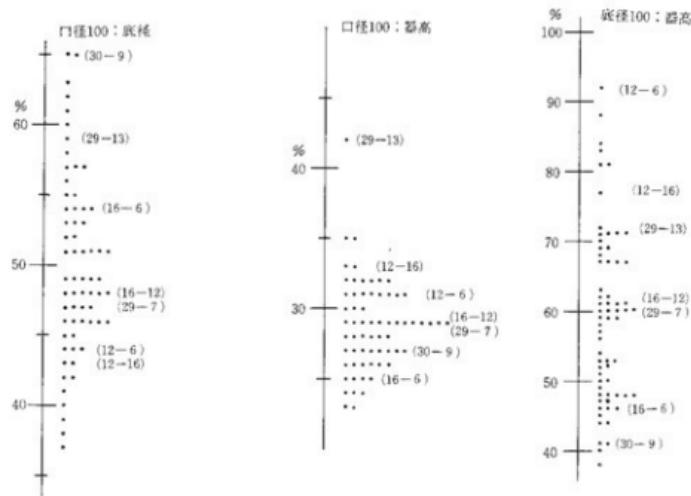


表26 須恵器壺口径・底径・器高の比

がある。

VI類：口径に対する底径の割合が40%前後、口径に対する器高の割合が30~40%、底径に対する器高の割合が70~90%のものである。III類に類似するが口径に対し底径の小さめのものである。形態の特徴は、体部から口縁部にかけて内寄気味に外傾するものである。体部下端に手持ちヘラケズリの施こされるもの(a)、再調整のないもの(b)に分けられる。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。

高台付坏

図示資料は1点のみである(図30-13)。高台部が剥落している。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるるものである。底部に回転ヘラケズリが施こされている。

甕

全体の器形を知り得るものは少ないが、口縁部・体部等の形態から大きく3類に分けることができる。

I類：体部上部から口縁部が大きく外反するものである。最大径は体部に位置するものと考えられる。大形のものと小形のものがある。口縁端部上下面が三角形に突き出すもの(図37-3)、下面が三角形に突き出すもの(図40-4)、口縁部が丸くおさまるもの(図38-4)がある。外面調整は平行タタキ、格子タタキが観察され、内面には単位不明であるが放射状のオサエ、ナデがみられる。

II類：体部上部から口縁部が直立気味に外反するものである。I類に較べてやや小形で、体部は丸みをもちなで肩を呈する。最大径は体部に位置する。口縁端部が外方へ三角形を呈し突き出す(図41-5)。外面調整は平行タタキがみられ、内面は一部ナデがみられる。

III類：底部から体部は丸みをもって内寄しながら立ち上がり、口縁部は短かく外傾するものである(図40-3)。最大径は口縁部に位置する。口縁端部上面は三角形を呈し上方へ突きだす。外面調整には平行タタキがみられ、底部上端にヘラケズリの施こされるものもある。内面に回転ヘラナデ・あらいヘラナデが観察されるものがある。

他に、体部破片資料であるが体部下半に脚状の粘土貼付がみられるものがある(図39-2)。

壺

破片資料が多く全容を知り得るものは少ない。大きくみて、大形・中形・小形品があり、短頸ものと長頸のものがある。

大形品：(図42-3)底部から外方へ丸みをもって立ち上がり、頸部で「く」の字に短かく

外傾するものである。最大径は体部上部と思われる。外面調整は摩滅のため不明部分が多いが、ロクロ調整が全面にみられ、体部下端にかすかに横位のヘラケズリがみられる。内面はロクロ調整のみである。断面は灰白色を呈し、内外面は灰色でくすんだ色を呈している。器面には焼成時点での細かい剝離がみられる。軟質の短頸壺と考えられる。

(図41-3) 頸部径が大きく口縁部へかけて直立気味に立ち上がりのみられる長頸のものである。頸部にかすかな高まりがみられ隆起状を呈す。体部は直線的に外方へ張り出す。調整はロクロ調整である。

中形品：(図64-3) 口縁部が欠損している。高台付のもので付高台である。体部は丸みをもって立ち上がり頸部にいたる。調整はロクロ調整で体部下端に回転ヘラケズリが施される。高台部にはナデ調整がみられる。

小形品：(図38-2) 体部から頸部にかけてのものである。体部形態は算盤玉形を呈す。調整はロクロ調整のみである。

蓋

破片資料であるが4点出土している。天井部から口縁部へかけて丸みをもっておさまる。ツマミ部の残在するものには擬宝珠とツマミ上端部がリング状を呈するものがある。天井部上端口縁端部に回転ヘラケズリ調整が施されるものがある。

陶磁器

陶磁器類には綠釉陶器、中世陶器甕・鉢、陶器壺、磁器の茶碗がある。全て破片資料である。

綠釉陶器：I区Ⅰ層中から1点出土している。器形・部位は不明である。器厚は3mm程を計る。胎土色調は灰白色を呈し、剥落部分が多いが外面に緑色の釉がみられる。

中世陶器：甕体部3点、鉢底部1点の計4点が出土している。甕には体部外面に細長い格子目に「×」の入る押印のみられるものがある(図44-9)。外面色調は暗赤褐色を呈するもののが多く、自然釉のみられるものもある。鉢は高台の付くもので底部内面はかすかに摩滅している。スジメはみられない。外面の色調は橙色を呈する。

陶器：14号土壙よりの出土である。長胴を呈する壺の破片である。外面には赤黒色の鉄釉が全面にみられ、内面にも一部みられる。内面・断面の色調は淡黄色を呈する。

磁器・茶碗：14号土壙より2点出土している。(図54-2・3)。器厚は1mm程の薄でのもので、内外面には青色の花柄の染付がみられる。断面色は白色を呈する。

土師質土器

I型に対し器高が低く皿形を呈する。製作に際しロクロを使用しており、底部には回転糸切りの痕跡がみられる。無調整のものである。土師器に較べて胎土があらく、器厚もある。広義のかわらけと考えられる。(図54-1)

覗

周縁等が欠損しており全容は不明であるが脚付きの風字碗である。板状の端部を折りまげ周縁とし内側に隆帯をUの字状に貼り付け、陸部と海部を区画している。陸部は研磨が顕著である。陸部周縁には朱が観察される。成形はヘラケズリが主体を占める。(図48-14)

瓦

重弁蓮華文軒丸瓦(図43-5)：1点出土している。瓦当面が約半分欠損しており、丸瓦部も一部残存するが接合部上面が剥離している。瓦当文様は8葉の重弁で小弁は先端が尖出している。中房蓮子は欠損しているが1+4と思われる。蓮子は輻長である。丸瓦部凸面は綫位のヘラケズリがみられ、凹面には(1cm中6×9本)布目痕がみられる。

丸瓦は10点出土している。ほとんどが破片である。造瓦技法の違いから2類に分類できる。

I類：粘土板巻き作りのもので凹面に糸切り痕跡のみられるものである。凹面には目の細かい(1cm中9×10本)布目痕がみられ、面取りも観察される。凸面は繩叩き目がみられ、ナデによる磨削しのあるもの(図44-1)と凸面に平行叩き目のみられるものがある(図44-2)。型態の判明するものは行基式瓦である。

II類：粘土紐巻き物りのものである。凹面には目の細かい(1cm中10×10本)布目痕がみられ、面取りも観察される。凸面には繩叩き目がみられナデ調整が施されている(図44-3)。

以上が出土した瓦の特徴である。重弁蓮華文軒丸瓦は欠損品であるが、陸奥国分寺創建期のものと特徴が一致し、製作年代は奈良時代後半のものと考えられる。南小泉遺跡の北方約2km地点に国分寺が位置することからも、何らかの理由で当地点にもたらされたものであろう。丸瓦は2類に分けられたが、II類の瓦は国分寺周辺で普遍的にみられるものであるが、I類の特徴をもつものは陸奥国分寺にはみられなく、郡山遺跡でみられる。また、凸面に平行叩き目をもつものは仙台市周辺では大蓮寺窯跡と燕沢遺跡のみで確認されているもので、製作年代は多賀城創建期以前又は創建期に比定されているものである。
(註8)
(註9)
(註10)

土製品

土玉が2点出土したのみである。大形のもの(図20-2)小形のもの(図20-3)がある。中央部には孔が穿がたれている。成形は粘土を丸めたのみのもので調整にはナデがみられる。

胎土・焼成とも土師質である。

石製品

石製品には石庵丁、石帶、砥石、板状石製品がある。

石庵丁：両端が欠損している。刃部は両面より砥がれており尖銳で、背の部分は丸くおさまっている。身下部に両面から穿がたれた径7mm程の孔が二ヶ所みられる。最大厚は8mmを計る。石材はシルト岩である。（図44-4）

石帶：巡方である。大きさは28×25mmを計りほぼ正方形である。厚さは5mm程で均一である。裏面をのぞく各面は研磨されている。裏面には対角線上に4対の計8ヶの穴が穿がたれ貫通している。石材は大理石である。（図20-6）

砥石：計5点出土している。大形と小形のものがある。大形品はやや変形した長方体を呈していたと考えられるもので、上下・両側面の4面が砥面として使用されている。砥面中央部は著しく磨り減っており、両接点部は孤状を呈する。上下端部には成形時の敲打痕がみられ、面はかすかに磨り減っている。材質は凝灰岩である（図20-5）。小形品は形状のわかるものに短冊形と分銅形がある。短冊形のものは上下端部が欠損しているが、上下・両側面の4面が砥面となっている。砥面には細かい溝が認められる。材質は粘板岩である。分銅形のものは上端部が欠損しているが残存面は全て砥面となっている。各面には細かい溝が認められる。材質はシルト岩である。他に安山岩のものがある。

板状石製品：下部が欠損しているが長方形を呈する。上面・上端部・左側面には研磨がみられ平坦となっている。左側面と裏面は自然面となっている。上面中央部には「大」の刻線がみられる。大の文字とも考えられるが、各所に刺突がみられ人形とも考えうるものである。（図65-2）

金属製品

鉄製品では鋤先・鎌・刀があり、銅製品では古銭・棒状銅製品がある。

鋤先：2個体分出土している。銹化が著しく刃部等の特徴は不明である。刃部から側縁にかけて木質が残存するものがある。（図13-3）

鎌：雁又式鉄鎌が1点出土している。鎌先端部が大きく「Y」字状に開き、先端は細く尖っている。長さ6.5cmに較べて厚さが4mmと薄く平板状を呈している。

刀：刀と刀子がある。刀は銹化が著しく全容は不明であるが、鍛造品でもあり形状から刀と考えられるものである。14号土壤出土である。刀子は3点ある。全て平棟平造りである。図51-1のものは刀身長が17.2cm、刀長9.3cmを計り、刃も明瞭にみられる。切先はフクラが枯れて

いる。蓋には鋳化した木質が付着している。

古錢：北宋錢が二点出土している。「熙寧元宝」「開元通宝」である。書体は真書である。
(図13-8、図65-4)

棒状銅製品：両端が欠損している。断面は七角形を呈し、内側は中空で円形である。厚さは1mmを計る。表面に鍍金が施されている。(図13-7)

動物遺存体

1号溝跡と14号土塙から出土している。1号溝跡では馬の歯があり、14号土塙ではアサリの貝殻・シカの歯・大腿骨・基節骨・椎骨が出土している。特に大腿骨は骨端部が癒合しておらず幼体であることが確認されている。

2. 出土遺物の年代と問題点

出土した遺物は前節で述べたように多種にわたるが、編年体が確立されつつある土器類以外の遺物はそれ自体で年代を与えることは現時点では難があるものが多い。そのため遺構等で共伴している土器類の年代から比定することが妥当であると考えられ、当節では割愛する。

土器類は多種にわたるものが出土しているが、ここでは出土量が多く、強い共伴関係もみられる1号住居跡と3号住居跡出土遺物の組み合わせを中心に考えてみたい。特に、遺存の良好な土師器環B類と須恵器環を中心とする。ここで土師器環B類と須恵器環の特徴をあらためて略述する。

土師器環B I類：他の類に較べて器高が低く全体的に扁平な器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものと内窓気味に立ち上がるものがある。再調整のものと無調整のものがある。切り離しの判明するものは回転糸切りである。

B II類：全体的に底径が大きく深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。再調整がみられる。切り離しの判明するものは回転糸切りである。

B III類：口径に対し底径が小さく、やや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるもの、内窓気味に外傾しながら立ち上がるもの、内窓気味に外傾しながら立ち上がり口縁部でわずかに外反するものがある。再調整のみられるものと無調整のものがある。切り離しの判明するものは回転糸切りである。

B IV類：口径に対し底径が小さく、やや深めの器形をもつ。B III類に類似するが底径がさらに小さい。体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾しながら立ち上がる。無調整である。

3号住居跡の遺物はほとんどのものが貼床下層からの出土であり、状義の共伴関係とはなりがたい面はあるが、新3号住居跡構築以前の一括発掘資料として広義の共伴関係とした。

須恵器坏Ⅰ類：他の類に較べて深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。無調整である。切り離しは回転ヘラ切りである。

Ⅱ類：全体的に器高が低く扁平な器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。再調整のあるものと無調整がある。切り離しの判明するものは回転糸切り・回転ヘラ切りがある。

Ⅲ類：Ⅱ類に類似するがやや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるものと内寄気味に外傾し立ち上がるものがある。再調整のみられるものと無調整のものがある。切り離しは回転糸切りと回転ヘラ切りがある。

Ⅳ類：Ⅲ類に類似するが口径に対し底径の小さめのものである。体部から口縁部にかけて内寄気味に外傾しながら立ち上がる。再調整のみられるものと無調整のものがある。切り離しは回転糸切りである。

土師器坏	1号住居跡		3号住居跡		須恵器坏	1号住居跡		3号住居跡	
	B I	0	0%	5	46%	I	0	0%	0
B II	1	2	3	27	II	0	0	5	42
B III	45	68	3	27	III	7	64	7	58
B IV	20	30	0	0	IV	4	36	0	0

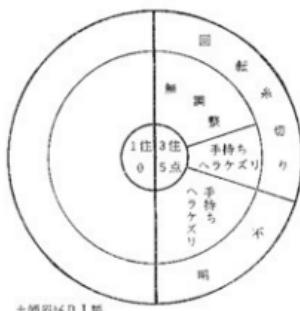
表27 1号・3号住居跡出土土師器坏・須恵器坏分類集計表

上記の表で示されるように、1号住居跡と3号住居跡では出土した土師器坏B類と須恵器坏の類の組み合わせに違いがみられた。

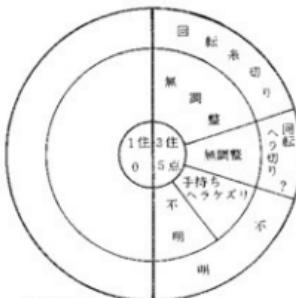
1号住居跡 土師器坏B II・B III・B IV類と須恵器坏III・IV類で構成

3号住居跡 土師器坏B I・B II・B III類と須恵器坏II・III類で構成

このように両住居跡間を比較すると、1号住居跡では土師器坏B I類がなくB III・B IV類が主体を占め、須恵器坏ではII類がなくIII・IV類で構成されており、3号住居跡では土師器坏B



土師器坏B I類



須恵器坏II類



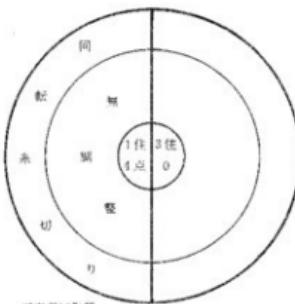
土師器A 相



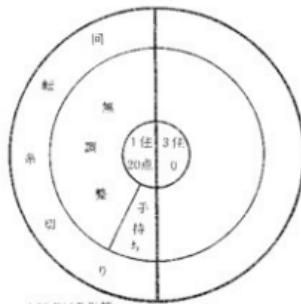
須應器B 相



上加器A・B 相



須應器A 相



上加器B 相

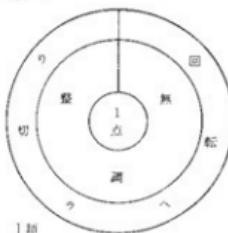
表28 1号・3号住居土師器・須應器環調整度合

土師器



日子類

須患器



日始類



日目類



月類



日首類



田類



日背類



合類

表29 掲載土師器・須患器環調整度合

IV類がなくB I・B II・B III類で構成され、須恵器坏ではIV類がなくII・III類で構成されている。つまり、両住居跡に共通した類構成（土師器坏B II・B III類、須恵器III類）と互いにみられない類（土師器坏B I類とB VI類、須恵器坏II類とIV類）の存在がみられるのである。このことは、土師器坏B I類とB IV類・須恵器坏II類とIV類の間に時間的差異があることを意味しているとも考えられ、各類の特徴を比較し前後関係について考えてみたい。

土師器坏B I類は全体に器高が低く扁平な形で口径に対し底径が大きいのに較べ、B IV類は全体的に器高が高く口径に対し直径が小さい特徴がみられる。調整に関してはB I類では大半が再調整（手持ちヘラケズリ）を施こすのに対し、B IV類ではほとんどが無調整である。同様にB II・III類の調整についてみると、B II類はB I類以上に再調整が用いられ、B III類はB IV類程ではないが無調整のものが大半を占めている。つまり、器形（類）の差異に加え類ごとの再調整の割合にも差異が認められるのである。これらの土器は土師器編年での「表衫ノ人式」^(註1)にあたるもので、平安時代全般にわたり使用されたと考えられており、阿部義平・桑原滋郎各氏^(註12)は土師器坏を中心として成形・調整技法の点から分類し、製作技法の手数の省略化により変遷が認められるとしている。このことは再調整のあるものから無調整のものへ変遷すると考えられ、この点に注目するとB I類はB IV類よりも古い様相をもつものと考えられる。

須恵器坏II類は全体に器高が低く扁平な形で口径に対し底径が大きいのに対し、IV類は器高が高く口径に対する底径が小さい特徴がある。調整についてはII類で若干再調整（手持ちヘラケズリ）が施こされるが、両類とも無調整のものが主体を占める。底部の切り離し技法に関するII類では回転ヘラ切りと回転糸切りの両技法が認められるのに対し、IV類では全てが回転糸切り技法を用いている。同様にI・II類についてみると、I類は資料が1点のみで普遍的特徴を示せないが、無調整のもので切り離しは回転ヘラ切りである。III類は無調整のものが上体を占め、切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りの両技法がみられる。岡田茂弘・桑原画氏^(註14)は多賀城周辺における須恵器坏を窯跡での瓦との共伴関係から分類し、製作技法の違いを中心として各類の変遷を提示し年代まで言及している。これらの点から両類を切り離し技法の面からみると、技法的に古い様相とされる回転ヘラ切りを含むII類は回転糸切り技法のみで構成されるIII類よりも先行するものと考えられる。

以上、上師器坏B I類とB IV類・須恵器坏II類とIV類の相対的位置関係についてみたが、これらから土師器坏B I・B II類と須恵器坏II・III類を主体構成要員とするものは土師器坏B III・B IV類と須恵器II・III類を主体構成要員とするものよりも古い様相をもつと考えられる。つまり3号住居は1号住居に較べて時間的に先行すると考えられる。

次に、1号・3号住居跡の年代について考えてみたい。両住居に類似した構成要員をもつ遺跡と比較し検討してみる。上新田遺跡第8号住居からは3号住居と類似した土器群（土師器坏^(註15)

B I・B II類と須恵器環II類)が出土している。土師器環の中には体部下端から底部全面に再調整が施こされ丸底状を呈するものが含まれており、土師器環・須恵器環とも切り離し技法が判明するものは回転ヘラ切りである。当遺跡3号住居とは器形的類構成で類似点がみいだせるが、切り離し技法に回転糸切りと回転ヘラ切りという違いがみられる。報告では切り離し技法や器形等の面から表形ノ入式初期の段階のものと考えられるとしており、当遺跡3号住居の年代は上新山遺跡第8号住居より時間的に降るものと予想される。また、水入遺跡では土師器環(M16) B I・B II類(当遺跡土師器環B I・B II類に類似)が主体を占め、それにB III類(当遺跡土師器環B III・B IV類に類似)が加わる土器構成を9世紀中葉の年代を想定している。これらの点を考え合わせると当遺跡3号住居は9世紀前葉から中葉を中心とする年代が考えられる。安久東遺跡各住居では当遺跡土師器環B IV類・須恵器環IV類に類似する上器が構成主体となり出土しており、伴出している灰釉陶器から11世紀の年代が与えられている。当遺跡1号住居は土師器環B III・B IV類、須恵器環III・IV類が構成主体となるもので、土師器環B III類と須恵器環IV類が比率的に多く出土している。これらから当遺跡1号住居は当遺跡3号住居と安久東遺跡各住居の土器構成の中間的様相を示していると考えられ、10世紀を中心とする年代が考えられる。

次に、高台付皿・塊・小瓶と呼称した上器について若干ふれてみたい。これらの上器は各々高台付環・壺として考えうる器形をもつものであるが、あえて上記の名称を用いている。高台付皿とした土器は皿部が浅く容積が环などよりも少なくなり、什器としての機能面からみて器形の分化、または灰釉陶器等の関連から生じた器形と把えることも可能と考えられる。塊・小瓶としたものは器形からみて、猿投窓跡出土品に類似しており、特に塊は高台部が三日月高台を呈するという灰釉陶器の特徴を見い出すことができ、影響を受けていることは十分に考えられるものである。これらから各器種は灰釉陶器の影響のもとで発生したものとも考えられ、類例としては青木遺跡で壺に類似した土器があり、鴻ノ巣遺跡では段皿の器形をもつ土師器が出土している。全体としては出土例も少なく、普遍性には欠けるが集落の性格・土器組成の一端として注意されるべきものと考えられる。

3. 墨書き文字について

墨書き文字は5種類計46点が確認されている。全て文字と解され記号等のものは含まれていない。墨書き文字は土師器環・高台付皿・須恵器環の小形の器種のみに書かれている。文字は土器の体部に正位体で書かれているものが大多数で、底部に書かれているものが須恵器に一点あるのみである。

文字の種類には「比」・「升」・「染」・「搏々」・「守カ」があり、「守カ」以外のものは一文字で構成されている。「比」の文字と確認されるものは40点あり、他のものは1点づつと、「比」の文字

が圧倒的に多い。また、上記の墨書文字は住居跡から一括出土した土器に書かれていたものが大半を占めている。

これらの崩書文字が一文字で構成されているものが大半であることは述べたが、これらは一文字で意味をもつものか、それとも何らかの文字（地名・人名等）の省略形態であるのか不明である。他に同種の文字の発見例もなく、また古代における宮城郡の地名に該当するものもみられない。このような点からも現時点では墨書文字についての性格については不明と言わざるおえない。



図69 墨書文字書体

	比	升	染	守	得	不明
1号住居跡	38	1	1	1	1	
3号住居跡					1	1
7号土塙	1					
8号土塙	1					

表28 墨書文字出土遺構と種類・点数

VII. 発見遺構の総括

1. 住居跡について

住居跡は2軒確認された。2軒とも竪穴式住居跡である。出土遺物から両者とも表杉ノ入式期のものであることが確認されている。

両住居跡の特徴については下記の表のとおりである。

住居番号	平面形	規模	面積	カマド	柱穴	方向	備考
1号	隅丸方形	8.69×6.67	57.96	なし	4本柱	N 38°-E	櫛状石室 壁面剥離
3号	隅丸方形	7.46×6.48	約43.6	北側 竪洞	1本柱穴	N-21°-E	貼床 石棺

(単位 m・m)

表29 1号・3号住居跡観察表

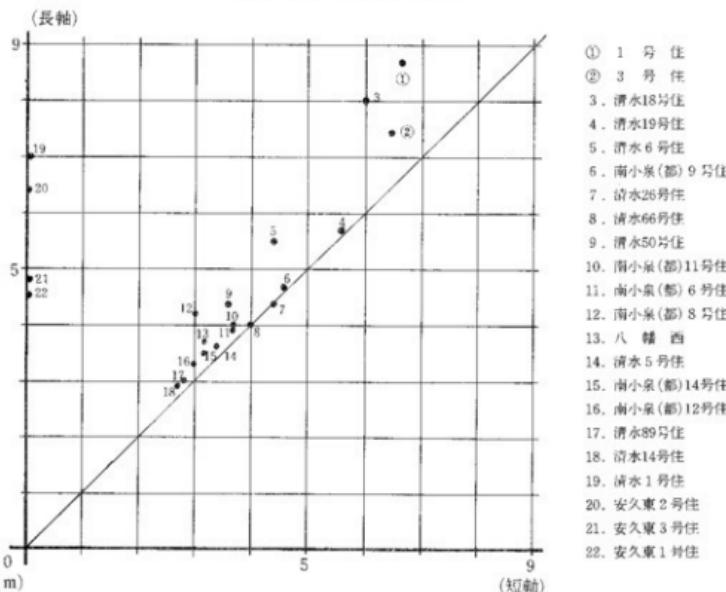


表30 仙台周辺の平安時代の住居跡規模

両住居跡とも一辺6mを超す大形のもので、仙台周辺の平安時代の住居跡と比較しても大形に類するものである。両者に共通する点は大形であることのみで、住居構造には大きな違いが

みられた。カマドは3号住では二ヶ所で検出されている。遺存状態が不良で、煙道部は確認されたが、焚口部については炭化物・焼土が確認されたのみで、構造については不明であった。北側のカマドでは作り替えがみられ、東側のカマドは貼床を除去した時点での焚口部が確認されている。1号住では焼土・炭化物等も検出されず、カマドは付設されていなかったものと考えられる。柱穴は1号住では3基みられ、4本柱で構成されていたものと考えられ、柱痕跡は径40cmと大きなものであった。3号住は周溝内に柱穴が巡る壁柱穴で構成されている。出土遺物の検討から両者には時間的差異が確認されており、構造等の相違は時間的なものに含まれる各々のもつ構成単位の性格の違いによるものと考えられる。

住居跡は出土遺物の検討から、1号住では10世紀前後頃、3号住では9世紀前半頃の年代が想定された。3号住が1号住に先行するものである。また、両者から出土した遺物には墨書き器・金銅製品、石帶などの一般集落から出土する遺物とは趣きを異にするものがある。このように、両住居跡は構造・規模や出土遺物に特異な面をもっており、一般的に集落で確認される住居とは性格を異にするものと考えられる。

2. 挖立柱建物跡について

掘立柱建物跡は計7棟確認されている。全て調査I区に位置しており、2軒の住居跡を西側から南側にかけて取り囲むような配置がみられる。

これらの建物跡は建物方向において大きく三つのまとまりがみられる。

A (N-22°-E) : 5号掘立柱建物跡

B (N-42°-E) : 3号掘立柱建物跡 4号掘立柱建物跡 6号掘立柱建物跡

C (その他) : 1号掘立柱建物跡 2号掘立柱建物跡 7号掘立柱建物跡

Aは1棟のみで、建物北側部が調査区外へ延びるため全容は不明であるが、東側に間仕切りまたは扉をもつものである。3号住居跡とほぼ同方向の配置をもつ。

Bは3号・4号・6号建物跡で構成される。3・4号建物跡は近接しており同時存在は考えられず、建て替えの可能性がある。6号建物跡は全ての柱穴が判明しておらず全容は不明であるが、建物方向としてBグループに近似するため加えておいた。これらの建物跡は1号住居跡とほぼ同じ方向をもつものである。

Cは上記のグループに含まれないものである。

以上のように掘立柱建物跡は建物方向を主として類別したが、A・Bともに住居跡と強い関連をもつものと考えられ、一つの構成単位として扱われるものである。近年同様な遺構の報告例が増加しているが、性格としては倉庫等が妥当と思われるが不明である。年代は住居跡と同様と考えられ、Aは9世紀前半頃、Bは10世紀前後頃と考えられる。Cでは2号建物跡が

1号住居跡に切られており平安時代中葉以前と考えられ、他は不明である。

建物跡番号	幅行×梁行	種方向	柱間寸法(cm)			面積(m ²)
			柱	間	梁	
1号	東西陣 2×4	N-12°-E	柱北列 220+240 (440) 柱南列 242+239+217+240	梁東側 168+168 梁西側 180+300	柱長 168 梁長 300	43.6
2号	東西陣 2×3	N-35°-E	柱北列 194+212+228 柱南列 230+(4400)	梁東側 240+262 梁西側 254+257	柱長 240 梁長 262	32
3号	東西陣 2×2	N-42°-E	柱北列 254+252 柱南列 252+280	梁東側 206+186 梁西側 168+250	柱長 254 梁長 186	21
4号	南北陣 2×3	N-42°-E	柱東列 150+150+150 柱西列 440	梁北側 150+150 梁南側 440	柱長 150 梁長 150	17.7
5号	南北陣? 2×3×3	N-22°-E	柱東列 (380)+ 柱西列 184+194+1	梁北側 — 梁南側 (378)+176	柱長 — 梁長 —	—
6号	2×3?	N-40°-E	西側柱北列 150+150 柱東列 98+116	北側東西列 178+166	柱長 150+150 梁長 178+166	18.2?
7号	万能陣 1×2	N-3°-E	柱東列 218	梁南側 225	柱長 218 梁長 225	4.9

表31 掘立柱建物跡一覧表

3. 溝跡について

溝跡は10条確認されている。全体的規模は不明であるが、断面規模等から大形（上幅が3mを超す）ものと小形（上幅が1m前後または以下）のものに分けられる。溝跡はどの方向に規則性はみられなく、他の造構との関連もうすぐ性格は不明となっている。1号溝跡を除いて全体的に出土遺物も少なく多くは時期不明となっている。溝跡の中で特徴的なものについて若干ふれてみる。

1号溝跡は調査区南壁へ屈曲しており規模も大きいことから、何らかの区画施設としての性格が考えられた。しかし、確認範囲が狭いこともあり方向等に不明な点があり断定にはいたらなかった。1号掘立柱建物跡とは方向の点で留意される。また、当溝跡からは多量の遺物が出土しており出土状況から廃棄されたものと考えられるが、出土遺物の検討から当溝跡

溝跡番号	断面形	上 墓 幅	底 高 幅	深 さ	備
1号	逆台形	300	30~80	120~130	土師器・須恵器・赤焼土器・石仮丁・獸骨
2号	逆台形	40~70	30~50	5~20	弥生土器・土師器
3号	皿 形	30~65	18~40	4~10	土師器
4号	逆台形	40~65	25~46	18~20	土師器
5号	U字形	42~78	30~63	20~25	土師器・須恵器
6号	U字形	80~90	60	23~31	土師器・須恵器
7号	U字形	20~46	12~26	10~20	土師器
8号	逆台形	130~200	58~63	40~80	土師器・須恵器
9号	U字形	60	30~40	15~18	土師器・須恵器
10号	皿 形	400以上	160~180	200	土師器

表32 溝跡一覧表

(単位 cm)

は1号住居跡構築時には機能は停止していたと考えられる。

2号溝跡は重複関係をもつ遺溝（住居跡・掘立柱建物跡）全てに切られており、時期は平安時代以前と考えられるが、組み合う遺溝・性格については不明となっている。

10号溝跡は確認範囲は狭いが上幅4mを超す大形のもので、底面を中心として砂層が確認されており、小河川の可能性も考えられる。

4. 井戸跡について

井戸跡は4基確認された。形態から、石組の枠をもつもの（2号井戸跡）と素掘りのもの（1号・3号・4号井戸跡）に分けられる。4基の井戸跡のうち3基が調査区南側のV区で確認されている。

出土遺物には土師器・須恵器・中世陶器・陶器と各時期のものがある。井戸跡の年代を決定する資料はなく時期は不明であるが、1号・4号井戸跡からは陶器が出土しており近世以降のものと考えられる。

井戸跡番号	平面形	大きさ	深さ	形態	備
1号	円形	92~100	195以上	素掘り	土師器・陶器
2号	円形	260~300	220以上	石組	須恵器
3号	円形	95~103	113	素掘り	土師器・須恵器
4号	円形	115~120	165	素掘り	土師器・中世陶器・陶器

(単位 cm)

表33 井戸跡一覧表

5. 土壌について

土壌は計18基確認されている。平面形態から大きく円形と方形の二者に分けられ、さらに下記に細分される。

土壌の形態	円形	円形	7号土壌	14号土壌	16号土壌	20号土壌
		椭円形	15号土壌	17号土壌	18号土壌	19号土壌
		長円形	22号土壌			
		扇形	1号土壌			
方形	方形	方形	6号土壌			
		隅丸方形	2号土壌	5号土壌		
		不整方形	3号土壌	8号土壌	9号土壌	10号土壌

以上に土壌は細分されるが、全体的に出土遺物が少なく土壌間の関連もみられず、時期につ

いても不明のものが多い。そこで、土壌の中でも検出状況・出土遺物において特徴をもつものについて個々に述べてみる。

1号土壌：円形を基調とするが南側がすぼまっており、平面形が扇形を呈するものである。底面は北側から南側にかけてゆるい傾斜をもち、底面大半と壁の一部が焼けており、焼け面の厚さが1~2cm程認められる。出土遺物には土師器・赤焼土器・須恵器がある。この土壌は焼け面の状況から「焼成遺構」としての性格が考えられる。平面形が扇形を呈することは、焚口部をもつ構造と想定され、意図的形態と考えられる。

このような構造をもつ遺構は、上新田遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡・五輪C遺跡等で検出されている。平面形は円形や方形のもので、当遺構とは形態的に若干の違いがみられるが、底面や壁面の状況から同種のものであることがいえる。これらの遺構は「土器焼成施設」としての性格があたえられている。このことからも1号土壌は上記の性格をもつ焼成遺構として考えられる。

7号・8号土壌：平面形が円形・不整方形を呈するもので、3号住居跡北東部脇に位置するものである。堆積土内より「比」の墨書きをもつ土師器坏が一点づつ出土しており、1号住居跡と強い関連をもつ土壌である。7号土壌では焼土・炭化物が多量にみられたが、焼成遺構としての性格はみられなく、性格については両土壌とも不明である。

14号土壌：平面形は円形を呈するもので、堆積土全体に炭化物粒がみられ、土師質土器皿、陶器、磁器、刀、銅製品、シカの歯・骨片、アサリの貝殻が出土地しているものである。シカを中心として考えてみると、シカの埋葬施設として性格づけられるが、副葬としての刀等について疑問が残り、現段階では性格不明となっている。

土壌番号	平面形	規 模	備 考	土壌番号	平面形	規 模	備 考
1号	扇 形	145×182	燒面	12号	円 形	95~103	(3号井戸跡)
2号	隅丸方形	168×201	燒土・炭化物	13号	方 形?	124×72-a	
3号	不整方形	120×202		14号	円 形	185	
4号	円 形	92~100	(1号井戸跡)	15号	情円形	90×105	
5号	隅丸方形	215×220	燒土・炭化物	16号	円 形	72~80	
6号	方 形?	94×93+a		17号	情円形	78×100	
7号	円 形	137~139	燒土・炭化物 「比」の墨書き	18号	情円形	90×165	
8号	不整方形	109×160	「比」の墨書き	19号	情円形	80+a	
9号	不整方形	72×121		20号	円 形	155~160	
10号	小整方形	190×315		21号	情円形	115~120	(4号井戸跡)
11号	円 形	260~300	(2号井戸跡)	22号	長円形	74×170	

単位(cm)

表34 土壌一覧表

6. 造構の構成について

発見された造構は多種にわたるが、ここでは古代に属するものについて考えてみる。

造構には、住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝跡がある。構成基準としては重複関係・方向性造物の検討が考えられる。



以上のように、時間的幅をもって造構が構成されていることが理解されるが、単独で位置する造構もみられ造構群の構成としては不十分であるが、大まかな変遷としては理解されよう。

住居跡は2軒のみの確認で全体的な構成を知るすべもないが、掘立柱建物跡を從関係として把えてみると、3号住と1号住の二群に分けられる。出土遺物の検討から3号住が1号住に先行するもので、建物跡の軸の方向性から5号建物跡が3号住と3号・4号建物跡が1号住と関連をもつと考えられる。他の建物跡については不明であるが、2号建物跡は1号住に切られしており時間的には1号住に先行するものであるが、3号住との関連については不明である。

土壙は調査区全体に分布するが、造構の構成の点からみると7号・8号土壙が構成要員として上げられる。性格については不明であるが、「比」の墨書き文字をもつ土師器坏が出土しており、1号住と強い関連をもつ。

溝跡は時間的関係は把握されるが構成要員としての位置付けは不明となっている。溝跡が調査区外へ延びることも一因していると考えられる。なお、1号溝は出土した遺物の検討から1号住構築の際には機能は停止していたと考えられ、調査区南側で東側へ屈曲しており東側において何らかの区画施設として機能していたとも考えられる。

以上、住居跡を中心とした構成を考えてみたが、調査区北側に集中する傾向がみられ、南側とは様相を異にしている。断片的ではあるが住居跡を中心としては二時期の変遷が確認され、溝跡も含めると最底四時期の変遷も考えうる。

VII. まとめ

今回の発掘調査地点は広瀬川が形成した自然堤防上の馬背状に南北に長く延びる微高地の先端部分に位置すると考えられる。

遺構には住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡、井戸跡等があるが、多くの遺構は平安時代に属するものであった。特に、住居跡は掘立柱建物跡と強い関連がみられ一つの構成単位として把えられるものであった。遺物には土器類、土製品、石製品、金属製品等がある。土器器・須恵器が量的に多く、特に土器器には墨書きもつものが多量に含まれていた。他には石帶、風字硯、縁軸陶器、金銅製品など遺構の性格を考える上で注意されるものがある。また、平安時代に属する土器は細分が可能で、住居跡間の出土土器には類構成の違いがみられ、土器変遷の一過程を推察することができた。さらに、高台付皿・塊・小瓶としたものは灰釉陶器との関連の中で考える必要がみられ、特殊な面はあるが平安時代における一面として把え得るものと思われる。

当集落の遺構のあり方は、住居を中心として掘立柱建物跡や土壙が構成要員となるもので、住居が大形である点を除けば一般的な集落構成であるが、出土遺物の面では一般的なあり方とは大きな相違がある。特に石帶などの存在は遺構のもつ性格の一端を裏付けるものと考えられる。このような中間的な性格要素をもつ遺構群は、律令制社会での末端機構としての性格を有するものとも考えうるが、断定に至る資料もなく、詳細は不明と言わざるおえない。

遺構の位置関係をみると、北側に住居跡、建物跡、溝跡、土壙等が多くみられ、南側では溝跡、土壙等がみられるのみである。また、調査区北側では遺構が北へ延びることが確認され、このような状況からみて調査区北側を中心とする範囲に集落の場の存在がうかがわれる。

以上、今回の成果は南小泉遺跡の南端部における9世紀を中心とする集落の様相の一端にとどまるもので、集落の範囲・構成については知るすべもないが、当調査地点は遺跡内における一中心地域とも予想され、平安時代における南小泉遺跡の一断面と理解されるものである。詳細な点については今後の調査に期待するものが大きい。

〈引用参考文献〉

- (註3) 伊東信雄「古代史」『宮城県史』第1巻 1957年
- (註4) 志間泰治『鐵道遺跡』 1971年
- (註5) 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』3 1950年、註11に同じ
- (註6) 白鳥良一・加藤道男他「岩切沢、栗遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 1974年
- (註7) 東北学院大学考古学研究部『栗遺跡発掘調査報告書』温故11・仙台市文化財調査報告書第14集
1979年
- 工藤哲司・成瀬茂『栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第43集 1982年
- (註8) 木村浩二他『郡山遺跡』I～III 仙台市文化財調査報告書第29・38・46集 1981～1983年
- (註9) 古窯跡研究会『仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告』陸奥国宮窯跡群II 1976年
- (註10) 渡部弘美『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第39集 1982年
- (註11) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会 1957年
- (註12) 阿部義平『東國の土師器と須恵器』『帝塚山考古学』 1968年
- (註13) 桑原滋郎「ロクロ土師器系について」『歴史』第39輯 1969年
- (註14) 岡山茂弘・桑原多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』『研究紀要 I』宮城県多賀城跡研究所
1974年
- (註15) 小井川和夫『上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集 1981年
- (註16) 森貢喜『水入遺跡』宮城県文化財調査報告書第84集 1982年
- (註17) 土岐山武『安久東遺跡』宮城県文化財調査報告書第72集 1980年
- (註17) 小川淳一『青木遺跡』宮城県文化財調査報告書第71集 1980年
- (註19) 齋沼一民・長島栄一『鴻ノ栗遺跡』仙台市文化財調査報告書第14集 1982年
- 小笠原好彦『東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題』『東北考古学の諸問題』 1976
年
- 福野博 「土器（土師器）製作遺跡について」『月刊文化財』 1977年
- 愛知県陶器資料館 特別展 猪俣窯—須恵器・瓷器から中世陶へ—

写 真 図 版



図版1 遺跡航空写真(南より) 昭和32年、○印調査地点)



調査区近景



I 区調査風景



I 区全景



1号住居跡全景



1号住居跡貯藏穴
遺物出土状况



1号住居跡
柱穴断面(P. 7)



3号住居跡検出状況

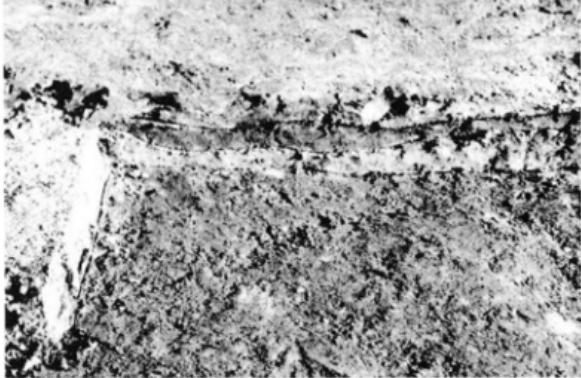


3号住居跡全景



3号住居跡
貼床除去状況

3号住居跡
貼床断面



3号住居跡東壁カマド
(貼床除去後)



1号掘立柱建物跡
全景





1号掘立柱建物跡
柱穴断面 P.5



3号掘立柱建物跡
全景



3号掘立柱建物跡
柱穴断面

5号掘立柱建物跡
周辺



6号掘立柱建物跡
周辺



7号掘立柱建物跡
全景





1号溝跡全景



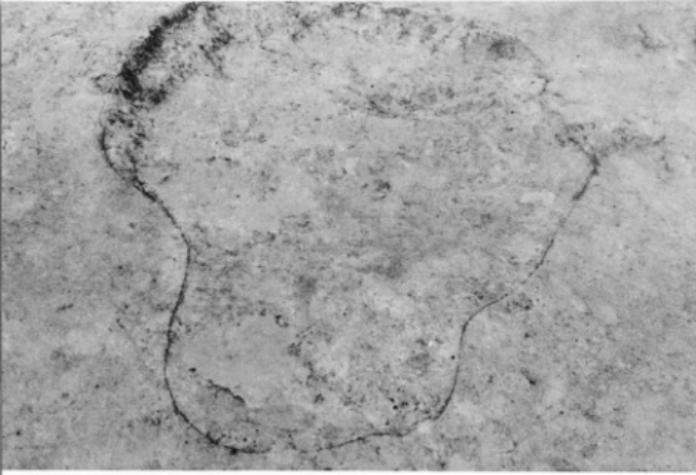
1号溝跡断面

1号溝跡南側

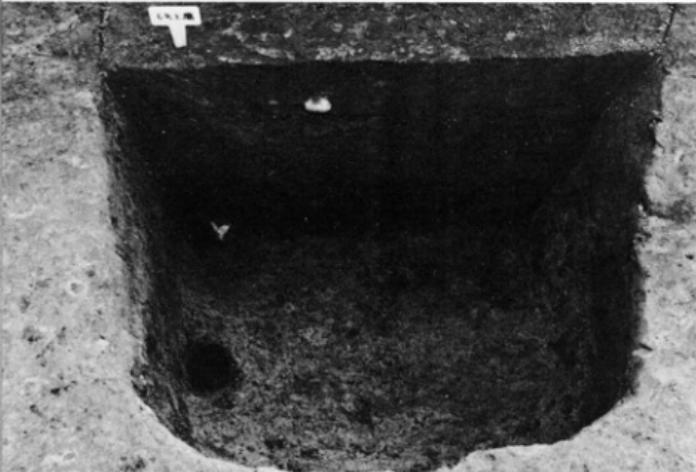


2号溝跡





1号土壤全景



6号土壤断面



7号土壤全景



II区東側



II区西侧



5号土壤全景



14号土壤全景

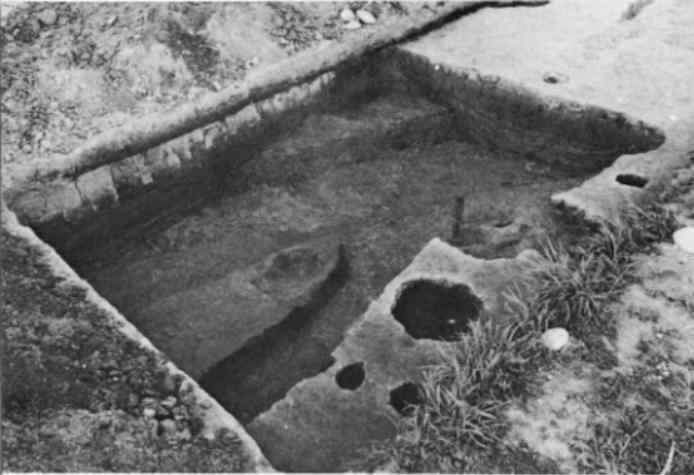


14号土壤断面



IV区全景

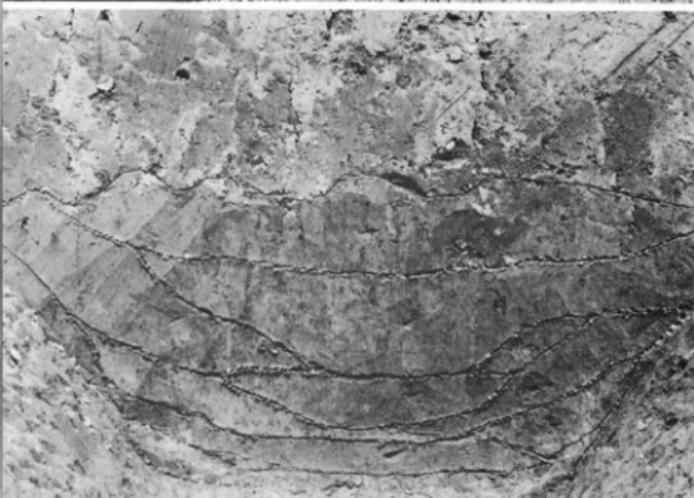




IV区西侧

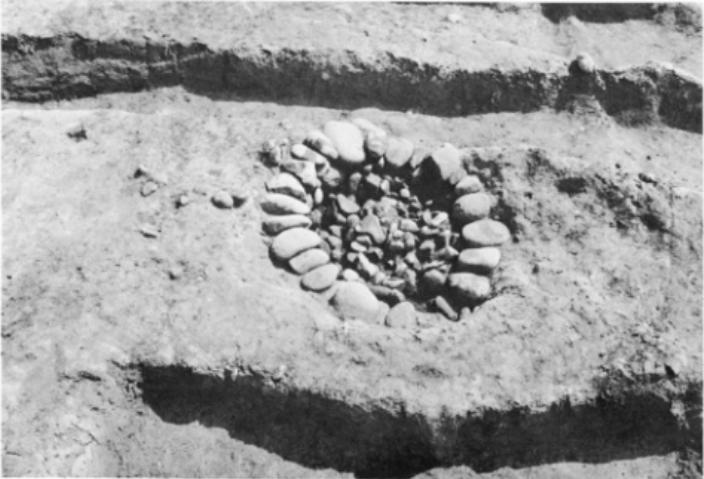


V区全景

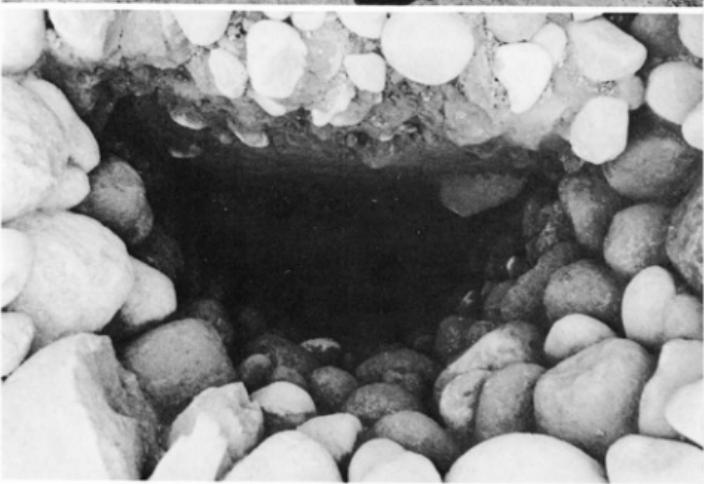


8号溝跡断面

2号井戸跡
検出状況



2号井戸跡
石相状況



2号井戸跡
掘り方断面





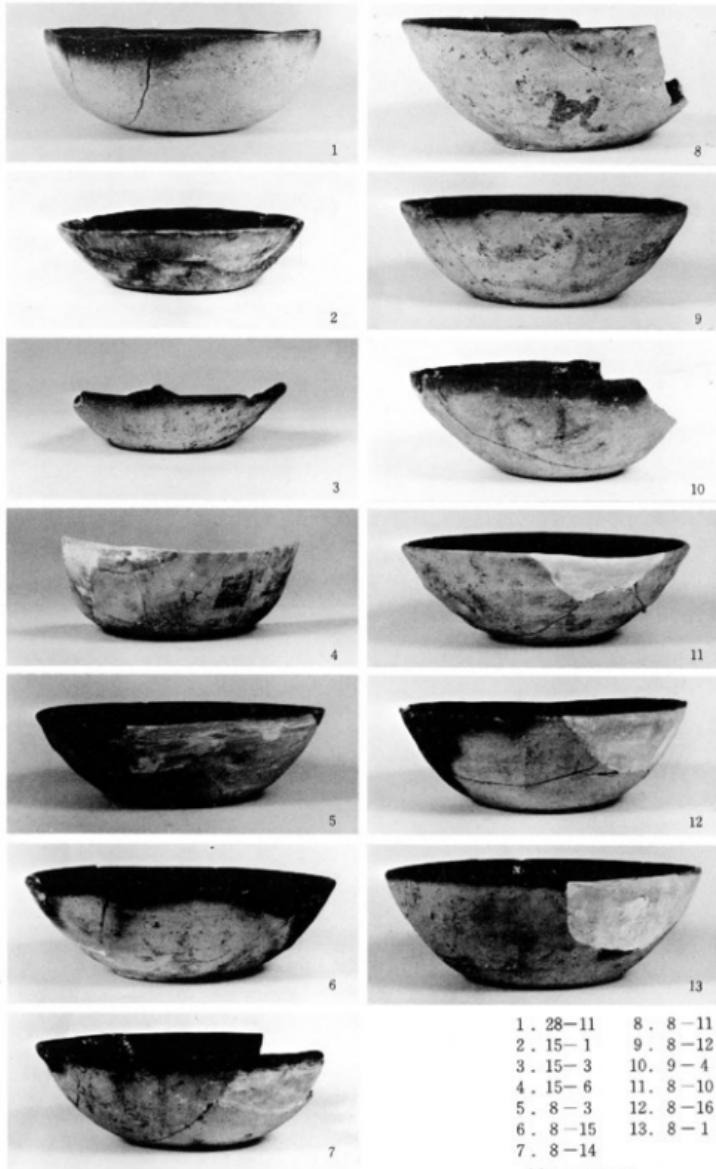
4号井戸跡全景



10号土壤全景



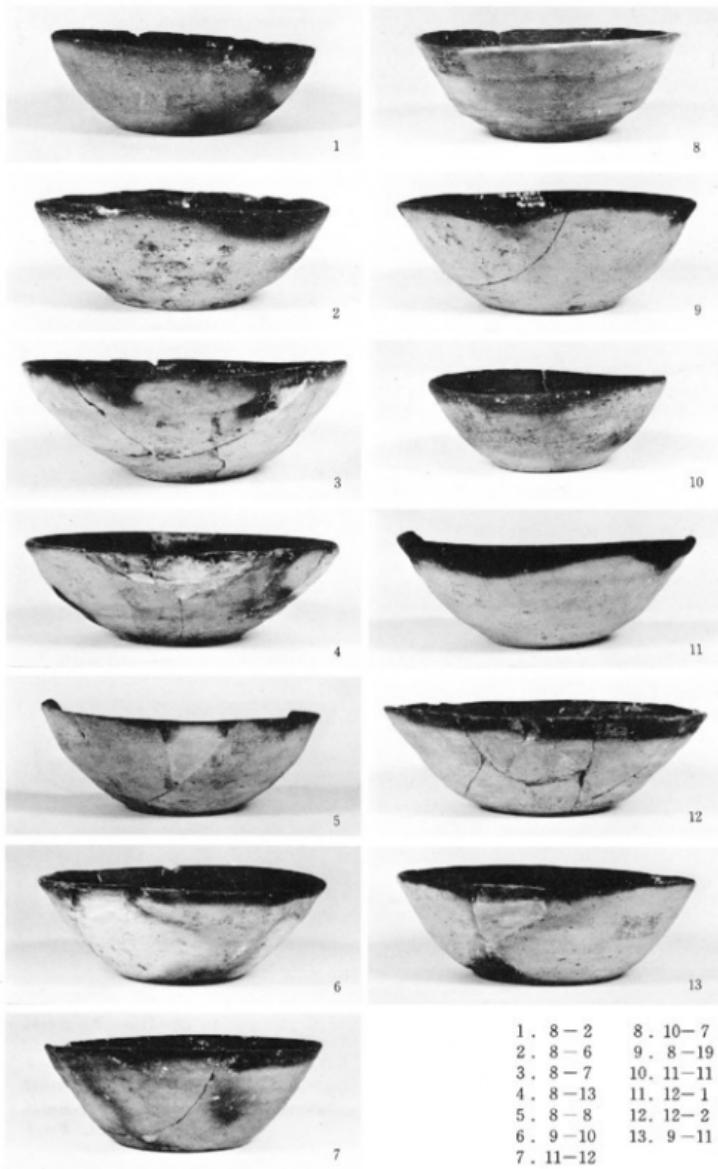
20号土壤断面



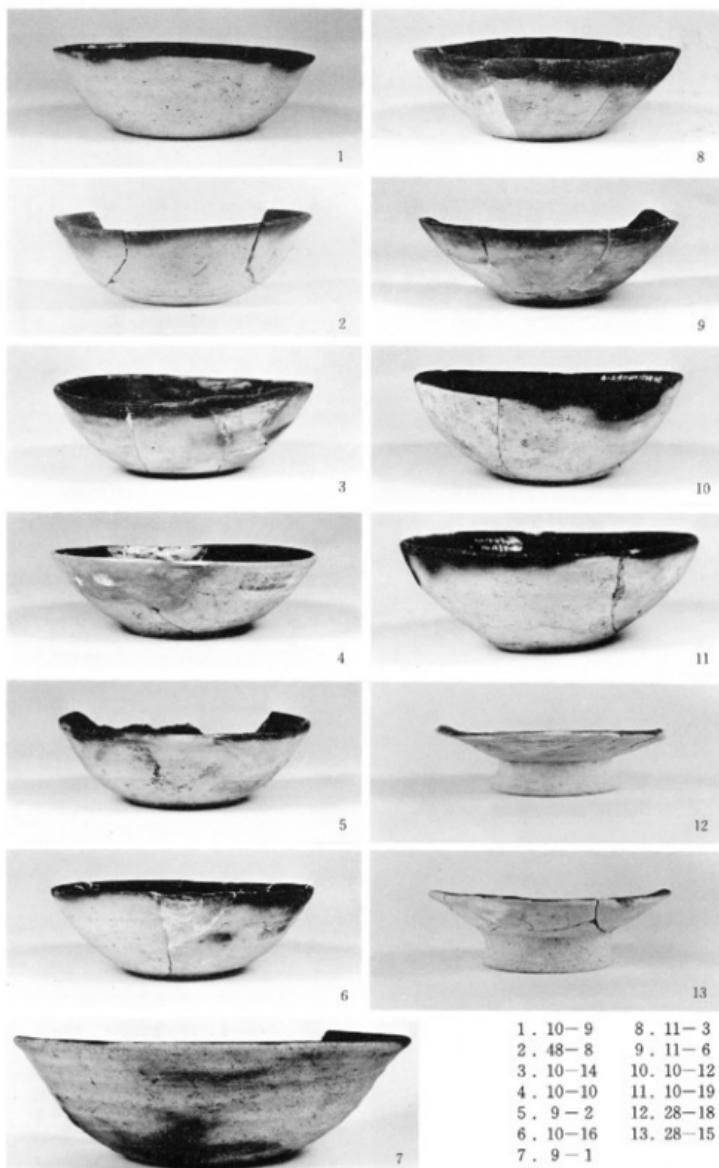
図版17 出土遺物（土器）

1 . 28-11	8 . 8-11
2 . 15-1	9 . 8-12
3 . 15-3	10 . 9-4
4 . 15-6	11 . 8-10
5 . 8-3	12 . 8-16
6 . 8-15	13 . 8-1
7 . 8-14	

(番号は図版番号)

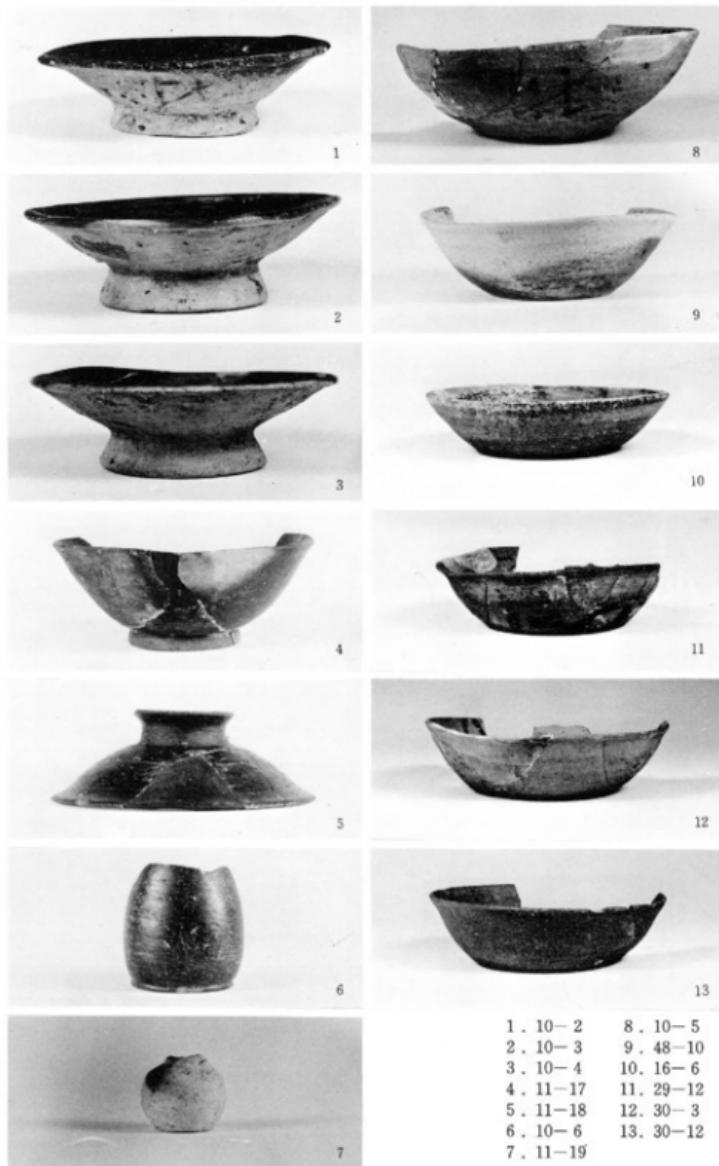


図版18 出土遺物（土師器）



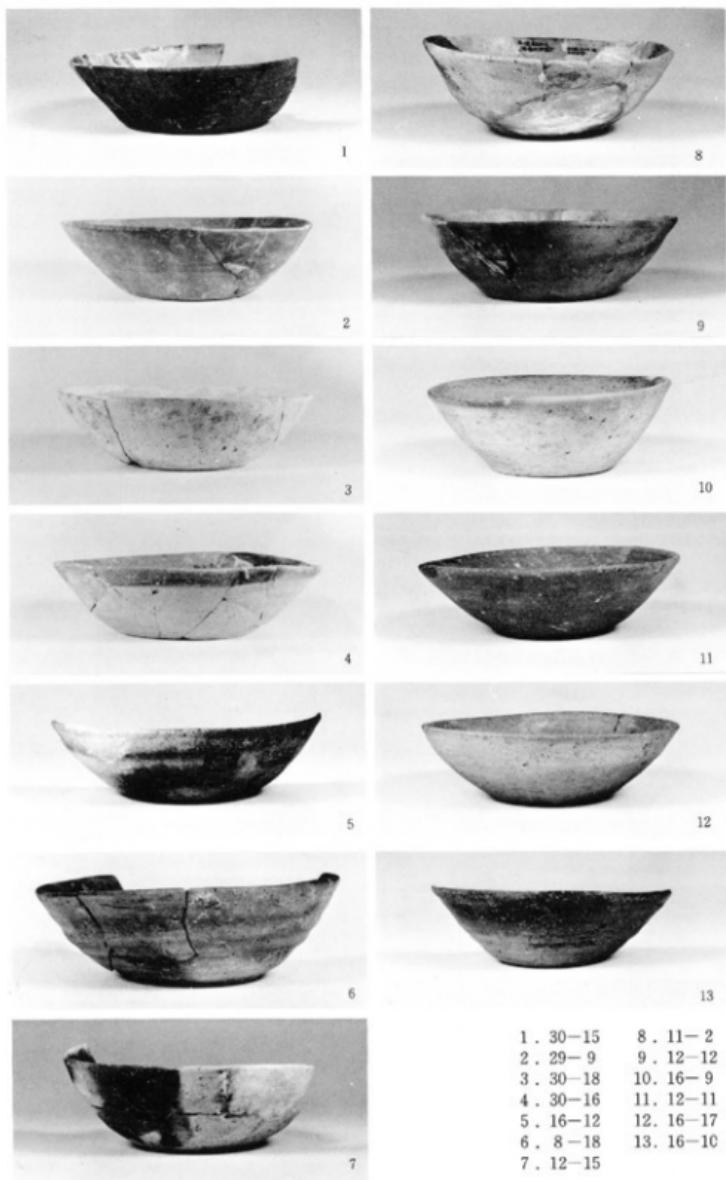
図版19 出土遺物（土師器）

- | | |
|-----------|------------|
| 1 . 10—9 | 8 . 11—3 |
| 2 . 48—8 | 9 . 11—6 |
| 3 . 10—14 | 10 . 10—12 |
| 4 . 10—10 | 11 . 10—19 |
| 5 . 9—2 | 12 . 28—18 |
| 6 . 10—16 | 13 . 28—15 |
| 7 . 9—1 | |



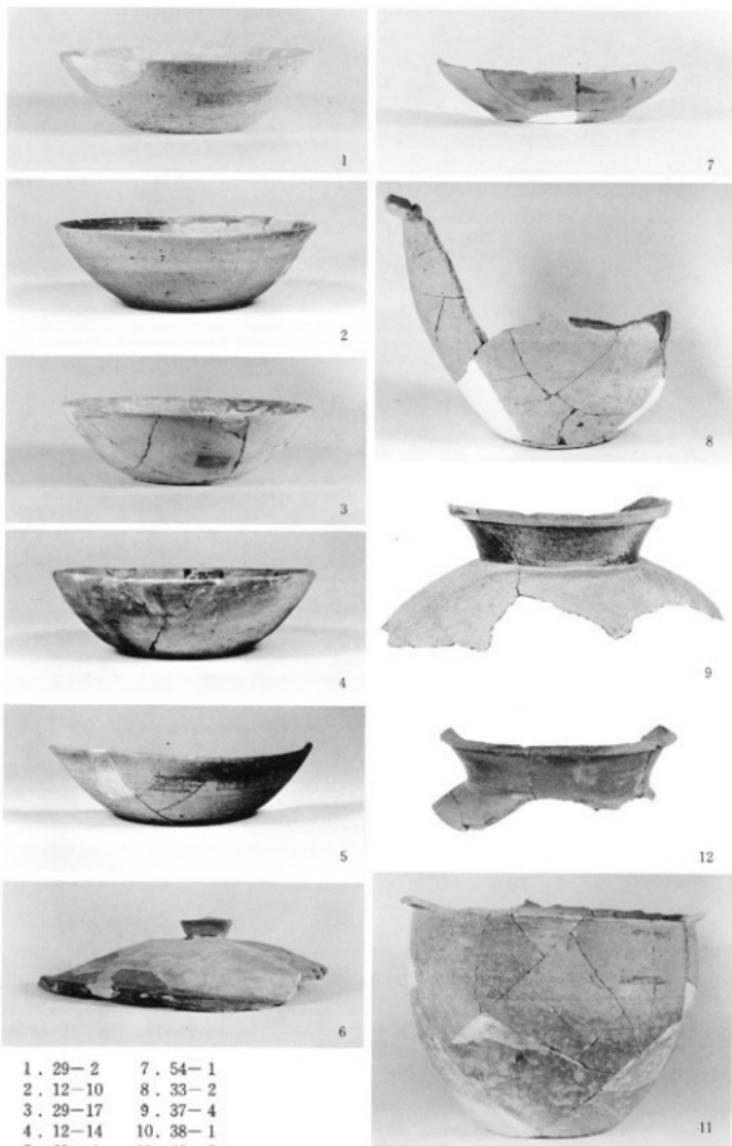
図版20 出土遺物（土師器・赤焼土器・須恵器）

- | | |
|-----------|------------|
| 1 . 10-2 | 8 . 10-5 |
| 2 . 10-3 | 9 . 48-10 |
| 3 . 10-4 | 10 . 16-6 |
| 4 . 11-17 | 11 . 29-12 |
| 5 . 11-18 | 12 . 30-3 |
| 6 . 10-6 | 13 . 30-12 |
| 7 . 11-19 | |



図版21 出土遺物（須恵器・赤焼土器）

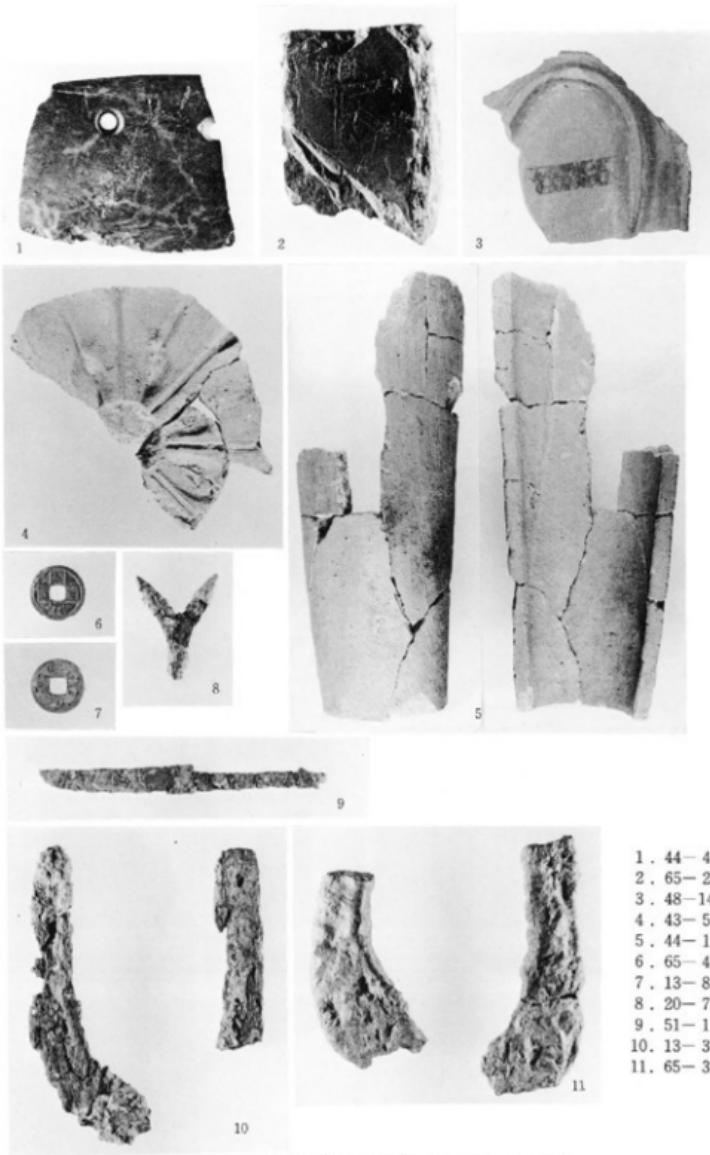
- | | |
|-----------|------------|
| 1 . 30-15 | 8 . 11-2 |
| 2 . 29-9 | 9 . 12-12 |
| 3 . 30-18 | 10 . 16-9 |
| 4 . 30-16 | 11 . 12-11 |
| 5 . 16-12 | 12 . 16-17 |
| 6 . 8-18 | 13 . 16-10 |
| 7 . 12-15 | |



図版22 出土遺物（須恵器・土師器）



図版23 出土遺物（須恵器・土製品・石製品）



図版24 出土遺物（石製品・硯・瓦・古錢・鉄製品）

1 . 44—4
 2 . 65—2
 3 . 48—14
 4 . 43—5
 5 . 44—1
 6 . 65—4
 7 . 13—8
 8 . 20—7
 9 . 51—1
 10. 13—3 + 4
 11. 65—3

職 員 錄

社会教育課

課長 永野昌一
主幹 早坂春一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
主任 山口宏
・ 渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼) 早坂春一
・ 渡辺忠彦
・ 佐藤裕輔
・ 加藤正範
主任 田中則和
・ 結城博一
・ 成瀬茂治
教諭 青沼一民
主任 柳沢みどり
・ 木村浩二
・ 藤原信彦
・ 佐藤洋
・ 金森安孝
・ 佐藤甲二
・ 吉岡恭平
・ 工藤哲司
・ 渡部弘美
・ 主浜光朗
・ 斎野裕彦
・ 長島栄一
・ 並井一格
派遣職員 高橋勝也
嘱託 鈴木実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物墨屋セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 仙台城（昭和42年3月）
- 仙台市燕沢寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 史跡陣屋町分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 仙台市南小泉法領跡古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 仙台市荒巻丘本松墓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 仙台市高沢萬葉古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 仙台市向山愛宕山崎穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
- 仙台市桜岸寺宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 仙台市中田町安久東通跡発掘調査概報（昭和51年3月）
- 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
- 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
- 南小泉遺跡－瓶窓跡調査報告書（昭和53年3月）
- 栗越跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
- 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
- 六反田遺跡発掘調査（第2、3次）のあらまし（昭和54年3月）
- 北星敷遺跡（昭和54年3月）
- 研江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
- 仙台市地下鉄開発分布調査報告書（昭和55年3月）
- 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
- 仙台市開発関係遠跡調査報告書（昭和55年3月）
- 経ヶ峯（昭和55年3月）
- 年報1（昭和55年3月）
- 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
- 第25集 仙塚遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
- 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
- 年報2（昭和56年3月）
- 郡山遺跡I－昭和56年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
- 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
- 仙台市開発関係遠跡調査報告書II（昭和56年3月）
- 湯ノ川遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
- 南小泉遺跡－都市計画道路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
- 北前田跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）
- 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 仙台市高速鉄道関係遠跡調査概報（昭和57年3月）
- 年報3（昭和57年3月）
- 郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）
- 栗遺跡（昭和57年8月）
- 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
- 茂庭一麻庭住宅跡地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報一（昭和58年3月）
- 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
- 仙台市文化財分布調査報告書I（昭和58年3月）
- 岩切細中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
- 南小泉遺跡－都市計画道路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
- 中田棚中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 神明社跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新工事地内調査報告（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第55集
南小泉遺跡発掘調査報告書

昭和58年3月
発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷機 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL63-1166
